

日小綬章を賜はり、同四十二年十二月正三位に進み皇室の信認殊に優渥なりと傳ふ、同家は祖先以來誠忠を以て一貫し文武の勳功最も偉大なり、君は固より其嫡流にして尊王の志深く鞠躬以て皇謨翼賛の功を擧げ下國民の福祉を増進す、殊に仁慈博愛にして公共事業の爲めに盡瘁せられ育英事業の爲めに苦衷せらる、東亞同文書院の如きも君の院長たるに因て面目を一新し有爲の俊才を輩出せられつゝあり、日清日露の兩大役に當ては率先して出征軍人遺族扶助の爲めに多大の資を投せらる、天下皆其仁徳に感佩せざるはなし、今や上院の權威者として侃諤の説を唱へ天下の輿望を一身に擔ひつゝあり、眞に上流社會の模範的人材たるの名に背かざる精神なりと謂ふ可し、(小石川區高田老松町七六 電話番町四五〇)

伯爵 松浦 厚君

華胄界に於ける新進の英才として將來の大成を嚮望せられつゝある伯爵松浦厚君の經歷を按ずるに抑も君家は嵯峨天皇第十八の皇子正一位

左大臣源融の後裔に屬せり、八世の孫大夫判官久肥前松浦郡宇野御厨檢校となり、延久元年西に下り松浦郡に居る因て以て氏と爲す、松浦彼杵二郡及び壹岐を領し肥前今福の梶谷に住す因て梶の葉を以て徽章と爲す六世を経て八郎定に至る、驍勇絶倫世人呼んで鬼八郎と云ふ、後醍醐帝の勅を奉じて北條氏を討ち、勳功によりて肥前守に任せらる、建武二年足利尊氏叛するに及び、後醍醐天皇皇子尊良親王を以て東國を管せしむ、鬼八郎新田脇屋等と俱に親王を奉じ各所に轉戦して屢々殊功を樹つ帝御する所の錦袴を解き寸断して將士に賜ふ、公も亦之に與る、帝吉野の行宮に崩御せるに衆情沮喪せり、吉水院僧宗信遺詔を傳へ、天下忠義の士を擧て曰く筑紫に松浦鬼八郎ありと、是に於て名聲益々顯る、既にして南朝勢微に力屈すと雖も、終身其の正朔を奉じて改めず、薨後祠を建て是を祀る崇めて若宮明神と稱す、爾來十世の後鎮信に至る、鎮信法眼に叙せられ後式部卿法印に進む天正六年八月正親町帝繪旨を賜ひ、修法の事を掌らしめらる、十五年豊太閤島津氏を征するに従ひ薩摩に赴き太閤に太平寺に謁す、親昵衆に超ふ人皆以て



榮と爲す時に肥前平戸の城主として六萬千七百石を領す、後文祿征韓の役に當り、宗義智等と小西行長に従て出征し朝鮮に在ること七年前後凡二十四戰未だ嘗て一度も敗衄せず、諸將相語て曰く義智の勇鎮信の智微りせば、行長豈名譽を得んやと、二十九世天祥は學文武を兼ね宋の文天祥の人と爲りを慕ひ、其室に扁して天祥庵と曰ふ、嘗て山鹿素行に従て稻鈴の術を修めて其蘊奥を極め、又片桐宗關に就て點茶の儀を學び深く悟る所あり、新に一機軸を出す、世是を鎮信派といふ、七傳して靜山に至る、公亦學文武を兼ね夙に勤王の志を抱き京師の皆川淇園に師事して其の經義を講ずるを聽き、京師に入れば必ず天機を奉伺せらる、常に景山樂翁の諸公及述齋一齋善庵の諸儒に師とし事へ著書數種あり就中甲子夜話の如きは二百七十有餘卷あり、公の後二世を経て詮公に至る、亦少壯文武を兼修し精通せざるなし、傍ら風流韻事を嗜み、和歌點茶、俱に蘊奥を極む、維新の前後、王事に奔走して貢獻せし所尠からず、殊勳により賞典祿三千石を賜はる、明治十一年六月縣香間祇候を命せられ十二月御歌會賛者を命せらる、明

年一月御歌會始奉行を勤む十月明宮祇候を命せらる、十七年七月伯爵を授けられ、二十一年十月宮内省御用掛常宮御養育主任を命せらる、二十三年七月選ばれて貴族院議員となり、三十二年六月從二位に進み三十六年四月勳三等に叙せらる、翌年七月再び選ばれて貴族院議員となる四十年九月三十七八年戦役の功を以て旭日中綬章を賜ふ四十一年四月十一日病革るや正二位勳二等に叙し瑞寶章を賜ふ此日遂に薨去せり、當主厚君は先代詮氏の長男にして元治元年六月を以て生る、君亦學を好み文を能くす、曾て英國劍橋大學に遊び政法の學を究む、餘事詩を善くし又和漢の學に精通せり、資性謹厚にして敏活常に同族間の推重する所となり改革派の領袖として聲望頓に揚れり、明治四十四年七月貴族院議員改撰期に當り最大多數の得點に因て當撰せらる、今期の改撰に於て改革派の全勝を占めたるは以て將來の大勢を卜するに足らん、同派の活動將に刮目に値ひす、吾人は天下國家の爲め期待する所大ならざるを得ず、伯の双肩に擔ふ所亦重しと謂はざる可けんや、(淺草區向柳原町二ノ一 電話下谷八八九 別邸豊島郡巢鴨一五三五



貴族院議員 子爵 黒田 和志君

謹んで當家の系統を按ずるに宣化天皇の曾孫多治比古王の子、左大臣島の後裔丹治峯房の後也基房、經家、助季、行季、季光、季頼、規季、季憲、實季、季國、氏季、季仲、家勝、家範、照守、直定、直守、直張を経て豊前守直邦に至り始めて姓を黒田と稱す、徳川氏に仕へて寛保二年上總國久留里三萬石に封せらる、直純、直享、直弘、直英、直温直方、直候、直静を経て直質に至る、君其後を繼ぐ實は宗義和の第六子なり、明治十四年五月從五位に同二十年十二月正五位に同二十五年七月從四位に、同三十年七月正四位に敘せられ現今從三位の榮位にあり君は嘉永四年八月十三日を以て生る、明治十四年四月家督を相續し同十七年七月子爵を授けらる、同三十九年四月勳四等に敘し旭日小綬章を授けらる、資性皓潔にして活達同族間稀に見るの徳聲家なり往年推されて貴族院議員となり上院の一角に雄名を鳴らし最も清硬の稱あり

四十四年七月改撰期に際し尙友會の推撰に因て再撰の榮を據へり、將來の發展は龜トを待たずしてそれ炳乎たるものあらん乎、(四谷區傳馬町新一ノ二〇 電話番号町三〇三五)

貴族院議員 子爵 丹羽 長徳君

貴族社會中名聲噴々たる君の閱歷を按ずるに其祖先は桓武天皇十七の皇子大納言大將良峯安世の後胤にして丹羽修理亮長政の男越前守長秀の後なり、長秀幼名萬千代後に五郎左衛門と稱す天文十九年十六歳にして織田信長に近侍し寵遇日に厚く領地屢加増あり、信長姪女を以て是に娶はす後幾多の戦場に驍名を轟かし武功赫々たり、太閤秀吉未だ木下藤吉郎と稱せし頃丹羽長秀柴田勝家の武徳を慕ひ、信長に請ふて丹羽柴田の姓一字づつを取りて羽柴筑前守と名乗られたるも寔に故ある事なり、元龜二年近江國佐和山の城主となり領地合せて十八萬石餘を領す、天正十年信長明智光秀の弑逆に逢ふや羽柴秀吉と共に光秀を誅す、信長の死後織田家相續の事につき秀吉勝家と隙を生ずるや、秀



吉を助けて勝家を滅ぼし大に武功を奏す、依て越前若狹兩國及び加州半國江州の二郡合せて百二十三萬石を領し北陸探題に補せられ越前北の莊に居城す、同十三年同所に於て薨去せり、其嫡子長重幼名鍋丸後五郎左衛門と稱す、織田右府の女を以て配せられ、天正十三年家を継ぎ同十四年秀吉佐々成政を征討の際長重が士卒に軍令を犯すものあり爲に領地を除かれ若狹一州を領す、同十五年筑紫陣の時長重が士卒再び軍令に背くを以て又封を削られ加州松任の城主四萬三千石となる、文祿四年加州小松八萬餘石を加へられ從三位參議に任じ小松城に移る封祿合せて十二萬五千四百五十石餘なり、慶長五年關ヶ原の役後長重前田利家と争ひたるの故を以て復た封を奪はる、同八年常州古渡の庄一萬石を賜はり官位舊に復し元和五年二萬石に加増し、同八年奥州棚倉の城主五萬石と爲る、寛永四年更に奥州白河に移り十萬七百石となり寛永二十年同國二本松に轉じ十五世長國氏に至る、君實は侯爵伊達宗徳氏の六男にして明治六年八月四日を以て生る、同三十五年先代長國氏の養子となり、同三十五年從五位に敘せられ同三十七年家督を相

續し襲爵被仰付、同十年正五位に敘せらる、明治四十四年七月貴族院議員改選期に當り尙友會の推す所となり以て當撰の榮を擔へり、資性温厚にして篤實恭謙身を持し鞠躬王事に勤む、寔に華胄社界の高徳家にして社會の推敬一方ならず、今や或る方面に於て一大活躍を企畫せられつゝありと聞く至誠君の如くにして始めて成功の效果に接することを得ん、吾人は切に奮起以て國家の福祉を増進せんことを至囑して止まざる也、(麻布區六本木町一 電話芝一八九八)

樞密顧問官 中牟田 倉之助君  
海軍中將子爵

抑も當家は攝政關白藤原鎌足公の末裔、六郎兵衛の後なり、六郎兵衛龍造寺隆信に從て屢々軍功あり、天正十二年島津久光と島原に戦ひ遂に隆信と共に戦死す、其子三右衛門家を繼ぎ、文祿元年朝鮮征討に從事して戦功あり後ち數代を経て武貞に至る武貞學識衆に優れ藩政指南役に擧げられ大に後進扶掖に盡瘁せり、君其後を繼ぐ實は佐賀藩士金丸武七氏の次男にして、天保八年二月二十四日を以て生る、出で、中



牟田家を相続す藩公の選抜を受け安政年間蘭學の研究仰付られ、次で三年長崎に出で、海軍の操縦を研修し、大に造詣する所あり、文久元年清國に渡り各地を踏査して歸朝す、明治元年關東御親征の舉あるや君海軍の先鋒となり東北各地に轉戦して偉功を奏す、翌二年函館五稜廓の亂起るや再び糧艘を指揮して平定の功を奏し、累進して海軍中佐に任じ、同四年八月海軍大佐に進み同年十二月榮進して更に海軍少將となり十年西南の役起るや故海軍大輔川村純義氏を扶けて、軍功尠なからず、平定後勳二等に敘し、翌十一年一月海軍中將に任じ、同十七年七月特旨を以て子爵を授けらる、此前後職を海軍大學校々長、海軍參謀長、海軍機關學校長、國防會議々員、横須賀鎮守府司令長官、吳鎮守府司令長官、海軍々令部長、兼將官會議々員、海軍勳功調査委員を経て現今に至る、今や從二位勳一等樞密顧問官海軍中將子爵の榮位にあり、

君は幼より聰明穎智にして沈毅宏量を以て名あり、夙に尊王之志厚く錦旗を擁護して維新の大業を補翼す、爾來忠誠一貫一日の荒怠を見ず

老熟圓滿の好將軍として聲望隆々たるものあり、眞に後進の龜鑑たるを失はざる也、(赤阪區青山南町六ノ六七 電話芝二六四五)

宮内省式部官 從三位子爵 稻葉正繩君

資性謹厚にして恭謙の徳を備へ、夙に和漢の學に精通して出藍の賞譽あり、早くも職を宮内省に奉じ、忠烈義膽を以て推重を受く祖先盡忠の美風を傳へて君に至る、敢て顯榮利達を希はずと雖も天寶の幸福沛然として到る是皆積徳の陽報たらずんばあらず眞に美望に堪へざる也君は孝靈天皇の皇子彦狹島命の後裔對馬守通有公の後なり數代の孫稻葉内匠頭政成に至り筑前中納言秀秋に仕ふ之より先き齋藤利三の女を妻り丹波守正勝を生む、母齋藤氏後ち三代將軍家光の乳母となる之を春日局と稱せり、年甫めて八歳實母の縁に因り將軍の君側に召され城主に昇り後ち山城淀城十一萬石に封せらる、君は正四位正邦君の養子にして實は正二位伯爵松浦詮君の男なり慶應三年七月二日を以て生れ明治十二年十二月先代正邦君の養子となり同十三年九月從五位に敘し



同二十二年五月英國に留學し同二十五年十二月歸朝し同三十一年七月襲爵仰付られ宮内省に出仕し、同二十八年一月東宮侍從に任じ、同三十二年七月式部官に轉任し、主事を命せられ高等官三等に昇り位階亦從三位に陞敘せられ子爵の榮を擔ふ筈に當代貴公子中の俊傑なりと云ふ可し、(豊多麻郡澁谷町元青山北町七ノ一 電話芝四一五)

子爵 長岡護孝君

聞く當家は清和天皇の皇孫鎮守府將軍源經基八世の孫、陸奥守足利義康の曾孫、細川次郎義季十世の孫兵部太夫藤孝の後裔にして藤孝より忠興、忠利、光尙、宜紀、宗孝、重賢、治年、齊茲、齊樹を経て從四位下越中守齊護に至る其五男護美分家して性を長岡と稱す、君は其後を襲ふ、君實は子爵細川利文の二男にして明治二十九年八月二十二日を以て生る、幼名を利功と稱し温厚篤實頗る清高の君子たる風ありて上を敬し下を憫み徳望同族間に高し、明治三十九年先代護美侯の後を継ぎ家督を相續し名を護孝と改む、蓋し先代の一字と藤孝公の一字と

を以てし其徳に則らんとせられたるならん歟、其年直ちに襲爵仰付らる、夙に學習院に入り中學二年を修業せられ目下陸軍幼年學校に入りて勉學中に屬し品行方正を以て稱せらる君の陸軍幼年學校に入るや抑も理由あり、君の義兄細川護全君は日露戦役に際し陸軍騎兵少尉として出征し各所に轉戦して功あり、殊に遼陽の激戦に當て部下を督勵して突撃を試むること數回實に古英勇の面影を偲ぶものあり、敵弾心なく飛び來て少壯少尉の命を奪ふ當時少尉の功勞は其大なる影響を敵の全線に及ぼすものあり、長官は感狀を附して其功績を賞す、而も少尉の英魂は忠義の鬼と化して天國に逝けり、君は義兄の志操を継ぎ陸軍に従事して忠君報公の義務を全ふし、皇室の藩屏たる殊遇に報じ奉らんとこの意思に依るものなりと傳ふ、

其志操の堅實なる誠忠義烈の洋溢せる誰か亦感佩せざるものあらんや  
(日本橋區濱町二ノ一二 電話浪花一一〇七)

法學博士 村瀨春雄君



學識經驗共に群を抜き、徳望偉大にして夙に噴々たる名聲を内外に轟かし、奇智明敏以て事務の擴張を計れり、曾ては有望なる官海を一擲に附して顧みず蹶然立て實業界に入る前途亦矚目する所なからんや、果せる哉君の敏腕大に効果を改めて帝國海上運送火災保險會社をして現今の隆盛を致さしむ寔に實業界裡稀有の俊才と謂ふ可し、抑も君は舊福井藩士、故關戸由義氏の二男にして明治四年三月二十九日を以て生る、夙に普通學を修め十六年兵庫縣立商業學校に入り、螢雪四年を経て十九年最優の成績を以て卒業せり、是より先明治十六年東京府の人村瀬定子の死續を相續して其姓を冒し後兵庫縣に轉籍せらる、明治二十年東京高等商業學校に入り同二十二年保險學研究のため白耳義國に遊學し同廿五年同國アントワープ高等商業學校を卒業し尋で獨國ライプツヒト大學に入りて研鑽の功を積み同二十六年歸朝せり直に職を東京高等商業學校教授に奉せしも同二十八年辭任せり次で帝國海上運送火災保險株式會社の招聘する所となり入つて同會社の副支配人となり後支配人に推さる同三十六年衆望の歸する所終に常務取締役に推撰せ

らるゝに至れり、君は謹嚴方正を以て身を處し未だ曾て世俗の汚流に染まず、超然一見地を存せりと傳ふ、尙一面商業學校講師及び商船學校講師を囑托せられ後進扶掖に盡瘁しつゝあり明治四十年博士會の推撰する所となり法學博士の學位を授けられ名聲大に發揚せらるゝに至れり、(本郷區春木町三ノ二四 電話下谷七一三)

東京女子師範  
學校 校長 中川謙二郎君

學殖豊富にして經驗亦淺からず五十年來の生涯を通して一意教育事業に盡瘁し、比較的困難の評ある女子育英事業に従事して偉功を奏せり、教育界の古老白眉として社會の推敬を受くるもの亦故なきにあらず、資性温厚にして恭謙良妻賢母の薰育に勉めて聊か瑕疵あるを認めず、寔に教育界の泰斗たるに耻ぢざるもの也、

君は丹波國桑田郡馬路村の人にして嘉永三年九月二十一日を以て生る、維新の際は西園寺公に従て山陰道の鎮撫に力め北陸道及東北の征討に功を奏せり、維新の後東京開成所及共學會に學び更に東京開成學校に



入つて製作學製煉學を修む。明治九年七月新潟學校百工化學の教員となり、次て同縣鑛山の調査を命せられ在留三年、更に東京女子師範學校教諭となり、同十六年六月文部省普通學務局に入り爾後文部省御用係、東京女子師範學校教諭、高等師範學校教諭、女子師範學校教諭兼幹事等を歴仕し二十五年「コロンバス」世界萬國博覽會出品審査委員となり、二十七年文部大臣官房書記課兼勤を命せられ、三十一年東京工業學校教諭兼高等師範學校教授となり、尙工業教員養成所主任、徒弟學校主事、師範學校幹事、教育博物館主事、文部省中等教員檢定委員等の職に就けり、次で文部省視學官兼東京工業學校教諭、高等會議員となり、三十九年仙臺高等工業學校々長に轉じ、四十三年三月高等女子師範學校長に補せられ以て現今に及べり、斯の如く教育事業の爲めに献身的盡瘁の勞を執らる、斯界に多大の貢獻せられたるもの誰か崇敬の意を表せざるものあらんや、(本郷區駒込西片町一八ノ一七號 電話 下谷二八四六)

### 實業家 田村利七君

帝國紡績界の偉傑として夙に名聲噴々たる田村利七君は發洩たる敏腕を以て早くも紡績事業の國家的有利の經營たるべきを認め率先して其創設に盡瘁し往年東京紡績株式會社成るに及んで其社長に推され爾來の健闘能く功を奏して現時の如き尅大なる一大會社の基礎を確立せるに至る其功勳や亦偉大なりと云ふ可し、

概傳に因れば君は宮島義右衛門氏の令男にして嘉永元年三月を以て深川の私邸に生る、君家は累世酒店を以て名あり後故ありて田村家の養嗣子となり其姓を冠せり、始め金座附兩替店に於て商務の見習を爲し更に三井御用所に轉じ、横濱支店の整理に當て功を擧げらる明治九年三井銀行と改稱するや横濱支店長となり幾多の經營に當て着々効果を收め名聲大に發揚せり、當時君は世界萬國の形勢を遠觀し紡績事業の急務なるを感じ大藏卿に向て建築する所あり、偶々松方伯歐米實業界の視察を遂げて歸朝するあり、政府當局の意見も亦合致して嶄新の機



械を輸入し是を民間有志に貸與して新業の發展を計るに至れり、君乃ち小津清左衛門、長谷川次郎兵衛、西川庄六の諸氏と謀り深川區東大工町に一大工場を建設し以て東京紡績會社を創立せり、時維明治二十年にして抑も本邦紡績事業の嚆矢たりしなり、君銳意是が發展擴張に努め漸次増資して現今四百八十萬圓の一大株式會社を爲すに至れり、明治三十六年南清地方視察の途に上り上海漢口武昌の各地を踏査し大に得る所あつて歸朝し、府下南千住町橋場の地を相し一大工場を建設し新式機械を購入して専ら純良なる製品を供給しつゝあり、君は夙に有望なる三井家を脱して献身紡績事業に従事し以て現今の大成を見るに至る、社會の推重して措かざるもの亦宜なるにあらずや、(神田區駿河臺北甲賀町八 電話本局二〇三)

### 實業家 清水彦次郎君

氣骨稜々として武士的志操に富み一諾千鈞を重んずるの美風は澆季の今日最も珍とする處たり、其六十年間の曲折ある生涯は皆是れ社會公

益に關せざるはなし、其物質的成功は餘り偉大ならずとも精神的大成功者たるに至ては誰か亦否定せんや、其操行の純誠潔白なるは眞に社會の模範たるに愧ぢず今其概歴を草して其人格如何を窺はん哉、抑も君は滋賀縣野洲郡西河原村清水彦次郎氏の長男にして嘉永四年七月三十日を以て生る、夙に穎智活達を以て稱せらる、固より土地の名望家たるを以て推されて以て村會議員村長等の職に在り、村内貧困者の救濟策として有力者に説き五十圓宛を貧民に貸與せしむ、後數年の凶歉の爲め是を償却する能はざるものあり、茲に於て乎君祖先傳來の有體動産を賣却して債權者に代償し尙赤貧者の救恤に力む、斯の如きは最も成し難き所にして君の英斷果決たるを窺ふに足らん、君は斯の如くにして大坂に出で松屋町の某菓子商に寄る、明治十八年政府は菓子税法を制定して重税を課せり爲めに同業者の失職を見るに至る、義氣旺盛なる君は黙視するに忍びず立て税制の改正及菓子税の廢止を唱道し全國八萬六千の菓子製造者及二十餘萬の菓子販賣者を同盟し爾來十年間に亘れる運動は實に慘愴たるものありき、後遂に目的を貫徹して



同業者は總計九十萬圓の税金を免かるゝことを得たり、茲に於て衆議一決して是が記念たる一大生命保險會社を設立するに確定し茲に愛國生命保險會社の設立を見るに至れり、是れ偏に代議士たる鈴木萬次郎氏及君の功勞に基因せずんばならず、君は先づ大坂支店の主任となり明治三十六年三浦篤次郎氏の後任として本店支配人と爲り以て現今に至れり、君又品川製菓會社の整理を囑せられ僅かに二年ならずして一萬八千圓の負債を償却し更に二萬圓の積立金を残せるが如き偉功を奏したる事ありき、君は此の如き敏腕を有すと雖も比較的文事に疎なるを慨し後進育英の爲に盡し資を給して學ばしむるもの數十人に及べりと傳ふ、是れ君の性質としては決して怪しむに足らず、斯の如く君は常に國家的觀念を以て盡瘁し殆んど自家の存在を度外視する傾向あり世の皓潔なる人材を求めば先づ君を以て第一と推さざるを得ず、今や六十一歳の高齢に達するも意氣旺盛壯者を凌ぐの概あり寔に有數の實業家と稱すべき也、(芝區高輪南町三〇 電話芝五六六)

### 實業家 堀井松之助君

任俠の氣概は江戸時代の如く一諾千斤を重んじ、公共事業の爲め多大の援助を與へ社會の信望甚だ偉大なり、此の美質此の氣概あり更科本店の聲價が一層の發揮を見る豈偶然ならんや、君幼時家運の不振を見て慷慨に堪へず、辛酸努力遂に家政を回復して現今の盛況を招致せり、此の間の奮闘は決して一朝の黠にあらざる也、而も能く世情の眞微に通じ艱難辛苦の狀を知る、茲を以て屢々義捐を爲して世の貧民を救恤し、徳望溢れて名聲籍甚たるに至る、更科の名事ろ君に因て高きを致せるもの寔に當代の俊傑たるに愧ぢざる也、抑も君は布屋大兵衛(舊更科の店名)氏の長男にして慶應元年八月を以て生る、夙に穎明の資あり幼時維新の變動に因て家産の宛乏を來たし徳川時代數百年の名家たる更科の老舗も誠に微々として振はざるに至れり、元來更科蕎麥の緣由は最も古くして江戸名物の一に加へられ風味佳良にして千代田の大興に迄嗜好せられたる名品なるを以て食道通の垂涎して措かざ



るは今も昔も濃らざる所なり。君奮起して一意其回復を計り、製造方を改革し綿密の注意を以て顧客の嗜好に適應するを期し銳意發展を計りしかば上流社會の眷遇を得て益々好潮を呈し三十五年日本橋區三代町四番地に支店を設け叔父藤村源三郎氏をして監督の任に當らしめ、尙又神田區錦町三丁目五番地に支店を置き姉婿堀井丈太郎氏をして經營の任に當らしむ。而て孰れも皆盛況を極めて家政洋々たり更に又更科蕎麥粉を製出版賣して高評を博し爾來家運最も隆昌を致せり。往年區會議員となりて公共事業に盡瘁し、更に麻布銀行の大株主となりて重役の地位を占め同區内屈指の名譽家なるに至れり。(麻布區永坂町一三 電話芝一〇四〇)

樞密顧問官 伊東巳代治君

明治聖代の偉傑伊藤博文公夙に英明の資を以て帝國施政の基礎を樹立し内治外交に多大の効果を奏し本邦の位置をして一躍して世界列強の首班に置かしむ洵に空前絶後の大偉勳たらすんばあらざる也。而て公の背後に稀世の俊才ありて常に其企劃に參與し所謂智囊を以て稱せられたる伊東巳代治子あるを忘る可かざる也。子と公との間は最も親密の關係を有し、兵庫縣の一屬吏時代より相補翼して頭角を顯はし、公一步を進めば子も亦一步を進め、公一功を擧ぐれば子亦一功を奏せり恰も形影相添ふが如く一進一退其軌を一にす。其親情父子も及ばざるものあり、往年公不幸にして他界に入る子轉た今昔の感なき能はざる也近來銳鋒を收めて靜に心身の勢を慰す。然も東洋の風雲是急にして隣邦既に慘禍を醸す、子の蹶起を促すや固より其所也。乃公出でずんば彼の蒼生を奈何の慨蓋し其胸臆に往來するものあらん。邦家の子を待つ久矣子亦晏如たるを得ざる也。



抑も子爵伊東己代治君は長崎の出身にして安政四年を以て生る、資性  
 穎敏夙に蘭英佛の語學に通じ明治六年兵庫縣譯官に擧げらる偶々伊藤  
 博文公に知られて内務省に出任し、十三年内務省權少書記官に任ぜら  
 る、累進して太政官大書記官兼參事院議官補に進み、十五年伊藤參議  
 に隨ひ憲法取調の爲め歐洲に航し歸朝後内閣總理大臣秘書官となり、  
 正五位に敍せらる、伊藤大臣の樞密院議長に轉するや君亦た議長秘書  
 官として樞密院に入り憲法起草に盡瘁して特旨を以て勳三等を授けら  
 る、同二十三年貴族院議員に勅選せられ後内閣書記官長となり法典調  
 査委員を命ぜらる、二十七八年戰役に當ては靖和全權大臣書記として  
 馬關に至り、尋て全權辦理大使に陞任し清國芝罘に出張し全權大臣伍  
 廷芳に會し靖和議判批准交換の事を結了せり、同二十八年八月功に依  
 り男爵を授けらる、同三十一年農商務大臣となり尋て樞密顧問官に親  
 任せられ正三位勳一等に進めり、後特旨を以て子爵を陞授せられ從二  
 位に叙せらる、其報國盡忠の赤誠は天下既に認むる處、伊藤公の薨去  
 は君の一大打撃たらずんばあらず、然も先天的英敏の大才は政界に超

然たるものあり、其蘊奥を披瀝するの時期當に遠きにあらざるを知る  
 可し、(麴町區永田町二ノ一七) 電話新橋八一三、別邸北豊島郡巢鴨町  
 六一五 電話番町一二六二

貴族院議員 子爵 加藤 泰 秋君

抑當家は内大臣藤原鎌足の曾孫左大臣魚名四世の孫越前守高房十一の  
 裔加藤左衛門大夫光員十四世之孫權兵衛尉景泰長男遠江守光泰の後な  
 り、光泰初め織田氏に仕へ木村、生駒、前野、等と共に羽柴秀吉の部  
 下に屬せらる、爾後秀吉に従て戰功多し、由て天正十八年甲斐國一圓  
 二十四萬石を賜はり、秀吉の寵遇殊に厚し文祿年間朝鮮の役に出軍し  
 陣中に卒せし時に際し隣者の舌鋒に罹り終に其所領を沒收せられ更に  
 其子左近太夫貞泰に濃州黒野四萬石を賜ふ、慶長五年關ヶ原の役戰功  
 ありて後ち六萬石に加増し伯州米子に移り慶長十九年大阪征討の役又  
 功あり厚き臺命に依り轉じて豫州大洲の城主と爲り爾來世々相承け十  
 三世に至る君は從五位下遠江守加藤泰幹氏の四男にして弘化三年八月



十二日を以て生る、幼名を廉之進と稱す元治元年十月兄泰社氏の養嗣子と爲る、同年十一月廿六日襲封伊豫國六萬石同二年二月三日叙從五位下任遠江守、明治元年二月廿日御親征先陣供奉同閏四月七日御陣後衛供奉を勤め、同年九月八日命を受け御東幸先驅同十二月八日還幸亦先驅供奉を勤む、明治二年四月廿二日版籍奉還を出願す同年六月十九日版籍奉還を聞食し届けらるゝと同時に大州藩知事に任命せらる、同三年九月十三日積年王事に勤勞其功不尠叙成被爲在依之位階二等昇進被仰付叙從四位、同四年七月十五日免本官同十一月廿六日宮中祇候被仰付同十七年五月十七日依願免宮中祇候、同年七月八日授子爵同十八年三月廿一日明宮祇候被仰付、同十九年免祇候、同廿年十二月廿六日被叙正四位、同廿六年六月十六日被叙從三位同三十四年六月廿一日被叙正三位、同四十四年八月廿一日被叙從二位、同年十月貴族院議員補缺選舉に當り一の反對を見すして當撰の榮を擔ふ以て其德望の如何を知る可し、資性温厚篤實仁慈にして救恤に努む、其の德望偉大なるは敢て怪しむに足らざる也、(下谷區御徒町二ノ二六、電話下谷一

九二五

貴族院議員 青木信光君

當家は宣化天皇の曾孫、多治比古王の子、左大臣四郎冠者武峯の後なり夫より實直經房元房を経て直兼に至る、直兼青木武藏守と號す、それより實直、實村、實季、重實を経て刑部卿重直に至る重直土岐家に仕へ、後織田氏に徴され又豊臣秀吉の家臣となる、其子民部少輔一重秀吉に仕へ廿四武士黃母衣衆の一人たり、秀吉又其中より七士の番頭を選べり一重亦其一人となる、後徳川氏に仕ふ、夫れより重兼、重正、重安、一典、一都、見典、一新、一貫、一貞、重龍、一與、一成を経て攝津國麻田一萬五千石の藩主として從五位重義に至る、君其後を繼ぐ實は中山信敏氏の第四子にして明治二年九月二十日を以て生る、同年一月十九日先代重義の養子となり、同十七年十二月家督を相續して襲爵仰付られ同二十二年九月從五位に叙せらる、明治三十二年十二月從四位に進み、現に貴族院議員にして正四位子爵たり、君學識深遠に



して沈毅宏量常に温雅闊達を以て推重せらる。曩き同志と共に貴族院に一族幟を樹立し尙友會派の錚々を以て聞ゆ。四十四年改選期に當り再撰の榮を獲ふて貴族院議員たり。夫人楠枝氏は從四位男爵川口武定氏の第二女にして温良貞淑の稱あり。家庭の圓滿なる更に吾人の喋々を要せず。上流社會稀に見る精神也と謂ふ可し。(四谷區大番町八五 電話番号町一二六一)

錦鷄問祇候、貴族院議員

日本赤十字社 小澤 武雄君  
副社長男爵

君は舊小倉藩士小澤美房の男にして、弘化元年十一月十日豊前企救郡足立村に生る幼にして文武を藩賢思永館に學ぶ。十三歳父を喪ひ家を繼て士籍に列す。文久二年君將に弱冠ならんとす。時に天下漸く多事志士晏如として郷里に在り。咕嗶に從事す可きの日にあらず乃ち自ら請ふて江府に祇役し。同三年任滿ちて小倉に歸る。慶應二年幕府再び防長追討の軍を興すや小倉藩其の先鋒たり。君兵士より參謀に擢てら

れ又歩兵隊長に轉任す。事變むの後與事に擧げらる。既にして王政維新に會し。明治元年八月奥羽征討の軍に従ふ。尋て若松民政局に出仕を命ぜらる。二年一月職を辭し東京に至る三月徴されて軍務官史生に任せられ幾くもなく、兵部權少丞に擧げられ。四年陸軍武官の官制更革せらるるの日、陸軍少佐に任せられ果進して陸軍中將と爲る。實に明治十八年なり此の間陸軍卿副官、同官房長に補し太政官大書記官一等法騎官陸軍少輔に兼任し。又陸軍省總務局長、參謀本部次長、陸軍士官學校長、砲臺建築部長等に補せられ歐米諸國に派遣せらるること二回に及べり。二十年五月勳功に依り男爵を授け華族に列せらる。君陸軍の要地に居り權機を乘ること二十年。殊に陸軍革新に際し法規の立案事務の措置殆ど關與せざるもの莫し。十年西南の役軍團高級參謀の要職を奉し。功を以て勳三等旭日中綬章を授け年金を賜はる。二十三年九月貴族院議員に勅選せられ。爾來帝國議會の開會せらるるや毎回常任又は特別委員に選まれ。常に一方の領袖として議場に莅み提議討論悉々屈せず。我が立法府の翹楚と稱せらる。二十九年三月錦鷄問



祗候に勅任せらる、三十五年十一月日本赤十字社副社長に選舉せらる君の事に従ふや、深思善謀瑣事と雖も苟もせず、即ち就職の初めに當り過去を視現在を察し將來を慮り、以て社業整理の方針を提議せり、同社が三十六年已來實行せし有名なる十年計畫即ち是なり、三十七八年戦役の救護には臨時救護部長として職務に執筆し、功を以て勳一等旭日大綬章を授けらる、四十年八月第八回赤十字萬國總會を英國倫敦に開くに方たり、日本赤十字社委員として派遣せられ同總會副議長に推さる、抑々君が副社長たる殆んど身を以て犠牲と爲し、事務の刷新と社業の發展とを圖り、華々汲々惟れ日も足らざるが如く、就中支部業務査閲規程を設けて地方社務の整理を企て、また救護員教育制度を改良して看護婦養成の革新を圖れり、之れが爲め長には東京に在り、夕には地方に赴き、南船北馬席煖かなるに及ばざるの狀あり其の熱心にして強健なる人稱して精力主義の權化と爲すに至る、實に日本赤十字社の柱礎と謂ふ可し、夫人桑子河村氏の出なり、夙に日本赤十字社篤志看護婦人會の事業に盡瘁し久しく幹事の任に在り、三十七八年戦

役に際し、出征軍人の爲に創を藹み痛を恤み功を以て勳五等に叙し寶冠章を授けらる、亦我が婦人慈善家の龜鑑と爲すべし、(東京市麴町區下二番町七十番地 電話番町三六)

郵船會社  
副社長

加藤 正義君

郵船會社が我帝國に貢獻する所の偉大なるは既に世の定評たり、本年同社長近藤廉平氏が男爵の榮譽を辱ふせるも道般の消息を語て餘蘊なきを覺ふ、副社長加藤氏身を蓬茅より起して敏腕を揮ひ遂に同社の副社長たるに至る、君は固と官僚派の代表的人材にして同社經營上の大偉勳者たり、勇往敢爲にして百般の企畫を施し縦横の智略を揮へり、同社創立以來の大計畫大飛躍寧ろ君に俟つ所大なり、日清日露の大役に當て運輸の神速を謀り一意誠忠を振てられたるは世の齊しく嘆賞する處勳二等の光榮に接せるもの誰が亦羨望せざるものあらんや、吾人今君と交遊せる某氏に因て其概傳を得たり、聞く、君は鳥取縣加藤良吉春昌の次男安政元年二月廿三日伯耆國日野郡渡村に生る、君十歳隣



村の寺僧に就き禪學を修む十七歳藩命に依り藩籍祿高調査の事に任して効あり、廢藩置縣後鳥取縣參事關義臣氏澄賜縣令に轉任するや君の才幹を愛し其の縣吏に拔擢し且餘暇修學する所あらしむ、又改租の事あるに當り、一方面を擔任せしむ其成績頗る見るべきものあり同縣の山形に合併するや、三島縣令亦君の才幹を認め厚く任用する所あらんとす、偶々政論抑壓の干渉極端にして縣吏の政治を講究するを嚴禁す君謂へらく政界の大勢立憲に移るは近き將來に在り國民をして國體に基き善良なる政治思想を養成せしむる必要の時機に際し如斯は頗る其當を得すと大に其非を鳴し官祿を棄て、決然勇退す兵庫縣令森岡純氏君が硬骨敏腕の用ゆべきを知り、同縣勸業課長に任す其在職中事務の一斑を舉んに君は専ら産業の獎勵輸出貿易の發展を企圖し先づ關西地方製茶事業の改良を急務とし其第一着手として製茶共進會を關西の輸出地に官設し製造業者をして普く製法改良の必要を知悉せしめ且講究の機會を與へんと欲し、其の方法を明治十五年春滋賀縣に開かれたる關西府縣勸業會に提案し一致の賛同を得て同年秋冬の候森岡縣令の旨

を承け抱負滿腹出京し詳々之を當路に説く時の農商務卿西郷參議品川農商務大輔大に之を贊し即ち廟堂の議に上り同年十二月太政官布達を以て翌十六年製茶共進會を神戸に開設せられ關西茶業の發達に就き偉大の効果を與へたり、十八年森岡縣令農商務少輔に轉任するや、君亦農商務書記官に任す此時に當り海運界に三菱共同兩會社の大競争起り頗る慘劇を極め終に帝國海運の元氣を阻害し復た起つ可らざるに到らんとす、政府森岡農商務少輔に命じて善後の策を講せしむるに當り、君をして補佐の責を取らしむ乃ち三菱共同兩社の資本を併せ新たに日本郵船會社を創立し、茲に帝國海運の基礎を確立す此間に處し、君が苦心經營補佐の効最も多しとす、森岡少輔新設日本郵船會社の社長に官選せられ尋て君亦其理事に官選せらる二十六年十二月時運の進歩に伴ひ役員の官選を止め商法の規定に準據し純然たる株式會社に変更するや、其定款社則悉く君が起按に成る而して新組織第一回の株主總會に於て君は取締役選任せられ尋て副社長となり以て今日に至る其間二十有六年一意専心社務に勵精すると一日の如し、抑も郵船會社が



當初兩社競争の餘弊を承け六萬噸の衰弱船舶を以て起り航路は内地沿岸近海に止り、資産は一千萬圓と稱するも實價は約其半額に過ぎざりしもの今や船舶は參拾萬噸に進み航路は殆んど世界に普く資産の實價は五千萬圓以上に達し全世界海運業者の第六位を占め今日の隆盛を致したるもの君が勤勉經營の効與りて力ありと謂はざるを得ず、其間君は卅四年夏秋の候朝鮮北清及南清地方を巡視し鐵道に鑛業に種々の手段に依り列國競ふて其勢力を彼地に扶殖せんことを勉むるの實勢を看取し、當時排外熱の最も熾んにして他國の未だ一指を染むること能はざる湖南省の彼我兩國の前途に重大の關係あるを認識し窃に總督張之洞巡撫俞廉三に謀るに日清兩國人の資本を以て漢口より洞庭を経て湖南省の首府長沙に至る、汽船航路開設の事を以てし、乃ち張俞兩人の内諾を得朝野之を政府當局に謀る當局者亦た時機の失ふべからざるを以て速に之に着手せんことを慫慂す於是事業界有力者と謀議し一會社を創設す之を湖南汽船會社と爲す、君は推れて其社長となる蓋し日清合同事業經營の嚆矢たり後他の同業者と合同す、今の日清汽船會社は

れなり、君は三十九年より四十年に渡り歐米各國及印度に於ける海運業發達變遷の實況を觀察し以て從事する所の社業經營に資益する所多しと云ふ、以上君が事業の概要なり君が公職としては法典調査會委員司法省破産管財人、東京商業會議所特別議員、東洋拓殖會社創立委員築港調査會協議委員等なりとす、君は二十七八年戦役の功に依り勳四等に叙せられ、三十三年北清事變に於ける功に依り勳三等に叙せられ、三十七八年事件の功に依り勳二等に叙せらる、資性温雅閑潔にして最も謹嚴なり、常に士を愛して後進扶掖に盡瘁し任侠の高風慕ふ可く仰ぐ可きものあり徳望日に殷盛を加ふるもの豈偶然ならんや、(麴町區元園町一ノ二 電話番町三〇五)

實業家 神田 鏞 藏君

帝國實業界の飛將軍として名聲噴々たる神田鏞藏君機略縦横の怪腕を揮ひ徒手空拳を以て數百萬の資財を蓄積せり、天下傳へて今太閤と評す、蓋し機敏にして成功の迅速なるを稱する也、固と是れ愛知縣海東



郡の出身にして明治五年を以て生る三百年來の酒造家として門地甚だ賤しからず邸前楓樹あるを以て紅葉屋と號せり、幼より活達の譽れあり、始め名古屋に出で、株式界に奔馳し巧みに機會を捉へて一舉に數萬金を利せり、人多く其慧眼と勇膽とに服し其快舉を賞揚して措かず血氣未だ定まらざる君は尙一鞭を加へて邁進し却て一大陸に遭遇せり、是れ君が再舉して現今の豪富を成さしめたる前提たらずんばあらざるなり、明治三十二年驟起上京して一小店舖を坂本町に設け、熱心と勤勉、機敏と堅忍とを以て自から丁店と伍して奮闘す、熱誠と確實とは漸く有力者間に喧傳せられ澁澤男今村氏佐々木氏等の譽遇を受くるに至り、一瀉千里の趨勢を以て向上發展し現今の大成を遂ぐるに至れり、其商風は眞に獨特の一流を爲し多く公債の取扱に因て信用を博せり、是れ君が非凡の商路の存したる所也、今や紅葉屋商會紅葉屋銀行等の直營は洋々として陸盛の域にあり、君又仁慈博愛の資性に富み各國公共的事業に賛し救済事業に盡瘁せり、恩賜財團濟生會の如きは卒先して賛同せる所巨萬の義捐は眞に其性格を發露したるもの也曠世

の偉材として社會の推重を受くるもの豈偶然ならんや、(店日本橋區坂本町六 電話浪花長一三八、特長三〇六、長一五〇五、長一五四六、長二八〇二、長三七七二、長四四七三、長五一八〇 邸牛込區市ヶ谷砂土原町一ノ二 電話長壽町八〇三)

實業家 袴田喜四郎君

帝都多數の質商として徳望隆々たる袴田喜四郎君は元と是れ府下南足立郡淵江村の出身也、累世農桑を業とし土地の名門を以て名あり、君幼にして聰悟早くも和漢の諸學を修めて類る造詣する所あり、蓬茅の間にては驥足を伸ぶるに足らざるを悟り奮然東都に出て下谷區池之端仲町金田紙店に勤仕して刻苦勵精同儕を壓せり、其機敏なるや斯業の漁與を極め名家の爲めに貢献せるもの幾干なるを知らず、偶々先代袴田喜右衛門氏に知られて其養嗣子と爲り以て其姓を冠せり是れ實に明治十四年なり爾來大に奮勵して祖業たる質商に勉め、誠實と熱烈とを以て邁進し一層の發展を見るに至れり、元來嗣家は有名なる質商に



して資産の豊富なるは世の齊しく認識せる處然も君の精勵は能く金融の圓滿を謀り數倍の富を増し家政をして益々隆昌の域に進めり、明治三十一年東京瓦斯會社の取締役に推され、同三十四年中村、岩崎の諸有力家と謀り倉庫銀行の設立に盡瘁し、同三十五年其創立の運に至るや推されて取締役たり、斯の如く激測たる手腕を以て實業方面に駢馳して名聲を博し、一面公職としては三十三年區會議員となり次て又府會議員となり爾來毎改撰期に再撰せられて今日に至れり、曾て府會議長の指名に因り市部參事會員となり滿腔の抱負を披瀝して公共事業の爲めに多大の盡瘁を爲し府下人民の嚮望する處となれり、君仁慈博愛の性に富み、各種救濟事業に義捐して賞杯を受領せるもの尠からず、恩賜財團濟生會の如きは卒先して巨額の贊助を與へて其素志を知らしむ眞に稀世の俊傑たりと謂ふ可し、(本所區長崎町六、電話長浪花一一一五)

實業家 北里 斐 袈 男 君

帝國生命が保險會社中最も堅實の定評あるは其創立の最も古くして他會社に比して特色の點少からざるを以て也、第一資本の豊富なること第二積立金の多大なること、第三保險契約者の多數なること等最も顯著なりとす、而て實業界中最も困難たる可き保險會社をして幾多の支障を排除し此の如く名聲を博せしめ、確固たる基礎を樹立せしもの實に學識經驗共に優越せる北里斐袈男君の如き新進氣鋭の士が帷幕に參して萬般の施設を補助したる結果に外ならざるは識者の既に認むる所也、果せる哉君は數年ならずして累進以て常務取締役たる榮譽の地位を占むるに至れり、爾來の健闘は例に因て異彩を放ち社會の信用偉大を極め遂に同社をして現今の如く一大盛況を呈するに至らしめたり、其功勳亦偉なりと云ふ可し、抑も君は熊本縣の人北里惟信氏の二男にして慶應三年四月三十日を以て生る、幼にして既に麒麟兒たる賞譽あり、早くも帝國大學法科大學に入り、夙辛勞苦の功を積み遂に優等を以て卒業せられ法學士の稱號を領せり、直ちに帝國生命保險會社に入り、爾來の奮闘は例に依て劇甚を究め、累進して常務取締役となり以



て現今に及べり、帝國生命の發展は既に君の力の偉大なるを立證して餘蘊なく、君亦帝國生命に依て名聲を揚ぐ兩者相俟て社會に頭角を顯はす、後進の士三省して以て鑑とせば少なくとも成功の曙光に浴することを得ん、吾徒物色して絶好の龜鑑を得たるを誇とせずんばあらざる也、(麻布區仲ノ町二四、電話芝二八二四)

法學士 岩崎勳君

帝都法曹界中新進氣鋭の霸氣に富み學殖經驗二つながら超群の稱ある岩崎君は靜岡縣駿東郡清水村の人岩崎元功氏の長男にして明治十一年二月二十五日を以て生る、君家は累世官弊大社三島神社の彌宜にして門地名望共に隆々たり、君幼より聰慧にして活達の氣慨あり早くも靜岡中學校に入り、二十九年優等を以て同校を卒業し、同年直ちに第一高等學校に入學し、三十二年更に帝國大學法科大學に入り佛法を學び常に成績優秀を以て名あり同參十六年卒業して法學士の學位を領せり君は元來人權の伸張を計り國民の福祉を増進せんことに傾注せらるゝ

を以て辯護士たるの絶好なるを知れり、偶々彼の高等文官試験問題の論沸騰せるあり君慨然として謂へらく第一帝大の意氣修養を示す可く第二は後日の經驗の爲め自己の修養と手腕とを發揮するの必要あるべしと同年直に高等文官試験に應じ優良の好果を以て合格し帝大の位置と自己の俊才とを示したるは一大美事と謂はざる可けんや、然れ共志茲に非ず依て同年辯護士事務所を現今の地に開き、民刑事一般の訴訟事務に膺れり、任俠義氣旺盛にして熱烈以て辯護に當るを以て社會の信頼を博すること大也、今や名聲噴々として都下に喧傳せらるゝに至れり、(日本橋區伊勢町二六、電話本局三一八四)

工業家 中山希賢君

本邦工業界の成功者として名聲内外に發揚せられたる中山希賢君は茨城縣の出身にして萬延元年を以て生る、早くも大志を抱て東都に出て明治十八年獨立を以て土木組を創設して大に雄躍を試み斯界の敏腕家として異彩を放てり、後大倉土木組に入て最も信認せられ遙かに一頭



地を抜けり、次て韓國に涉り京釜鐵道の工事に従事し奇智縱横の才腕を揮て斯界の推敬を受くること甚だ大なるに至れり、後釜山埋築株式會社を設立して大に努力奮闘し以て盛運を招致し、更に日韓倉庫會社の創立を發起し其設立と共に取締役に推さる、後前記兩會社が合併して韓國工業會社と改稱するや依然として取締役の要位にあり、爾來百般の樞機に當りて企畫し、尙韓國工業組合の急務なるを唱道して韓國工業組合及韓國建築組合を組織し兩組合の組合長に推撰せられて發展振興の策を企畫し以て偉功を奏せり、尙又相互の便益を助長するの目的を以て共益社なるものを設立し推されて其會長となれり其幾多曲折ある經歷は眞に後進の龜鑑たるに足るもの也、茲に注意を要す可きは君の精力主義の人にして常に熱烈至誠を以て事に當り然も人心の收攬に力めて成功せるの一事也君此の精力主義により又此の遠眼に依り滔々として隆運を招き以て現今に至る、後進の士以て鑑とせば少くとも是に次ぐの成功を享受するを得んか、君仁慈博愛にして部下の爲めに信頼せられ長上の爲めに眷遇を受く斯の如きは非凡の人才たるにあら

ずんば能はず以て其成功の由來を窺ふに足らん、(本郷區駒込西片町一〇)の五〇號、電話下谷八五三

### 實業家 吉野源 吉君

曾ては株式界の老練家、將又堅實なる一大商店として社會の信認を博されたる吉野源吉君は安政四年を以て千葉縣一ノ宮町に生る、累世土地の名門を以て聞へ資産徳望共に隆盛にして人の推敬を受くること甚だ大なり、明治初年の頃は維新變革の時代なるを以て國事甚だ多端にして物價の變動頻繁たりしなり、彼の金祿公債、弗相場等各種の取引盛に行はれ活氣洋溢せるを以て君大に爲す所あらんとして東京の親戚に奇遇し靜に前途の趨勢を窺ふ偶々期する所有り驟然立て身を取引界に投し縱横の策戰効を奏して盛運に至りしも故あつて一時其銳鋒を收めて引退せり往年再び其敏腕を提げて東京株式取引所仲買人として現はれ捲土重來の猛勢を以て突撃を試み、福島浪藏氏と相提携して雄名を鳴らし屢々奇効を奏して家運大に揚れり、君が常に抱持せる堅實の



商風は能く時運に適して社會に高評を博し店務日に殷盛を加へ、株式界の成効者として名聲噴々たり近來仲買人を辭したりと雖も確的なる性行は一般の信頼大にして斯界の元老巨擘として推重せられつゝあり（日本橋區兜町三、電話浪花長三四九〇）

東京株式取引所仲買店 今井又治郎君

君は千葉縣東金町の出身にして明治六年を以て生る父を今井新左衛門氏と稱し君は其二男なり、幼にして家道振はず具さに辛酸を嘗め將來家を興し富豪たるべきを期し居措大に群童と異なる所あり其小學校を卒はるや驟然上京して麴町區金籠金之助氏の店員となり、雜貨の販賣に従事し眞摯熱實一意専念主家の爲めに盡瘁して功勞少からず、然も不幸にして店主の病没に因て衰運に陥るあり、茲に於て乎君は同縣の先輩岡村善七氏を訪ひ懇ふるに情を以てす、氏深く其境遇に同情し自己の經營せる岡本銀行に入らしむ、居ること八年にして功績大に擧れり、後轉じて東京株式取引所仲買店藤田英次郎氏の店員となり、金傑

今村清之助氏の眷遇を受け屢々同氏の樞機に參して企劃する所あり、往年店主藤田氏の退隱せるや、君は立て今井商店を創立し確實至誠を以て事務の進捗を計り、顧客の爲めに計て更に遺憾なきを期せり、信用日に加はり家運又大に揚る、理想的仲買店として名聲大に發揚せられ嶄然一頭地を抜くに至れり（日本橋區境町三、電話浪花一四三七、日本橋區南茅場町三、電話浪花二〇七、三〇〇六、日本橋區兜町四株式取引所内、電話二七八四）

東京株式取引所仲買人 川口佐一郎君

帝都の中樞鐘橋兩畔の熱鬧名狀す可からざる地點に於て數萬の輪贏を寸秒に決するの快舉は實に天下の耳目を聳動せしむるものあり、茲を以て鱗売町兜町の名は既に兒童走卒と雖も知らざるものなし、天下の俊雄蟻集して茲に快腕を揮ふ、高底變幻捕捉す可からざるもの亦偶然ならんや、既に足を此の場裡に入る、合、川口商店の勢力偉大なるを知らざるものあらんや、其堅實にして確的の商略は斯界人士の常に嘆



限する所に慰せり、各地より電報を以て委顧せる多数の買買は直ちに取引に影響して變動忽ち生じ、賣買兩者の満足を買ふや實に困難を極む、君既に多年の熟腕を揮ひ能く前途を洞見して機宜を捉ふ、斯の如きは斯界に最も稀なる所也、君其獨特の手腕を揮て委囑者の希望を満たす、茲に於てか社會の信用頼に旺盛を極むるに至れり、吾人斯界の老雄に聞く川口氏の商風は實に電光石火の慨ありて是を拒くに暇まなく眞に敬服の外なし之を學ばんとして學ぶ能はず誠に先天的性格を備へたるものなりと、斯界の飛將軍として推重するもの亦所以ありと謂ふ可し、(京橋區築地一ノ一六、電話京橋一五一八、商店日本橋兜町五電話浪花三一三、九四六、三二三七、商店日本橋區鱈売町一ノ二、電話浪花六五五、八〇五、八一、四八一四)

### 島中友次君

帝都工業界に於て嶄然一頭地を抜き最も熾盛を極めつゝある「チルド車輪」の先覺者島中友次君の熱烈なる發明力と堅忍なる奮發力とに因て「チ

ルド車輪の改良に努め歐米文明國に於て最も流行を極めつゝある同車輪を帝國に應用して社會の歡迎を受くるや大なり、君が此の成功を見るに至る徑路は實に慘憺たるものあり、是を一言にして盡さば熱血の給物と稱する外適當の辭あるを見ず、千試萬験の辛苦は到底吾人の秃筆を以て能く盡す可きにあらざるなり、君此の奮闘に因て遂に完全なる製作品を出すを得て滔々天下に流行を見るに至れり、抑も君は東京府平民島中忠右衛門氏の二男にして嘉永五年二月を以て生る資性剛直にして勤勉の稱あり稍長して各種の事業に鞅掌し頗る敏腕の譽あり、往年諸機械製作業を創始し、芝區三田豊岡町に工場を設置し鋭意其發展擴張に力め、「チルド車輪」の製造を以て名あり、更に工場を月島通りに建設し盛に其製作に従事し最も盛況を呈せり、「チルド車輪」の効果は既に社會の認識する處吾人更に喋々を要せず、歐米文明國に重要せられつゝあるを見れば思ひ半に過ることあらんか、今や父子兄弟共に同業に従事し和氣霽々たるは吾人の最も感嘆に堪へざる所同家盛運の由來する處亦知る可きなり、(宅芝區三田豊岡町二、電話芝九四三、工場



實業界の巨擘 大倉喜八郎君

少年の身を以て奮然志を立て、帝都に出て赤手奮闘六十年、屢死生の境に出入して百折不撓千挫不屈の大精神を發揮し活眼達識能く時機を捕捉して自己の運命を開拓し遂に帝國第一流の富豪たる榮冠を贏ち得、範を後世不朽に垂るゝもの大倉喜八郎君の如きは未だ曾て聞かざる所なり、一代にして巨萬の富を爲せる者帝國其人に乏しからずと雖も能く積み能く散する君の如きは蓋し稀也、而して能く積み能く散する君の如くなる者世界其人に乏しからずと雖も勤勉奮勵を快樂とし幸福とし生命と爲し富を勤勉奮闘の快樂の結果に因り自然に止むなく積み來れる快樂の殘滓也と觀する君の如きは古今東西を通じて匹儔するものなしと云ふも敢て過言にあらざる也、

君の生家は越後新發田に在て檢斷と稱する格式ある舊家にして領主に拜謁するを得帶刀を許さる家世々質屋業を營み徳望隨て旺盛なりき、君の祖父の如きは一世の碩儒頼山陽と交り卷藁湖と親しみ厚情甚だ濃



かなりしと云へり、山陽文鑑に大倉翁墓碑銘とあるは益し君の祖父たる大倉翁を指せるもの也。

君の父君を千之助氏と稱し資性慈善を好み任侠の氣慨あり、或歲天候不順五穀不實貧者飢に泣く年末黒頭巾に面部を蔽ひ貧家を屢訪して金品を惠み殖ちしことあり、かゝる陰徳積善の美風は祖先以來の薰化にして不文の家憲を爲せるもの也。

千之助翁に三人の男子と二人の女子とあり、君は其三男にして幼年の事蹟は詳かならずと雖も總角の頃より穎敏聰悟にして遊戯の群童に異なる所あり、人皆君を太閤と稱せり其意は面貌の秀吉に似たるにあらずして敏捷の機智に富めるを賞讃したる也。

君は天保八年九月を以て生る、幼名を鶴吉と稱し藩儒丹羽伯弘に就て和漢の學を修め出藍の實譽あり、十七歳の冬偶々丹羽師よりの歸途學友の家を過ぎたるに表戸を鎖して在らざるものゝ如し、君怪しみて裏口に廻はり見るに一族悉く家内に籠居せり、審りて其理由を質せるに此前日學友の父泥滓塵を没するの途上に於て或る武士に逢へり、依て

下駄を穿ちたる儘平伏せるに彼の武士近づきて平伏せる背後より袋を掲げ下駄の儘なるを發見して大に怒り遂に一日の閉門を申附られたるなりと答へり、君是を聽て武士の跋扈跳踈を憤慨すると共に僻阪の地に踴躍して鵬翼を展ふるに由なきを嘆じ親友原宏平氏に圖り氏と別離の杯を揚げて蹴然故郷を去れり、是君が江戸に出でし動機なりとす、君上京して麻布區飯倉町の中川屋に仕へて勵精勤恪主家の爲めに大に盡瘁せるが、其慧敏なる早くも營業諸般の駟引及些細なる萬端の事務を見習ひ其濫奥に精通せるを以て、其主人に暇を乞ひ獨立自營を以て下谷上野町に聊かなる店借を爲して乾物商を營みけり、當時故郷の知人兩三名君を乾物店に訪て新發田の或る呉服店の養子たれと勸めて止まず、君床の間の懸軸を指して知人に示す、軸は香川景樹の筆にて左の一首を認む、

詫ひて世をふるやの軒の繩すたれ朽ちはつるまてかゝるへしやは、知人亦強ゆる能はずして去る、君の意氣斯くの如くなりければ鰯魚乾物等を商ふに當り人並よりは買入に一入意を注ぎ安く仕入れて廉價に



買捌きしかば、彼の家は品質精良にして廉價なりとの評は誰れ言ふもなく市中に喧傳せらるゝに至れり、君は益々是に力を得て薄き利益も數もて占め且儉約を旨として精勵せしかば、塵も積れば山を成すの筈に漏れず數年ならずして稍一廉の商人たるに至れり、或年の饑饉に當り貧民に施米を與ふるの舉あり、合長屋の店子等差配を先頭に大旗を押立て君の店に來り施米を受けんが爲めに同行を迫る君頑として應せず却て店頭の乾物鹽魚を衆に施す、曾て文學博士重野成齋氏當時の記事を作る、君の面貌紙上に活躍し一讀儒夫を起たしむるの概あり、君當時より祖父の名を襲ひ喜八郎と改稱せり、時恰も幕府の末造にして諸外國より開港互市を迫られ尊王攘夷の論沸騰し志士東西に奔走して危機一髮の間にあり、君熱々思へらく今公武の間議論合はず且諸藩脱走の浪士京師に雲集して廟堂に近付き攘夷を唱へて止まず、又一方は幕府の勢力日に衰頽せり、よし攘夷の舉あらずとも必ずや國內の騒亂を醸さん、然らば兵器の需用隨て夥多なる可し此の機逸す可からずと、慶應元年八丁堀に住へる澁谷某に就きて兵器賣買の

業を練修し終に和泉橋通に移り戰志摩の門人として銃砲彈藥其他兵器の販賣店を開始せり、君の慧眼果して違はず伏見鳥羽の變亂爆發して東叡山北越奥羽函館の戰爭相題で起り、兵器の需用は俄かに劇増し焦眉の急場に注文山の如く價格の貴賤を問はず、何程にても納む可しとの用命類々として來り隨て多大の利益を得て巨萬の資財を蓄藏せり、而も世人多く其先識の明に服して嘆賞するを知て、此間君が屢々身命を賭して虎穴に入り龍頸を探りて此の富を爲せるを知らず、君の彰義隊の幕營に拉せられて官軍には銃砲を賣り、彰義隊に是を賣らざるの事實を詰問せられし時の如きは眞摯剛膽君の如きにあらずんば劍光一閃身首處を異にするの慘禍に遭遇し居らん事必せり、是より後戰雲漸く收まりて明治聖代の泰平を謳ふに及び外國との交通は日に増し月に盛ならんとせしかば、君は密かに將來の大勢を察し帝國後來の商業は外國貿易に在りとなし、明治五年春賦然洋航を企て歐米諸國を漫遊して各國商工業の實況を踏査し大に得る處ありて翌年歸朝せり、彼の歐米會社法に準據し大倉組を組織して自から其社長とな



り大に商業の規模を擴張し、英京倫敦に日本商人の支店を開設せる君を以て嚆矢とす。其後内外國の各地に支店又は代理店を設け彼我の物産貿易を試み着々として効果を奏し、直輸出入者の錚々を以て鳴るに至れり。

明治七年臺灣征討の役に當ては陸軍省の命に依り砲具糧食を調達し部下五百餘名を召連れ自から臺灣に渡航し以て其充實を謀り滯蕃中風土病と戦ひ困難を極めたりと雖も勲勉の力は更に是等欠乏の遺憾なからしめたり。同十年西南の役に際しては又自から戦地に臨み軍用の完備を期し身命を抛ちて晝夜奔走せられたり。此の二回の戦役に於て官軍の兵器糧食を満たし以て後顧の憂なからん事に努めらる。君の勲功亦偉大なりと謂ふ可し。是より名聲大に揚り業務益々盛大を極め實業社會亦比肩するものなきに至れり。

君又愛國の志深く豫て本邦商業の兎角不振を嘆ずるは外國貿易の殷盛ならざるに基因せるを悟り、君が終生の天職は是を發展隆盛ならしむるにありと決意し、何事にても外國に關係する事項は總て勞苦を厭は

ず巨費を顧みず直進邁往一意専心是を遂行し或は人を海外に派遣して精細の調査を遂げしめ、或は國産を輸出して試賣を爲す等の苦心は擧げて數ふ可からず。明治十七年の交我輸出製茶に粗製濫造の弊盛に起り是が爲め信用頓に失墜し、北米合衆國政府に於ては不正茶輸入を嚴禁せるを以て本邦製茶は一時米國市場に於て聲價を失ひ大に衰頹の傾向を呈せり。君大に是を憂慮し製茶は本邦貿易品の内生絲に次ぐ主要物産なり。是が盛衰は直に帝國の經濟に影響を及ぼす今若し海外に信用を失はば我貿易上多大の不幸なり。宜しく是が善後策を講じて信用恢復の策を執らざる可からずと、挺身以て米國に渡航し各都市に至り彼國茶業者を集め日本製茶の純良にして且無害なるを懇切に説明し、或は新聞演說等に依て浴ねく全國に周知せしむ。是等に費せる金額も不尠、時としては一夕の響應に數千金を抛ちしことありと云へり。君は斯の如く熱實至誠を以て彼國朝野人士を感動せしめたるを以て、幾時もなく輸入の禁を解き價格も前日に異ならざるに至り、次で製茶貿易の旺盛を見るに至れり。



君又本邦商業の規模偏小にして西洋各國と對等の貿易を爲す能はざるを痛嘆し本邦商業の組織を革新するを以て其任と爲し、常に人に語て曰く目今政治法律兵制教育醫事衛生等皆泰西の法に鑑み日進月歩の趨勢を以て疑々乎として改良の實を擧ぐ、然るに商業のみ獨り是に伴はざるは實に實業家の慚愧に堪へざる次第ならずや、今日に當り商業の組織を一新し富國の基礎を確立するは吾人實業家の責務と謂はざる可からずと熱烈以て唱道せらる、茲を以て苟も國家の利益と認むる事業は一として關係せざるはなく又公共の爲め新事業を企劃するものは先づ君に就て其當否を質して着手せざるはなしと稱せらる、噫徒手より起りて半世の間に斯く偉大の効を奏し天下の富豪たるに至る、我實業社會が稀世の偉傑として尊崇の聲を絶たざるもの洵に故ありと謂ふ可し、後進の君を學ぶもの能く屈伸の理を知らずんばある可からず、始め飯倉町に人の雇員となれるは屈んで未だ伸びざるの時なり、後の發達は此の屈みし中に胚胎せり、謂はずや尺蠖の屈するは其伸びんとするにありと以て鑑とす可き也。

君が察々たる鑑識を以て半世の勢力遂に尨大の規模を造りたるは以上略述せるが如し、爾來の奮闘は眞に刮目に値ひせり、明治十七年再び海外商況視察の必要を感じ歐米先進國を巡遊して商業工業等の實業方面に關する詳細の調査を遂げて大に感悟する所あり、歸朝後直ちに日本土木會社を創設し官衙其他土木事業の建築設計等一切の需に應じ、和洋風の建築嶄新なる各種土木の考案等巧みに時好に投じて名聲又一層の光輝を放ち、比類なき大會社として謳歌せらるゝに至れり、君又帝國商業の幼稚にして到底歐米のそれと競争を爲す能はず、遂には東洋の商權を彼等に蹂躪せらるべきを憂ひ、斯界の俊材養成の最大急務なるを悟り、莫大の私財を抛ち東都に大倉商業學校を、大坂に大坂大倉商業學校を創設し東西相呼應して盛に後進啓發の道を講じ有爲有材の俊秀を出し爲めに我商業界に多大の貢獻を爲し、更に進んで朝鮮の一角に善隣商業學校を設立し以て同國商業の革新に資する所あらんとす、其着眼の機敏にして宏量雄大の氣宇は實に讀者をして驚嘆の外なからしむ。



抑も國家の貧富は其國生産の多寡に基因する所尠からずと雖も、溯て其根源を討究するに商業の智識如何に關係する處多大なる可きは更に吾人の喩々を要せず、君既に帝國の地位に鑑み將來の大勢を察して商業界の人材を養成す、其偉功素より論を俟たず、誰か其明察先識の具眼に崇敬の念を惹起せざるものあらんや、

君にして特に賞讃すべきは日露の交渉結んで解けず、彌々戦端を開くの時是れ皇國安危の岐るゝ重大事件なりと大に憂慮し、軍資金に貢獻せん爲め數十年來丹精の結果蒐集せし美術館一切を賣却して軍資に獻納せんとて外國新聞記者團に協議し之れを各國に公告せしが如き、又其當時軍資公債發行に付き其引受を大蔵省より民間有志に求めたるとき、國家大切の場合なりと銀行團の外に個人として卒先、金參百萬圓の應募を申出たるが如きは全く愛國の真情にして此の勇氣に鼓舞せられ容易に多額の公債纏まりたるが如き間接の功績尠ならず、君又國事に盡瘁し維新以來國家の爲めに私財を抛ち、軍資獻納、出征軍人遺族の救護に力めて更に遺憾なからしむ、日清日露の兩役に當て

は最も多大の力を盡し功績殊に顯著にして世の賞讃を得ること尠からず、官又其功を賞して日露の戦役終はつて後他の功勞者と均しく勳二等を授けらる、

君又神戸市に安養寺山の別墅を寄附して大倉山公園を作らしめ、恩賜財團濟生會に率先壹百萬圓を寄附して我全國の富豪に其範を示せるが如きは、世界の富豪「カーネーギー」にも譲らぬ行爲なりとて天下萬人の嘆稱して措かざる所也、

君近年超然主義を執り多く世の煩を避けて悠々自適以て心身の勞を慰せんとし風流に親しみ狂歌に耽り、音曲一中節に達し、書は光悦を師として堂に入る、君の狂歌に於ける天眞の襟懷自から流麗して絶世の句を爲せり、世を諷し人を評し景を描く一として其偶意の顯然たらざるはなし、然も其渾然句を爲す處些か圭角を顯はさず、語韻の内自から妙調を存し斯界の大家をして卓を打て三嘆措かざらしむ、眞に其蘊奥を極めたりと謂ふべし、

君斯の如く風流三昧に入ると雖も、又帝國の前途に多大の苦衷を重ね



らる。

二二四

唯見れば何の苦もなき水鳥の足にひまなき我が思ひかな。  
是れ水府西山公が會て其憂國の至情を叙したる名歌なり、君又此の意  
義を了し真に得心の笑を漏せり、

君又宗教上に多大の趣味と信仰とを有し其感化力の偉大なるを論じ、  
其布教發展に就て少からざる盡瘁を重ねて聞く、斯の如く幾多の方面  
に涉り國家的眼光を以て活躍せらるゝもの天下又匹儔を見ざる所なり  
明治の元勳たるもの豈曾に廟堂一二の官人の専有たるに限らんや、  
賦みに君の吟詠二三を録すれば、

臺灣從軍の時向島の櫻花に暇乞すまで

翌年の春を契らむ身ならねばことしの花にさらはおさらば、

西南戦争のとき九州の野にて

しらぬ間に春は過ぎけり梅櫻みしどもなしに聴くほととぎす、

明治四十三年神戸市へ別荘を寄附すまで

此里と共に樂えよなれ來つる松のあるしはけふかはるとも

明治四十四年の春大患中重態の病床に在りて

佛様誰も迎はに來ぬからは鶴彦はまた娑婆のものらし、

伊藤公の洋行せらるゝ時北越旅行中なれば

土地の方言にて送別の歌

おとのさんよそのお國へいてきなれ

まつてるのんしまめてかへるを

六十餘年間の奮闘の跡を顧みて

渡り來し浮世の橋のあと見ればいのちにかけて危ふかりけり、  
君が超群拔俗の傑士たるは天下の認むる所なりと雖も其隠れたる半面  
に於て苦辛憔悴の存するを悟らざるものあり、君が六十有餘年間の奮  
闘を偲び琴線に觸れて流露せる彼の吟詠は實に後進子弟の頂門の一針  
たらずんばあらず、艱難人を玉成するの古語又思はざる可からず、君  
の奮闘史は實に明治實業界の發達史にして亦後世の一大寶典たらずん  
ばあらざる也、(赤坂區葵町三、電話長芝一五九 別邸南葛飾那寺島村二  
九四三、電話下谷六四三 大倉組京橋區銀座二ノ七、電話特長京橋二〇二

二二五







業會等の各團體を代表して参列せり、名にしをふ合衆國の主權たるを以て歐亞列國の有力家進んで贊同の意を表し、参列せし人材は殆んど世界の明星を會したる偉觀あり、君は此の世界人傑の環視の中に立て合衆國沿岸貿易に於ける支障の法律を改正すべき點を指摘し、同國官憲の注意を促して名聲大に揚れり、次で又東洋商業上の唯一機關たる太平洋海底電線敷設の急務なるを主唱し貿易發達の経過を示し且通例を擧げて比較論及せらる、其論旨や精細にして機微を盡し歴々として肯綮を得たり、聽衆皆感嘆せざるはなし、現今最も樞要の機關たる太平洋海底電線の布設は實に當時に胚胎し爾來熱烈なる君の唱道に因て商業太平洋電信會社の設立を見るに至り、三十六年七月を以て遂に電線沈設の竣工を告げたり、明治三十七八年日露戰役に當て我陸海軍に與へたる利益は擧げて數ふ可からず、殊に「バルチック」艦隊の動靜を知り敵國艦隊盡滅の偉功を奏したるが如きは真に驚嘆の外なき能はず、海底電線の布設が東洋貿易に多大の貢獻を爲せるのみならず、戰略上の一大機關たるに至ては亦偉大の効果と謂はざる可けんや、是が布設

の唱道者たる君の明識や真に驚く可きにあらずや、君は斯の如く世界的眼光を以て將來の企策を施し遂に不朽の功績を明治聖代に印せり、其小なる勳功に至ては殆んど數ふ可からず、試みに其主要なるものを列擧すれば左の如し、

明治五年貿易者が製茶貿易の好況に乗じて粗製濫造品の輸出を爲すに  
より信用順に失墜して其不況を招致せるを以て君は率先して其弊を矯  
正し、同十二年八月共進會の開設に當り審査委員を命せられ爾來共進  
會博覽會等の開設毎に評議員又は審査委員を命せられぬ、十七年中央  
茶業組合本部顧問となり、尋で累進して同組合會頭となり二十四年全  
國茶業組合中央會議々長に擢ばれ更に農商務大臣の指定により日本製  
茶株式會社々長となり、同年又横濱貿易組合總理に推さる、二十二年  
市會議員となり議長に擢まれ二十三年縣會議員に當撰し市部會議長と  
なり、三十年横濱商業會議所會頭に推薦せられ同年臺灣銀行創立委員  
被仰付三十一年農商工高等會議員被仰付、三十二年渡米して製茶輸入  
税の廢止運動を爲し又沿岸貿易條例の改正を促し、彼の海底電線布設



を主唱して偉大の功を掲げ、三十四年日本赤十字社監事となり三十九年南滿洲鐵道株式會社設立委員被仰付、四十年多額納稅者の互選に因て貴族院議員となり、海外商工事務官設置の建議案を提出して上下兩院の通過を見、四十三年度より實施せらるゝに至れり、四十年日露事件の功に因り勳三等に敘し瑞寶章を賜はる、四十一年東洋拓殖株式會社設立委員被仰付、四十二年韓國銀行設立委員被仰付四十二年生産調査會委員被仰付、三十七年五月聖路易萬國博覽會開設せらるゝに當り日本出品協會を組織して其委員長となり數萬圓の私費を抛て完結を謀れり、當時に於ける皓潔の舉措は愈々徳望を大ならしめたり、明治三十七八年日露戰役に當ては軍資金一萬圓を献納し尙又巨額の國債募集に應じて國民至誠の價を致し、四十二年渡米團に加はり澁澤男の一行と共に日本實業團を代表し大に日米兩國間の交情を温めて歸朝せり、四十四年恩賜財團濟生會に巨萬の義捐を爲して博愛の意を表せり、君が横濱市に於ける功勞の巨大なるは世の齊しく認むる所、市會議長、又は教育會長として努力し數萬圓を投じて養舎の改善を謀り教育上の

方針を確立し尙土木勸業醫事衛生等凡て市の公共事業は一として其贊助を與へざるはなし、又敬虔の情に富み神社佛閣に多大の寄附を爲せる等の善行美事は擧げて數ふるに遑あらず、

明治二十七八年日清戰役の際恤兵會を組織して其事務委員となり、三十年横濱獎兵義會を組織し同會長に推され三十七八年日露の大役に當ては同會の組織を刷新して出征軍人の行を壯にし恤兵事業の遺憾なきを期し私財巨萬を義捐して遺族扶助の資に充て以て出征軍人をして更に後顧の憂なからしめたるは實に其勞を多しとせざる可からず、君が從來貢獻せる多大の功勞に對する賞與褒典感謝狀の如き積で山を爲すに至る、其概要を列舉すれば明治十四年第二回内國勸業博覽會より銅製賞牌並に金六十圓を賜り、十六年第二回共進會に於て製茶販路擴張の功勞賞を授けられ、二十年海防費を獻納せし廉を以て黃綬章を賜はり、二十三年第三回内國勸業博覽會及同事務局より銀牌並に金若干、二十四年臨時博覽會事務局より金百五十圓を各賞賜せらる、二十七年横濱市茶業組合員一同より金杯と感謝狀、日本絹織紡績會社よ



り感謝状、横濱米穀取引所設立紛議仲裁の盡力により銀杯及謝状、大日本水産會傳習所より感謝状、二十八年第四回内國勸業博覽會より出品に對し名譽銀牌同事務局より銀牌並に金七十圓、三十年第二回水産博覽會より賞牌を受け、同年十月日清事件並に實業獎勵の功に依り勳五等に敘せらる、三十一年及三十五年横濱水道公債募集に盡力せし慶を以て市長より銀杯及感謝状を贈らる、三十二年横濱陸軍憲兵屯所敷地を獻納したる慶を以て金杯一個を下賜せられ、三十三年横濱火災運送保險會社より設立盡力の慶を以て銀杯を贈らる、臨時博覽會事務局より金百圓、巴里萬國博覽會出品協會より紀念銀牌を贈られ、靜岡縣茶業組合より感謝状、三十五年勳四等に敘し瑞寶章を授けらる、日本綿絹會社より銀杯、第五回内國勸業博覽會及同會事務局より各銀杯一個を贈らる、横濱茶業組合より銀像、農商務大臣より謝状、聖路易臨時博覽會に盡力せし慶を以て銀杯を贈られ、三十八年比律賓政府より名譽賞牌、帝國教育會より功勞牌を贈らる、三十九年五二共進會に製茶精撰機を出品して名譽金牌を得、同年白耳義國より勳三等に敘せら

れ、四十年日露事件の功勞により勳三等瑞寶章を授けらる、關東聯合教育會より三十年間教育事業に盡瘁せし功勞に酬ゆる爲め謝状を贈られ、四十三年日露事變に際し軍資金一萬圓を獻納し從軍者家族扶助の爲め金二千三百五十圓寄附せし慶を以て金杯一組を下賜せられ、又横濱市に於ける百四十有餘の恤兵會より頌德表を贈らる、以上は單に主要なるを示すに止まれり、君が如何に社會公益の爲めに盡瘁せられたるかは是に因て其半面を窺ふことを得んか實業界の巨鎮たるもの誰か高崇の威に打たれざるものあらんや、抑も君は三重縣飯南郡川俣村の人同姓吉兵衛氏の五男にして弘化元年十二月を以て生る、文久二年十九歳にして横濱に出で茶商小倉氏の店員となり、製茶貿易に従事し茶商「スミス」氏「ピーカー」氏の譽遇に依て竟に現今の成功を見るに至れり、其奮闘の猛烈なりしは吾人の喋々を要せず、終始一貫せる熱誠は眞に敬服に堪へざる也、(横濱市元濱町二ノ一五 電話一一五、一一六)



錦鷄間祇候貴族院議員

子 從二位勳二等 鍋島 直彬君

當家は内大臣藤原鎌足の後裔鍋島平右衛門尉茂尙の孫肥前國佐賀の城主加賀守直茂の第二子和泉守忠茂の後なり。直茂忠茂の一身を犠牲に供し鍋島家の基礎を固くせし功勞を賞慰し、肥前國鹿島二萬石の地を分與せしに依り鹿島の藩主となりてより正茂、直朝、直條、直堅、直郷、直照、直宣、直彝、直永、直晴、直賢を経て現主に至る。君實は前記從五位下丹波守直永の第三子なり。夫人瀧子は同族鍋島直與の女にして宗家鍋島齊正の養女なり。君天保十四年十二月十一日を以て肥前國鹿島に生る。幼名を熊次郎と稱し天資英邁幼より讀書を好み一見能く記す。嘉永元年齡六歳にして始めて封を襲ぐ稍長するに及んで江戸に出て居ること七年。其間重野成廣、中村敬宇、鹽谷宕陰、安積良齋等に就て益々文學を修め常に封内文武の衰微を慨す。安政六年齡七歳郷に歸るや首として藩營鑛造館を再興し大に文武の道を獎勵す。又

藩吏を督して諸政を改革し藩治大に擧る。萬延元年從五位下に敘し備前守に任せられ文久三年備中守に任ず。同年宗家鍋島閑叟に代つて上京し建議を上り且つ陳述する處あり。而して天下勤王の志士と交はり尊王の大義を唱へ松本謙三郎の如きは互に君臣の義を結び、屢々詩文及び意見の交換を爲し謙三郎の大和に義旗を擧ぐるや藩臣原忠順を特派して其畫策の疎漏なるを戒めたるも及ばざりしなり。且つ宗藩の志士副島二郎、江藤新平、大木民平、大隈八太郎其他青年有爲の士と交り當時宗藩俗吏の頑迷にも闕せず陰に陽に宗藩勤王の舉を助けたり。明治二年正月表を上つて藩籍を奉還す。又郵便船に關する件等を建議す同五年米國に渡航し同六年歸朝米政撮要五冊を著す。同九年侍從に任じ十年侍補に轉ず後宮内、内務、司法の諸省に歴仕し十二年沖繩縣の縣令に任せられ大に治績あり。十三年正五位に敘し十四年元老院議員に任じ從四位に敘す十七年勳三等に敘し子爵を授けらる。十九年正四位に二十一年從三位に敘し錦鷄間祇候被仰付。二十七年正三位に三十九年勳二等に四十一年從二位に敘せらる。而して二十三年



貴族院の開設に當り同爵者の互選に依りて議員に當選せし以來累選今日に及べり、君子なし宗家侯爵鍋島直大の第二子直繩を養ふて嗣子に定め本年四月周防國舊徳山藩主子爵毛利元秀の妹政子を迎へて嗣子の夫人と爲せり、君家千歳の基礎茲に確立し維新元勳の名譽をして長へに謳歌せしむるに至れり、(芝區三田綱町三、電話芝一四九六)

從三位勳四等 伯 松 平 直 亮 君

抑當家は清和天皇の皇孫鎮守府將軍源經基八世の後胤徳川四郎義季十六世の裔、家康の男權中納言結城秀康の三男出羽守松平直政の後なり初め越前國大野に城主となり五萬石を領し、寛永十二年信州松本七萬石となり同十五年雲州松江に轉じ十八萬石に加増せられ、別に隱岐國一萬八千石を領せらる、後世松江に城主として十二世にして君に至る君は從四位松平定安の三男にして慶應元年九月九日を以て生る、幼名を陽之進又は優之丞と云ふ、明治六年五月大坂豪商大眉五兵衛の養子となりしが同十三年復籍し、同十五年十一月十七日松平家を繼ぎて相

續し直亮と改名す、同十六年二月十二日從五位に叙せられ、同年六月九日拜謁して天盃を賜はり同十七年七月華族に列し伯爵を授けられ、尋で同廿二年十二月正五位に二十六年十二月從四位に陞敘し、二十九年六月日清役の勳功に依り勳四等に敘し瑞寶章を賜はり、尋で三十年七月正四位に三十五年十二月從三位に被敘、同三十七年一月貴族院議員補缺選舉の際議員に當選就任、同年七月の總選舉に再度當選す、四十年九月日露戰役の功に依り旭日小綬章を授けらる、去る明治二十三年島根縣下の三大惡路の改修に際し金千五百圓を寄附し銀盃を賜はり又た大日本弘道會の會長として盡瘁し、夙に郷黨育英の事に志し、曩に獨力舊藩下の秀才に貸費して修學せしめつゝありしが、先年藩の有志と謀りて財團法人育英會となし現に之が會頭として盡瘁せらる、現代貴顯社流の好模範として推讃するもの亦宜なるにあらずや、(四谷區元鮫ヶ橋五八、電話番号町七四)

貴族院議員 醫學博士男爵

高 木 兼 寛 君



帝國刀圭界の泰斗として令名夙に内外を震撼せられたる高木兼寛君は日向國東諸縣郡穆佐郷に出づ、幼名を藤四郎と稱し實に嘉永二年九月十五日の生誕なり、弱冠穎悟豁達にして果斷勇決百折不撓の概あり、師に就き文武の道を學び慧眼早くも時運を洞見し年十三にして始めて醫學に志あり、當時父君禁闕警衛として京都に干役し家にあらざるを以て果さず、慶應元年歳十六父君の許可を受け先づ鹿兒島に至り石神良策氏に學び、後石崎俊齋師に就き汲々斯學を研鑽す、明治元年岩崎氏藩命を以て京都に出張す、君亦其跡を追ふて京都に至れば則ち師の病んで已に鬼籍に入るあり、悲恨何ぞ禁するを得ん、君毫も屈せず決然更に期する所あり會々東北諸州砲煙天に漲ざり劍火地に閃くあり即ち請ふて官軍治療院の助手となり官命を帯び磐城平、三春、二本松、若松等の各地に出張し以て治療に従事す、然れ共君當時の醫界技術の未熟なるを奮慨し心竊かに其蘊奥を極めんことを誓ひ兵亂鎮定の後直ちに鹿兒島に歸り、藩立開成學校に入り英學蘭學等を修む、更に明治二年拔擢せられて藩立醫學學校の教官に擧げられ次で校長に進む、明治

五年海軍省に出仕し軍醫療教官となり海軍中軍醫及大軍醫を経て少醫監に進む、後更に海外留學生として英國倫敦大學醫學部なる「セントトーマス」病院醫學校に入學せり、君非凡の英才を以て學術常に優秀特に振擢せられ同校解剖教室助手となり品行嚴正學術優等の爲金銀賞牌及賞品賞狀等を受領する事頗ぶる多數なり、明治十三年歸朝するや直に海軍軍醫中監に任せられ東京海軍病院長たり、此時私立醫學校及東京慈惠醫院の創立案成る、同十四年海軍軍醫大監に進み且つ中央衛生會委員を兼ね現今に及べり、次いで同十六年海軍醫務局長となり、十八年海軍々醫總監に榮進し海軍々醫本部長海軍々醫學校長等を兼任す、次で二十年醫學博士の學位を授けらる、曾て海軍兵員の多病殊に脚氣病者多數にして戰闘力の微弱なるを憂ひ、苦心慘憺其原因を究て兵食の改良を計り、其間三度、天皇陛下に拜謁し具さに其の狀況を奏聞し、優渥なる聖旨を拜受せり、爾來海軍兵員の健康頓に改まり士氣沛然たるに至れり、二十七八年及三十七八年の戰役に在て帝國海軍の偉大なる戰功を奏せしは、職として君の經營宜しきを得たるに由ると云ふも



不可なきなり。明治二十五年豫備役となるに及び貴族院議員に勅選せらる。尙二十六年より三十一年に至るまで大日本醫會理事長として鋭意専念我邦醫業界の向上發展に努力し、國民一般の衛生上に貢獻する所著大なりしは吾徒の多言を俟たざる所なり、一面亦東京慈惠會醫院長として明治十五年以來忠實的熱誠を以て更に變遷あるなし、蓋し該院は貧困にして醫藥を得る資力なき病者を施療するにあり、創業以來救濟者の員數を算すれば入院外來兩患者を合せ總計四十六萬二千五百九十七人の多きに及べり、且又明治十八年中該院内に看護婦教育所の設置をなし爾來今日の盛況を致せるは君の主唱に出づ是れ本邦に於ける看護婦養成所の濫觴とす、而して全國醫學子弟の都門に膺集する者の便を謀り明治十四年成醫會を興し其會長と爲り講習所又は成醫學校を設け醫學生徒を教養し、二十四年東京慈惠醫院醫學校と改稱し、三十六年三月勅令第六十一號專門學校令に依り東京慈惠醫院醫學專門學校を設立し、三十九年更に東京慈惠會醫院醫學專門學校と改稱し生徒定員を五百五十名と爲せしを以て目今年々百有餘名の醫學士を出すを

得たり、創立以來の卒業生を掲ぐれば累計九百五十二名にして其内醫學士三百六名醫學得業士三百五十七名其他二百九十名に及べり、噫又盛なりと謂ふ可し、君の邦家公益の爲め多年盡瘁の勳功に依り明治三十八年三月特旨を以て華族に列し男爵を授けらる、次で三十九年招聘に應じ海外に航し米國諸大學醫學部並英國倫敦大學醫學部に於て帝國の軍事衛生に關する有益なる講演をなし、理論明晰頗ぶる彼地人士の賞讃を博し其結果英米兩國の大學より最大光榮ある學位を領受せられ内外に盛名を轟せしは尙世人の記憶に新なる所たり、君人となり剛邁にして嚴正常に言はんと欲する所を言ひ行はんと欲する所を行ひて毫も憚らず、口を開けば則ち忠君報國の大道を語り所謂國を醫するの本領を具へたる偉丈夫と謂ふ可し、天下萬衆の夙に景仰措かざる所以のもの蓋し茲に在るか、(日本橋區西紺屋町一〇 電話新橋二一六)

貴族院議員錦鶏間祇候  
正四位勳三等

千 阪 高 雅 君

君は米澤藩國老千坂高明氏の長男にして天保十二年正月二十九日を以



て生る、幼名淺之助又與市と稱せり文久三年八月家督を相續して太郎左衛門と改稱し後嘉遜齋と云ひ更に亦高雅と改む、二十六歳にして藩の奉行職となり兵制を改め士氣の振興を謀れり、夙に京師に上り澤醜翻の兩總督黒田品川の諸參謀に會し大に奥羽列藩の眞情を説き善後策を講せしも後或る支障に因て其意を果さず、歸藩して奥羽列藩の爲めに盡瘁する處あり、明治元年三月二十九日奥羽鎮撫總督九條道孝藩主に對し會津征討の先鋒且嚮導を命せらる、茲に於て君は上杉主水若林作兵衛をして會津藩を説かしめ以て歸順を表せしむ、後莊内清川口の戦鬪に因て事遂に成らず、偶々偵して聖上親征の議あるを知り君憂慮して措かず、國內の騷擾を鎮定し罪を一身に歸して責を負ひ藩主の誠意を開陳して勤王の赤誠を披瀝せり、爾來君は奥羽列藩を説き歸順の誠意を致さしむ、東北鎮定の速かに功を收めたるもの君に俟つ所大也と謂はざる可けんや、

明治二年廢藩の制定まるや舊藩主を以て藩知事となす、同年八月突然君を以て米澤藩大參事に任命するの辭令に接し一旦任を拜せしも暫く

にして辭せり、明治四年舊藩主上杉茂憲伯に従ひ歐州に留學せり、偶々岩倉公大久保木戸伊藤の諸參議と共に英國に渡來せるあり、君に會して奥羽鐵道布設の内談あり又大久保參議より養蠶製糸の取調方を内命せられ佛伊兩國に到り實況を調査し精細の復命を爲せり、後米國に於て銀行業の實況を視察して歸朝するに至れり、次で太政大臣三條公に面謁し泰西文明の情況を説述し立憲政體の急施の順序として先づ地方自治制を施行すべき旨を上申して容るゝ所となり、爾後君々として實施せらるゝに至れり、明治四年内務省七等出仕に補せられ同九年内務省權少書記官に進み、和歌山茨城等の暴動を鎮定し國家の前途を大觀して民力休養の必務を悟り意見書を奉呈せしが果然明治十年一月四日を以て減租及民費に制限を附するの詔勅を見るに至れり、同月君は内務省權少書記官に陞任せられ次で六月内務省少書記官に進めり、偶々東北及西南の騷擾あり又徵募巡查七千餘人の官命に服せざるあり、君岩倉大臣の命に依り是が處理に當り同月少警視を兼任し、次で陸軍中佐兼内務省少書記官に任せらる、君が鹿兒島に入るや縣令書記官等既



に難を長崎に避け政廳なきの情態なるを以て地方官事務をも兼攝せり、當時二回の演説は大に有名なるものにして滔々數萬言に亘り最長廣舌を極めたり、次で城山の賊軍を突き一舉に平定の功を奏せり、同十一年三月大久保内務卿の内旨に依て猪苗代湖の疏水工事に参畫し士族授産の道を啓けり、同年六月鹿兒島逆徒征討の功に依り勳五等年金百圓を下賜せらる、同年十月群馬長野の二縣に出張して二縣の當業者に養蠶製糸の改良を諭示し大に發展を見るに至れり、同十二年三月石川縣令に任せられ同年十二月從五位に敘せらる、同十三年福井縣同十五年富山縣の新設を建議して實施せらる、同十六年内務大書記官に任せられ十七年勳四等に敘せらる、同年岡山縣令となり次で岡山縣知事となる、同十八年十一月正五位に敘せられ二十三年勳任官二等に進み同年從四位に敘せられ勳三等に叙し瑞寶章を賜はる、二十九年依願本官を免せられ貴族院議員に勅選せらる、同二十九年三月第七回帝國議會招集の際勵精に付銀盃一組を下賜せられ、同三十一年四月錦鷄間祇候仰付らる、二十八年私立岡山縣教育會長岡田純夫は同會員九百八

十六名を代表して感謝狀を贈られ、大坂府水利委員及大坂京都滋賀水利委員等五百三十名自筆署名の感謝狀を贈らる、蓋し澁川修治の完成に盡力し沿岸百年の憂を去りたるに依る、近年に至り實業振興に志し横濱鐵道株式會社、横濱倉庫株式會社の各取締役となり尙兩羽銀行の取締役且東京支店の主任として盡瘁する等幾多の努力を重ねらる、君公共事業救済事業等に賛同し多大の義捐を爲し金銀木杯賞狀等を領するもの枚舉に遑あらず政治實業兩界に涉り赫灼たる偉功を擧ぐ百世に廟食す可き天爵を享受せるもの眞に君の謂也、岡山縣會議長林醇平氏縣會を代表して感謝狀を贈らる其辭に曰く、閣下來りて我岡山縣に令尹たるや十有餘歳星霜を閱し其間施政の見る可きもの少しとせず就中曩きに縣下二十五二十六兩度の水災に遭逢する如き逆行氾濫堤防を破壊し良田を荒廢し家屋を流失し人畜を死傷し財を盡し産を蕩し罹災の民殆んど其歸する處を知らず其慘其悽當時の事を追想すれば今猶肌膚粟を生ずるの感なからんや閣下乃ち自ら上京闕下に至り天顏に咫尺し具に縣下生民の塗炭の慘を陳じ要路貴顯の門を叩き罹災



の悽を陳べ日夕奔走經營勞心焦慮遂に鉅萬の補助を國庫に仰ぎて歸縣し水災救治善後策を講じ草鞋輕裝災餘の氓隸を慰問し水害山村を跋渉し屬を督し役を董し防を修め急を援ひ規畫措施其宜きを得罹災の民瘼瘼癒るを得流氓の者各其堵に安するを得る是皆閣下奔走經營の賜ならずんばあらず明治二十七年十月閣下任を辭して京に歸るも縣下百萬の民豈閣下が水災善後策に努められたるの功勞を忘れんや茲に岡山縣會を代表し聊か感謝の意を表す、明治二十七年十二月七日岡山縣會議長林醇平貴族院議員正四位千坂高雅殿、(赤坂區青山南町六ノ一一九 電話芝一六〇)

黒田侯爵家 山 中 立 木 君

君の現今に至れる奮闘の経路は一に國家的觀念の發揮に外ならず、所謂至誠一貫以て奉公の大義を盡せるもの其國利民福の増進に至ては歴々として數ふ可きもの少からず、而も是を詳述するに於ては鴻幹の舊冊も以て能く盡す所にあらず、吾人は單に其大要梗概を掲げて其徳を

謳歌するに止めんとす、

抑も君は福岡縣早良郡烏飼村の人井上權一郎氏の令男にして弘化二年十月二十日を以て生る、夙に勤王の志厚く同志と共に血を嘔て生死を誓ひ尊王の大義を唱道せり、文久二年京都に赴き朝平御門の警備に勤務し同三年八幡御行幸の際筑前藩精選の士となり、供奉を命せられ烏帽直垂の賜あり同年三條公以下六卿の西下に會ひ隨伴せんとして今出川御門護衛の薩兵に擁せられ遂に其志を果さず後ち歸國後遊擊銃士となり日本固有の武士的精華の發揚に力め、文武館の設立を爲し其監察に擧げらる、尋で山中矢柄氏の養子となり以て其姓を冠せり、當時君は奥羽征討の軍に参加せずと雖も愛宕殿を謀主として勤王の義舉を企てしも中途或る支障に因て中止せり、歸國後就義隊、進築隊の幹事、顯勇隊の中隊長を勤めて客氣旺盛の概ありき、明治四年解兵となり士族長を命せらる、同六年筑前の暴動を鎮定し縣廳に仕へて十一等出仕捕亡長となり解兵後大に畫策する所あり、北門の鎖鑰を嚴にせんとし屯田兵制の急務なるを建議したるも尋で千島樺太交換の議成りて止む



歸國して育英事業に盡瘁し教育上の貢獻少からざりしも西南戦役の勃發するや、官職の間を斡旋し大に勉めたる所ありしも果さず、亂治まつて嘉摩穂波郡長に擧げらる、十七年福岡區長となり十九年那珂御笠席田三郡の郡長を兼攝し二十二年福岡市長に推さる、此の間君の努力は殆んど枚擧に遑あらず、勸懲貯蓄の奨励に力めて細民の爲めに授産の道を講じ道路の改修那珂河の開鑿を遂行して交通運搬の利便を開き郡政縣治上の紛議を調停し九州鐵道の創設を勸誘し、産業の發展に力めて炭坑熱勃興借區を競争せし實業家の紛議を融和し學事の振興を計りては自から數百金を投じて有志を慫慂し、福岡中學修猷館を創設せる等の美譽は社會の最も賞讃する所たり、二十五年遠賀郡長に轉任し水利土木の改善を企畫し同地方水險の惡弊を矯め治績大に上れり、後舊主黒田侯の御召に接し恩命優渥に感佩し郡民の惜別を慰諭し上京して舊主に奉仕す、爾來二十年間侯爵家の爲めに盡瘁せるもの亦一再ならず、二十七八年日清戦役の際有力なる華族の發起に因り星ヶ岡茶寮に十萬石以上の同族を會し軍資の獻納を擬議せるに當り君主家を代表

して參會し滔々として華族の獻金よりも先以て臨時帝國議會を招集し軍事國債募集の必要を説き且つ各諸侯は舊領地に於ける出征軍人の遺族扶助に努め後顧の憂なからしむ可きを述べ、熱心唱道したるに直ちに其賛成を得て以來着々として實行せらるゝに至れり、尙主家の舊領福岡へ出張し黒田侯爵を輔けて遺憾なく出征者の遺族を訪問慰諭して救助の道を盡せりと云へり、如何に君が卓見にして仁慈の資に富まれしかを窺ふに足らん、同三十七八年日露戦役に當ては主家の命を奉じて出征軍人遺族の救助戦死者の追吊等に力め、洽ねく主家の仁徳を知らしむ其功偉ならずとせんや、尙侯爵家中興の祖長政の四男高政の裔長清公の家系廢絶に歸せるを慨し當主長成君の令弟長和君をして其跡を襲がしめ、黒田家の根柢をして一層鞏固ならしめんとし、熱心唱道して主家の容るゝ所となり、出願の後長和君に男爵を授けられて分家し以て廢絶の跡を再興せり、

斯の如く君の生涯は一意公に奉じて聊か私意を挟むなし、誠忠の龜鑑奉公の模範たるもの誰か賞讃せざるものあらんや、(赤坂區福吉町一



電話新橋一二九

辯護士  
法學博士

鵜澤 總明君

法曹界の巨鎮として名聲内外を震撼し、博覽強記を以て社界の畏敬する所となる。其法廷に立つや風發卓勵抑揚頓挫數時間に亘れる辯論も會て施息を見ず、論理一貫一絲亂れず古今東西の法理を叩き、事實事例を擧げて些か澁滯を見ず洵に斯界の大家たるに愧ざる也。久しく法曹界に雄を鳴らせしも近年代議士と爲つて政界に驀進し例に因て猛烈なる言論を揮ひ、一々軟派の心魂を潰抉し得て最も清硬の旗幟を樹立せり。抑も君は明治五年八月を以て千葉縣長生郡新治村に生る。幼にして聰慧夙に神童の賞譽あり、其普通學を卒はるや法律學を研鑽して辯護士となり、進んで東京帝國大學法科に入り卒業後更に又大學院に轉じて螢雪の功を積み學蹟優等を以て卒業せり。傍ら明治大學講師及慶應大學講師を兼ね後進指導の任に當れり。其蘊蓄せる學殖と數年來の經驗とは優に斯界の大家を超越し法學博士の稱號を領せり。斯の如

二四〇

きは最も異數たるもの也。明治四十一年第十回總選舉に當り千葉縣郡部より推選せられて衆議院議員に當選し爾來法律政治の兩界に亘りて錚々たる名聲を博せり。今や衆議院内に於ける唯一の法律家として其立案調査等の樞要なる機務に當り最も推重せられつゝあり。近頃鳩山氏逝き増島岡村の名士杳として聞へず法曹界亦寥々の觀あり。斯界の老雄君を評して「近代の明哲、願くば法律專問を以て徹底せられんことを」と吾人も亦此の感なくんばあらず。とまれ近世の偉傑たるや論なき也。(京橋區築地三ノ一五 電話京橋五四三)

醫學博士 吾妻 勝剛君

本邦醫院の巨擘順天堂病院の名聲は曠々として内外に喧傳せられ、模範的設備を完成して殆んど遺憾なく殊に杏林界の俊秀各其獨特の巧技を揮て診療に従事す。其大名を博するや固より其所也。斯界の明星吾妻先生亦同院に在て産科婦人科の主任たり。其技量に於て其信望に於て超然一頭地を拔く其令名あるもの豈偶然ならんや。

二四一



君は慶應三年十月を以て生る。累世佐竹侯の典醫たり。父君勝重氏夙に壽命を以て大學東校に學び次で埼玉縣立醫學校に教鞭を執り後同地に開業して錚々の聞へあり。君明治八年東郡に出て普通學を修め同十三年より同人社及獨逸學校等に學び同十七年九月大學豫備門に入り同二十三年九月帝國大學醫科大學に入り同二十六年十一月を以て卒業し醫學士の稱號を領せり。次で醫科大學產科婦人科學教室助手を命せられ同三十一年二月文部省の命に依り、產科婦人科學研究の爲め獨逸國に遊學し、同三十二年十二月京都帝國大學醫科大學助教授に任せり、而して當時新科の泰斗フロイन्द、ヘガール、オルスハウゼン、キエストネル等に私淑し斯學の蘊奥を究めて同三十四年六月歸朝せり。同月大學教授に任じ產科婦人科學教室主任となる。同三十六年第五回勸業博覽會の開設あるや其審査官を囑托せられ、同年八月醫學博士の學位を授與せらる。同三十九年十月京都醫科大學教授を辭し濱田博士の經營せる東京產科婦人科病院に入り専ら院務の擴張發展を謀り企畫する所ありしも、昨四十三年五月同病院を辭して佐藤進博士の經營せる

順天堂病院に入り、產科婦人科の主任となりて努力を重ね名聲隆々たるに至れり。(本郷區丸山新町二二、電話下谷三二八六)

住友總本店 總理 事 鈴木馬左也君

豊富なる學識と多大なる經驗とを以て世に處し、官に在ては錚々の名を博し野に在ては實業家の模範を以て稱せらる。眞に當代の俊材たるを失はざる也。

聞く君は日向國高鍋の舊藩士秋月種節君の第四子にして幼名頼郎と稱し、文久元年二月二十四日を以て生る。九歳にして出でて同藩の士鈴木家に養子となり以て其姓を冠せり。君幼より學を好み夙に藩立の明倫堂に入て漢學を修め後ち十三才にして笈を負ふて鹿兒島に遊び、更に石川縣方面を歴遊して學業大に進めり。明治十一年帝都に出で帝國大學豫備門に入り専らで本科生に進み登雪の功を積み、遂に明治二十年法科大學政治科を卒業し直に内務省に出仕して試補となり後ち地方官として愛媛大阪岐阜等の各地に赴任し、知縣を翼けて大に技能を發揮し



後ち農商務省に轉任して實業界發展の爲めに盡瘁して貢獻する所尠からず、後大に感ずる所あり冠を掛けて住友家に入りて本店支配人となり、店務を帶て歐米を漫遊視察すること二年にして同三十一年歸朝し翌三十二年春住友家經營に係る別子銅山の支配人に擧げられ、同地に赴任して其職に在ること三年、百般の施設改善等の爲めに全力を注ぎ苦心經營銳意盡力の結果業務益々進歩發展して功績頗る顯著なるに至り、同三十五年再び本店支配人に轉任せられ尋で同三十七年總理事の樞職に榮進し、同家一切の業を總轄して拮据勵精専心以て同家の爲めに傾注せらる、君資性潤達にして人を容るゝの寛量あり而も自己の責任を忽せにせず常に虚名を厭ふの美風を有し、同家事務の外は殆んど他業に關するを欲せず僅かに大阪商業會議所特別會員に列し曾て韓國拓殖株式會社創立委員、南滿鐵道委員となりしに過ぎずして、各其職責を盡さるゝと雖も之れ君の本意にあらず實に辭するに由なきの止むを得ざるに出でしものと云へり、寔に實業界の龍鑑たる偉才たるに耻ぢずと謂ふ可し、(大坂東區石町二丁目)

京都帝國大學文科大學教授

正五位勳五等  
文學博士

谷 本 富君

君は讃岐高松の人慶應三年十月を以て同市濱の町に生る、考諱は耕藏儒學を以て身を起し夙に藩學講道館に召されて教授の班に列せり、君幼にして孤獨唯だ老祖母の賢明なる鞠育愛撫に因り終に他日成業の基を啓けり、君天資明敏夙に神童を以て稱せられ小學校時代より常に首席を占む、而て後中學校より轉じて高松醫學校に入るに及び又首班たり遂に甲科を以て及第し明治十四年春醫學全科を卒業す、時に年齒僅に十五太た奇異なりと稱せらる、尋で伊豫國松山に遊學し更に翌十五年三月度を負ひて東都に出づ偶々時事に感ずる所あり政治道徳の基礎を深く學理上より研究して以て大に宣説するあらんと欲し忽ち醫學を廢して哲學を志し、先づ中村敬宇翁の同人社に入り僅に三年に滿たずして普通英學科を卒業す、即ち撰科生として東京大學文學部哲學科に入り帝國大學に繼續して在學す、故外山博士の知遇を得ること厚し、



明治二十二年全科を終了せり時に文部省教育學科特約生の制度を文科大學内に設く、蓋し獨逸國の「ヘーヘル、レーレル、ゼミナール」に模するなり君教師「ドクトルハウスクネヒト」氏の勸奨歎し難く特約生の一員となる、而も實は助手として「ハウスクネヒト」氏を助けたるもの甚だ多し、翌二十三年夏卒業するや、故品川子爵等の懇囑に由り招きに應じて山口高等學校教授となり奏任官五等に敍せらる、其擔當する所は倫理哲學並に西洋歴史等なり而して校務の改善に就て頻に敏腕を發揮せり、明治二十六年冬同校騷擾の事あるや卒先責を帯びて高踏勇退し、東都に歸臥せり次で君を東京高等師範學校教授に推す者あり、校長嘉納氏亦切に囑托せられたるに依て先づ同校並に附屬音樂學校講師となり、教育學哲學を講ず未幾同校教授に任じ高等官七等に叙し累進して高等官三等に陞れり、教育博物館主事を兼ね又文部省視學官たりしことあり教授の餘暇著作並に講習に執筆して怠らず「ヘルバルト」派の教育學說を唱道して一時全國を風靡せり、後ち時勢の進運に鑑み「將來の教育學」を講述して國家的教育學を建設せんと試みたり、明治三十三年秋

官命を奉じて教育學研究の爲め英佛獨三國に留學し尙且つ允許を経て西班牙、伊太利、埃斯利、匈牙利、和蘭、白耳義諸國を遊歴して幾多の學會に出席し演説する所あり歸途更に米國に留ること數月、明治三十六年の初無事歸朝せり、之より先き京都帝國大學文科大學の組織調査に就て故大西博士と同じく内囑せらるゝ所あり、歸來高等師範學校を辭して京都に卜居し理工科大學講師として教育學を講じ、傍ら文科大學開設に奔走盡力せらる、明治三十八年七月中等教育の根本的革新に關する研究を題する論文を提出して文學博士の學位を授與せらる、是れ教育學を以てする者の嚆矢なり、明治三十九年四月文科大學開始に際して教授に任せられ教育學の講座を擔任し未幾高等官二等に陞る理當さに學長たるべく之を勸めたる者有たれども、俗務を好まずとて之を辭退したりと傳ふ、別に神戸高等商業學校並に二三私立佛敎大學の講師を兼ねたり、君雄辯にして「ブライアン」氏に匹敵すと稱せらる、著書多く「心身相關之理」を處女作とし實用教育學及教授法科學的教育學講義「普通心理學集成」教育學講義速記録「小學教授法講義」將來の教育學「新



體教育史要は皆洋行前の執筆に係る、而て歸朝後は又學說自から一變して新境を拓き新教育學を主張す、乃ち「戰時讀本」を始めとし「宗教と教育との關係」「新教育講義」「系統的新教育學綱要」「新教育の主張と生命」「我國文明史上に於ける弘法大師の位置」「英譯あり」「群衆心理の新研究」「楠公と新教育」「孟子と新教育」「四十七士論」「栗山先生の面影」「商業適用新道徳」等を著す就れも廣く世に行はる、蓋し君該博の學問卓抜の見識あり、流暢の辯麗の筆を以て簡明且痛切に是を發表せらるゝが故に老若雅俗の渴仰を受くる太だ多し、都鄙到る處講談を開かるゝ毎に聽衆千百を以て數ふ真に無比と謂ふ可し、明治四十三年夏又私費を以て海外に再游するや文部省は恰も埃國維納市に於て開設の商業教育萬國學會に委員として參列せんことを囑せり、其他白耳義に瑞西に佛蘭西に幾多學會に出席し名聲頓に天下に轟くも亦宜なる哉、君號を梨庵と曰ふ文藝評論を公にする亦尠からず、當代得易からざるの大家と稱す可し、或は曰く世人君を遇するに關西の大隈伯を以てすと今や其社會的活動局面の頗る廣きを言ふが如し盛なる哉、

左右田銀行  
頭取

左右田金作君

本邦實業界の錚々を以て内外に盛名を馳せたる左右田金作君は上州鬼石町左右田金兵衛氏の二男にして、嘉永三年十月を以て生る、幼名を雪松と稱せり、祖先は越後刈羽郡吉井村の豪農にして累世里庄を勤め名を嘉右衛門と呼び二百有餘年來の舊門なり、祖父の代に至て家道衰微し父は其次男を伴ひ鬼石町に移住して雜貨商を營めり、君十歳にして高柳村酒造家に仕へ更に轉じて中仙道本庄驛鹽魚問屋の店員となる然も其辛苦に堪へずして竊かに家に歸れり、父君是を戒むるに徳川家康公の遺訓を以てす、君是を暗誦して忘れず又更に高崎驛染絹問屋中島伊兵衛氏の店員となれり、文久元年高崎大火の後郷里に歸り爾來姉婿忠三氏の酒造業を補佐せり、當時横濱開港に當り商業旺盛なるを聞き十三歳にして横濱に出で舊知ある中里忠兵衛氏の支店員と爲り刻苦勵精主家の爲め大に盡瘁せり、本店は元來唐物商に業ぬるに生糸賣込を以て業とす、後或る請負の爲めに失敗して究境に沈落せり、君大に



苦心し支配役某氏と謀り取引盛高を集合して蠶絲仲買の方法を講じ、僅かに是を維持せしも後故あつて歸國し、生糸蠶紙の製造を研究し尋で是が買買に従事し、又武州熊谷在に於て蠶紙製造を試みて失敗し再び主家に奇遇せり、後衣類を典じて僅かに二十五金を得て洋銀仲次業を始め稍成功の端緒を得て金穀相場會社の仲買人となれり、明治六年西村喜三郎田中平八の諸氏と謀り「ブルス」組織を以て營業し意外の潤益を得、翌年始めて兩替店を横濱南仲通に開けり同九年生糸騰貴し洋貨の低落を見るや君時機失ふ可からずとて一大發奮して巨萬の利益を占め一躍富豪の班に列せり、次で土地の買收を行ひ世運の進歩に伴て利する處幾干なるを知らず、是より名聲大に揚れり、同十八年支店を東京日本橋區兜町に設け松野屋と稱し株式公債等の仲買業を營み、同二十年日本屑蠶紡績會社(後絹綿紡績株式會社)より推されて社長となり同二十七年辭任するや會社は君が損失填補の勇斷を徳とし、其皓潔なる志操を頌し特に感謝狀を贈らる、是より先同二十年以來利根運河株式會社が屢々究地に瀕するや君大に奮起して其挽回に努め進で取締役

となり、萬般の設備を完成し事務の敏捷を企畫し以て其隆運を招致せり、同二十八年左右田銀行を設立し信用偉大を極めて最も盛況を呈せり、同三十二年更に又左右田貯蓄銀行を設立し孰れも頭取として努力し行運洋々たり、君又明治十七年以來縣會議員、區會議員、市徴兵參事員、市會議員、市所得稅調查員、破産管財人、舊洋銀取引所肝煎、横濱兩替商組合頭取等に撰まれて多大の貢獻を爲し、其成功非類にして德望旺盛なり、前年功績顯著なるを以て勅定の銀製黃綬章を下賜せらる、君又仁慈にして救恤に力め陰に陽に施與せしもの少からず、四十四年濟生會の舉あるや巨萬の義捐を爲して世の推獎を受く、洵に當代匹儔を見ざる大成功家と云ふ可し、(横濱市月岡町一ノ三 電話一三〇三)

### 實業家 樋口登久治郎君

金港發達史を編するに當り先づ閉却すべからざるは樋口家の功勳なり先代登久次郎君剛毅卒直にして且機略縱横の才腕を以て漸次數百萬の



資財を贏ち得、同港有数の富豪たるに至り同市の發展に偉大の功勞あり名聲遠近に喧傳せられて其偉功を頌せらる。君二代の當主として能く祖業を守り、皓潔の志操と明快の頭腦とを以て社會の信認を博し、其見地を多く宗教に因て確立し、進退深玄の妙理に適し常に人服し天應せり。茲に於て乎洋々たる家運を招致して聲望同市に冠たり、當代成功を稱するもの先づ同家前後二代の偉徳を頌せざるはなし、當代敬すべき紳士たるにあらずや。

先代登久次郎氏は山梨縣の出身にして幼より穎敏頗る活達の氣慨あり長じて父君の業務を見習ひ信用を博し巨萬の財を積み金港有数の富豪たるに至れり。後土地家屋の貸附及質業に従事し時運の進歩と共に益々發展を見るに至り家運愈隆昌を致せり。往年横濱市爲替會社の創設せらるゝや大に盡瘁する所あり、其第二銀行と改稱するに及んで取締役支配人又は頭取等を勤務し、終始同行の爲めに企策する所あり、現今其隆盛を見るもの氏の力の與て偉大なりしは社會の定評なり、現横濱市の爲めに貢獻せるもの尠からず、横濱市會議員、横濱市參事

會員、神奈川縣會議員、横濱商業會議所議員等の公職に在て企劃せるもの擧げて數ふ可からず。

君は先代の後を襲ひ二代の當主として聰敏敏捷徳望又隆々たり、横濱商業會議所議員及縣會議員として大に盡瘁する所あり、往年父君引退の後第二銀行取締役となり爾來銳意同行の爲めに企策せられ、勳功亦尠からず殊に吾人が敬服讚美の念に堪へざるは日蓮宗本化真教會の會長として同宗の布教擴張に盡瘁し、自他の宗教心を鼓舞し自から卒先して窮行實踐に努め、安心立命の見地を立て精神修養に鍛鍊を積み、日常萬般の行爲皆此の定軌に従て精勵するの一事なり、故に店員知友に至る迄其德行を慕ひ美風を感じ和氣霽々として渾然融和せるものあり、事業の進歩家運の隆昌一に此の源泉より流露せるを知る、吾人成功と宗教とを説くに當り其絶好の適例を得たるに滿腔の感謝を表せずんばあらず、日蓮宗派の巨傑甚だ少からずと雖君の如きは亦錚々の人傑たらずんばあらず、吾人切に其發奮興起を囑して已まざる也。(別邸横濱市本牧町六七一、電話長九八五、店舖同市花咲町二ノ二八、電話六五二)



横濱正金銀行は天下人材の薈淵を以て鳴る。就中敏腕の偉材として名聲赫灼たるものを戸次兵吉君とす。明治十三年始めて正金銀行が創設せられし以來茲に三十有餘年間勤績せる偉大の功勳は實に擧げて數ふ可からず。其終始を一貫せる至誠熱實は眞に後進の龜鑑たるに値ひす君が如何に正金銀行の爲めに從卒せられたるかは乞ふ其略傳に因て徴せん。抑も君は福岡縣の人。茲柳川藩士戸次親林氏の長男にして安政四年五月を以て筑後國山門郡城内村に生る。幼少學を好み文を好くす夙に神童の賞譽あり。明治元年藩費傳習館に入り文武兩道を究む。次で柳川洋學校に轉じて新たに東漸せる文明の學を脩め。同五年更に縣立宮本中學校に轉じ英人「オーエン」氏に就きて英語を研鑽し。學績大に上れり。明治七年佐賀の變亂の時に當て天下又騷然たり。君前途を達觀して外遊の念あり。偶々「オーエン」氏の歸國に際し是が隨行たらんと企畫せしも果さず遂に上京せり。紙幣寮中に設けありたる學局の創設

あるや君乃ち入學して銀行學、經財學等を專攻せり。其業を卒はるや同十年大藏省に出仕して其敏腕を揮はる。明治十三年正金銀行條例の發布あり。此條例に基き政府より金百萬圓、民間より金二百萬圓を募集して茲に横濱正金銀行の設立を見るに至れり。當時吉原重俊氏はが管理長たり。君是に從て管理官として入れり。同十五年春米國支店長を命せらる。爾來同地に駐まらるもの三年功勞亦尠からず。同十八年歸朝し同十九年英國倫敦支店の支店長事務取扱を命せられ其衝に將ること實に三年。着々として整理の實を擧げらる。茲に於て平敏腕の偉材として行の推重を得るに至れり。同二十九年より清國及印度南洋等の諸國を巡視し大に得る所あり。偶々印度國「ボンベイ」支店長急に歸國する事となりたるに因り。一時後任を命せらる。其任を終り歸朝するや本店支配人の要位を占め潑瀾たる活動は大に人目を聳動せしむ。次で取締役兼支配人に進み。四十年秋各國支店巡回及一般經濟視察として出張。翌四十一年更に取締役検査部長の顯職に進み同年秋又支那滿洲の利源等各種の視察調査を遂げて同四十二年春歸航せり。同行一の權威



者として樞密に參與し行員の淘汰、事務の刷新に多大の貢獻を爲し、  
現今隆々たる盛名を内外に馳せ銀行界の重鎮として推敬せらるゝに至  
れり、

二五六

### 工學士 白井 定民君

温良恭謙にして熱誠を以て事に當る、多難の工事も君の前に於ては些  
か難事たるを感せず屢々乎として歩武を進むる所向に敬服の外なき也  
部下の信頼長上の眷顧君の如きは未だ曾て見ざる處也、其大成蓋し遠  
からざるを知る可し、抑も君は岩手縣盛岡の出身にして明治五年十月  
を以て生る、幼より穎敏聰悟を以て稱せらる、早くも學績優良を以て  
中學の課程を卒はり、更に東京帝國大學工科に入り爾來銓雪の功を積  
むもの數年、明治三十二年全科を終了して工業士の稱號を授けらる、  
始め橋を内務省に解き新潟縣に出張して功あり、後海軍省に轉じて貢  
獻する處ありしも偶々感悟する所在つて官を辭し、明治三十七年十月  
市街鐵道株式會社に入て施設する所あり、三十九年十月更に小坂銅山

に轉じて大に名聲を博せり、四十三年七月東京鐵道會社に入り爾來の  
努力は一層の彩華を放てり、四十四年電車市有の議熟して東京鐵道が  
市の爲めに買収せられて電氣局を設置するや君亦入て技師となり多年  
研究の技術を以て着々として効果を奏しつゝあり、眞に得易からざる  
英才たるにあらずや、(牛返區市ヶ谷加賀町一ノ二五、電話番町三〇八六)

### 元祖實母散本舖 千葉 三郎 治君

桓武天皇の皇子葛原親王の遠孫千葉之介常胤鳥羽天皇の御宇元永二年  
五月二十日を以て生る武勇絶倫也、室は平廣常の女頗る美容あり人稱  
して天女と號せり、常胤源賴朝に従ひ偉業を輔けて寵遇殊に厚く恰も  
父子の關係に於けるが如し、久壽二年三十四歳にして舅廣常と共に後  
白河院の勅を奉じ九尾の妖狐を射殺せり、狐腹に三十一粒の佛舍利を  
藏せり取りて獻上す、帝是を宇治の寶藏に收む、狐の額に白玉あり光  
煌として夜を照らす是を鎌倉扇ヶ谷に奉祠し後三介稻荷を勧請す、蓋  
當時介の字を稱する拔群の士三人あり千葉之介亦其一人也、狐の末尾

二五七



に赤白の針二筋を藏せり白針は頼朝に獻じ赤針は廣常の菩提寺清澄寺に納む。當時用ゐたる甲冑刀劍等今尙存せり。文治三年七月二十六日名月を賞して領内檢見川沖に遊び網を投じたるに金光燦爛たる一寸八分の十一面觀世音の尊像を得たり。靈驗顯著なるものあり徳川家光尊信して金殿及特種の寶物を寄贈せらる。常胤より三十三世を経て君に至る此間實に八百年の星霜を経たり。同家は彼の有名なる實母散の本舖にして其靈藥發見の由來も實に歴々として奇瑞の發顯と稱するに足る。常胤十代の孫良胤に至て醫術に志し立得と稱し長崎に赴き醫學を修め歸來して武藏國豊島郡千代田村(現今の京橋區中橋)に醫業を創始し門前竹を植へて目標と爲せり。蓋し同家の定紋たる笹龍胴に因縁せるものなり。三世立得(後勸兵衛)の實母が文明二年産前大病となり。産後に至るも全快せず生命旦夕に瀕するに依り立得大に憂ひ累代相傳の十一面觀世音に二十一日の大願を遂げたるに、滿願の日に至て夢現の間を調合して二十一日分母に服用せしめよと告げ給ひて忽然として姿は

消へ失せたり。是に於て其靈藥を調合して實母に服用せしめたるに其効驗著しく二十一日間にしてさしもの大病も忘るゝが如く忽ち全快したり。爾來微恙だも感せず八十二歳の長壽を保ち忽焉として逝けり。試みに靈藥を諸人に施與したるに特効著しく一人として全快せざるはなし。後是を實母散と名け尙實母八十二歳の正壽に因み丸に正壽を以て印章と爲し廣く發賣するに至れり。後京都後嵯峨御所の御用命を得て菊花御紋章記載御免の御墨附を下賜せられ爾來名聲一層發揚せり。徳川家康公の如きは自筆の看板を下附せらる豈盛大なりと謂はざる可けんや。君家は又累代神佛に歸依し奇特の美譽少からず五世源胤の如きは親鸞聖人より善性の法名を賜はり且御糸切齒一本を御下賜せられ是を木像の中に納め後世子孫常に禮拜を絶たず。又千葉の血族宗信なるもの蓮如上人の佛弟子となり蓮真と號し親鸞聖人の御眞影及蓮如上人の御自作たる一刀三體の阿彌陀如來の木像を與へらる。是皆君家の寶物として深藏せらる。又慈覺大師御自作に係る千代田神社の御神體は千代田村の氏神なりしも時勢の變遷と共に君家に傳はり庭前に安置



せらるゝに至れり、是等の事實は皆君家歴代の家譜及現在の寶物等に  
 徹し聊か過誤あるなし、然るに近來實母散の偽藥は各所に行はれ正邪  
 を判別するに苦むに至れり、是に因て見るも實母散の効驗偉大にして  
 如何に世に重用せらるゝかを知る可し、笹龍朋及正壽の印章は君家専  
 用に係るものなれば是に因て其本偽を識別することを得べし、君家の  
 番頭柏屋惣兵衛なるもの一家を構へ十二三味なる不完全の實母散を調  
 製して發賣し現に中橋附近に於て販賣せりと傳ふ、同藥使用者は大に  
 注意を要す可きにあらずや、(京橋區中橋南傳馬町一ノ二)

### 實業家 古谷竹之助君

日本製茶の海外に輸出せられて以來各種の支障に因て屢々衰頹の厄に  
 遭へり、斯界有志の苦辛慘愴以て其發展擴張に努むるもの亦故なきに  
 あらざる也、吾人は滿腔の熱誠を以て是等有志の功勞に多大の謝意を  
 表せずんばあらずる也、往年米國に於て製茶輸入税を課するや、大谷  
 嘉兵衛氏渡米して其廢止運動に力む、君亦是を補翼して偉功あり、是

れ斯界人士の最も賞讃する所たらずんばあらず、抑も君は明治二十二  
 年第一高等中學校を半途にして退學し、直ちに苦學の目的を以て米國  
 に渡航し「エトリアンチック、カレージ」に入り次で「ミシガン」大學に轉  
 じ造詣頗る深く夙に出藍の稱ありき、當時君は日本貿易の前途を遂観  
 し、緑茶の販路に多大の研究を重ねつゝありしが偶々市俄古博覽會開  
 設の舉あり、日本茶業組合は同所に喫茶店を設置せんとし、君に囑す  
 るに其調査を以てす、是に於て乎君畢世の力を揮て其衝に當り、遺憾  
 なく其目的を遂行し、日本緑茶の聲價をして一層増大せしめたるは識  
 者の感佩して措かざる所なりし、後獨力を以て「ニューヨーク」市に古谷  
 商會を創立し嶄新奇抜の意匠を以て日本茶の優良なるを米國全土に紹  
 介し、販路の擴張聲價の向上に熱注せられ多大の信用を博すると同時  
 に一面其生産地たる静岡縣に店舗を設け、清水港を通じて輸出に従事  
 し、今や有数の製茶貿易業者を以て稱せらるゝに至れり、  
 君至誠熱實を以て始終一貫し、能く粗製濫造の弊を矯正し、製品の統  
 一を計り、米國人士の信頼を得て商況日に殷盛を加へ、家運洋々とし



て隆昌を極むるに至れり、(荏原郡品川町北品川三一六、電話芝一四三六)

二六二

東京帝國大學工科大学長

正四位 渡邊 渡君

學殖豊富にして經驗亦是に伴ひ帝國工業界の啓發者として社會の推敬甚だ淺からず、赤門の重鎮として功勳偉大なる渡邊渡君抑も如何の經歷を有するか請ふ其概要を述べん、

君は肥前國長崎の出身にして安政四年七月を以て生る、幼にして明敏頗る大人の風あり嬉戲常に群童と異り奇警能く師父を驚かせり、明治四年大學南校に入りて英學を研修し、第一大學區一番中學貸費生に列し東京大學理學部に入る、同十二年二月探礦冶金科を卒業して理學士の學位を領せり、尋で理學部准教授となり育英事業に執筆すること數年、同十五年鑛山學專修の爲め獨逸國「フライベルグ」に留まり研鑽を重ねること三年、更に同所の大學に於て探礦學を修め同十八年同大學探礦學教授「クライシヤル」氏と共に英國の諸鑛山を視察し、米國を経て歸

朝せり、爾來東京大學御用掛となり尋で工科大学教授を兼ね御料局佐渡支廳長、御料局理事等を歴任し二十五年工學博士の學位を領せり、二十九年工科大学教授專任となり翌三十年農商務省鑛山局長を兼任せり、三十二年御用に依り歐米に差遣せられ精細の調査を遂げて歸朝し正五位勳四等に敘せらる、三十五年鑛毒調査委員となり職責を全ふして、令名あり、先是東京帝國大學工科大学長に推され今尙其職に在て後進扶掖に盡瘁しつゝあり、君の如きは工業界の先覺者恩人として推敬するに値ひするもの誰か亦其徳を頌せざるものあらんや、累進して正四位勳二等の榮位に至り、名聲噴々として内外に喧傳せらるゝに至れり、(本郷區千駄木林町三四、電話下谷一三六四)

興業銀行理事 井上辰九郎君

經濟學の泰斗として著書頗る多く後進の好伴侶として歡迎せられ名聲噴々たる井上辰九郎君夙に其學識と經驗とを提げて興業銀行の理事として畫策を施す、同行の發展擴張を來たしたるもの豈偶然ならんや、

二六三



總裁添田氏曾て君の俊才を認め三顧の後招聘したるもの君の發奮以て其知己に酬んとする眞に天下の美譚たらすんばあらず、抑も君は井上清相氏の令男にして明治元年を以て生る、父君清相氏は文武双兼の名士なり、其沼津兵學校にあるや天下の俊秀を指導して能く大名を成さしむ、矢吹中將田口卯吉島田三郎の諸氏皆其薫陶を受けしことありと傳ふ、君は幼にして聰慧學を好み文を能くす、學績優良にして小學時代より穎才の賞譽あり、明治二十三年帝國大學法科を卒業し更に大學院に入りて經濟學を専攻し其蘊奥を極めて鋭脱の稱あり、各學校に講師として經濟學を擔任し著書又甚だ多し、三十年九月日本銀行に入り検査役及名古屋支店長を勤務し功績大に擧れり、偶々興業銀行の設立を見るあり、總裁添田壽一氏の推擧により入て理事となり、爾來例に因て敏腕を揮ひ同行の業務をして現今の隆盛を見るに至らしめぬ、明治四十一年法學博士の學位を授けらる、爾來學術手腕共に群に絶せるを以て斯界の崇敬する所となれり、君は又多技多能の英才にして諸藝に通じ、謠、狂言、芝居、角力、假色、碁、將棋、書畫、骨董、一と

して其堂奥を極めざるはなし、而て皆嗜好高尚にして鑑識會で誤らず眞に敬服の外なきなり、又屢々海外に漫遊して研學に努め實業上の經驗甚だ豊富なり、帝國財界の俊傑として推稱せらるゝもの亦宜なりと謂ふ可し、(小石川區關口水道町三 電話番町一三一三)

### 實業家 關口安五郎君

温厚着實の風貌自然に發露し泰然自若たる態度は眞に長者の概あり、而て任俠義氣の旺盛なるは社會の定評あり、深川銀行の重役として一意其發展に盡瘁し、預金の多大積立の巨額執れも皆正確を保し、揚々として隆昌を極む君の手腕の非凡なる誰か亦是を否定せん、君は東京の人萬延元年一月を以て生る、幼にして伶俐嚴格なる先考の訓陶を受けて人格修養に努め早くも實業に志して其大要に通ず、同輩の多くは月に戯れ花に浮かるゝの時節操履として其誘惑を排除し具さに商道の秘奥を極む、家業は和船用の櫓製造を營み其誠實熱心良く需用者の要求に適應し殆んど近海船舶の過半に供給するのみならず汎く全國一般



に普及せり、明治三十三年一月同志伊藤與三次郎中村清蔵の諸氏と謀つて株式會社深川銀行を創立し、其大株主且取締役として同行の經營に任じ、幾多經濟社界の變調に處して緩急時宜に適し遂に現今の基礎を築造せり、今や同行の元勳柱礎として斯界に推重を受けつゝあり、家庭は洋々として和氣堂に滿ち最も圓滿の稱あり、德望隆々として社會の美望を受く寔に得易からざる好紳士也、(深川區熊井町十六番地 電話浪花四二六〇)

實業家 岡 塾 留 吉君

資性温厚篤實にして業務に精勵し一意専心店運の發展に努力す、宜なる哉榮泉堂岡塾の名聲頓に揚りて斯界の一流たるに至るや、其製造の巧妙にして甘味の豊富意匠の優秀なる何れも上流社會の嗜好に適し、好評を以て歡迎せらるゝに至れり、其販賣高の巨額なるは又當然の結果にして上流華胄社會を始め贈答品中絶好の良品たるを認め盛に需用せらるゝに及べり、君は常に質素の美風を存し製造場又は店頭にて

職工店員等と伍して監督を履行し、原料の配合より顧客の迎接に至る迄一として注意を要せざるはなし、眞に吾人の敬服に堪へざる所寔に後進の模範たるを失はざる者也、其製造品は幾多の博覽會、共進會等に出品して名譽金銀賞牌を受領せるもの少からず、近來尙一層の改良を謀り珍菓の製造に従事せられ最も衛生を重んじ製方を吟味せり、其一大發展を見る可きは疑を入れざるなり、君又仁慈博愛にして公共事業救濟事業等に賛同し陰に陽に義捐せる金品巨額に達し德望隆々たりと傳ふ、今や數十萬の資産を以て最も洋々の内にあり、介閨又温雅にして貞淑の譽れあり、能く内助の功を盡し以て今日に及べり、夫唱婦和す千歳の基礎茲に樹立す豈亦盛なりと謂はざる可けんや、(本郷區本郷三ノ一 電話下谷九〇六)

實業家 磯 本 幸 市君

剛毅果斷意志強健是れ以て君を評すべきか吾人未だ以て盡せりと爲さず、冷酷無情慘忍木強の人となす可き乎全然以て當らざるなり、然ら



は何の辭を以てか評せん。吾人は單に任俠熾盛の四字を以てして其適評たるを感せずんばあらず。其成功の跡を討尋するに歴々として其面影の存するを知る。今其概歴を草せん。聞く君は模範村として有名な廣島縣賀茂郡廣村の出身にして、明治六年を以て生る。夙に大阪高等商業學校に學び優等を以て卒業し、暫く海運貿易等の業務に従事せしが、鬱勃たる青春の意氣を以て決然立て亞米利加合衆國に渡航し、彼の「テキサス」州に至り白面の一書生を以て同地の開發を企畫し、日本の米作等に就て各地を遊説せり。其説や眞撃確的にして大に同地人士の歡迎を受け新聞雜誌等は筆を揃へて遠來青年珍客の爲めに抱負の遠大と功績の多大とを稱揚し、一時操觚界の好話柄たり斯の如きは我同胞中會て比類を見ざる所なり。現今日本の勞働地として幾多の成功者を有する同地の開發は君の努力の恩賜と稱するも敢て過當の言辭にあらざる也。次で又同地南太平洋鐵道會社の日本人に對する總代理人となりて奮勵したる偉績は識者の感佩する所なり。後ち南米智利の有利なるに着眼し同地に雜貨店を開きて利する所ありしが更に大なる計劃を

企て、四十一年九月同國「ヴァルパライソ」を發し英國を經て歸朝せり。此前君大日本水産會社の大株主たりしが倫敦に於て同社の破綻を耳にし歸來數多株主の信頼に因て監査役となり、斷乎たる決裁を執り以て日本實業界に新記録を作れり。終始一貫する主義の下に確信を遂行して猛烈なる邁進を爲したるは寔に敬服の外なきなり。君の名聲はよりに大に發揚せられ果斷勇決の傑士實業界の俊雄として社會の歡迎を受け徳望日に殷盛を加ふるに至れる也。(府下豊多摩郡澁谷町中澁谷三八〇電話芝二八三六)

シンガー裁縫機械  
會社日本中央店

秦

敏

之君

理想的外國商館員として君が多年の努力は、吾人亦敬服の外なきなり。君は明治三十二年帝國大學文科大學史學科を卒業するや、農商務省商品陳列館囑托員となり在勤一年にして同省實業練習生となり、米國紐約に留學し、着米六ヶ月にして日本雜貨の小賣店を開き更に卸店たらしめんとして支障に遭ふ、偶々時の總領事内田定植氏の紹介により翻



譯者として同市の「シンガー」裁縫機械會社に入る。刻苦精勵半歳ならずして同社日本部の事務一切を擔任するに至れり。明治三十六年九月、同社日本支店の總支配人「タウエル」氏に代りて「トービン」氏の總支配人となるや、君拔擢せられて秘書役となり練習生繼續を辭して母國に歸朝す。爾來同社日本支店を組織せんとし「トービン」氏に獻策して一大釐革を施し多年の情弊を一掃して今日の基礎を確立するに至れり。かくて東京支店副支配人となり、新進の銳氣を揮て同社の一大發展を畫するに至れり。爾後「トービン」氏を助けて庶務に従事し或は月賦販賣法を創設し或は家庭要機の必需を唱へて販路を擴張し、彼の獨逸「ミシン」なるものを驅逐して殆んど獨占事業たるに至れり。三十八年東京支店を横濱支店に屬せしめ更に「ビークン」氏の暹羅轉任後を襲ぎて東京支店支配人となり翌年名古屋支店を合併するに至れり。此間君は「ミシン」裁縫教育を企て夫人の内助を得て「シンガー」裁縫女學院を設立し先づ「ミシン」教育法の模範を示し、次で「シンガー」會社に獻策し、其卒業生を派遣して大坂名古屋神戸横濱京都岡山廣島福岡長崎仙臺札幌京城大連其

他全國樞要の都市に同種の「ミシン」學校を設立せしめ、或は東都勸業博覽會を期して大々的新聞廣告法を採用せしめ、同時に自己設立の女學院卒業生一百名を採用して家庭に對する出張教授の道を開き、或は校内に春秋二期の展覽會を開きて中流以上の婦人に「ミシン」裁縫が如何に興味多くして利益多きやを知らしめ、更に「ミシン」思想を全國に普及せしむるの手段としては全國に多數の講習會を開かしめて大に其効果を擧げ、八年已前には「ミシン」は單に洋服屋の器具なりと思ひ居たる日本の家庭に向て今や「ミシン」の必要品なることを喋々せしむるに至りたるは實に君が「ミシン」裁縫の教育法に其精力を集中したる結果と謂ふ可し四十二年「トービン」氏日本代表者より東洋全體の監督となり「コール」氏代りて代表者となるや「シンガー」會社は其組織を一變して、東京大坂の支店を廢し、横濱の支店のみを残して日本中央店と爲せり。茲に於て事務の首腦は横濱に移り、君は東京支店の支配人を辭すると共に更に「コール」氏を助けて日本朝鮮滿洲全般に渡る營業の監督並に商政の畫策に參與し、且又「ミシン」裁縫の教育に關しては一方に時勢の變遷によりて



従來の教育機關を繼續するの必要なしとの見地より、他方には「シンガ」會社の意のある所をも察し、四十三年七月自己の設立にかゝる東京の模範學校を始めとし、全國の「シンガ」學校を一旦閉鎖し、更に「シンガ」女學院跡に於て全國百數十の分店毎に一名以上十數名宛の教師を配置するの目的を以て教師養成所を開て先づ教師の普及を期し、進で日本全國の家庭に向て一臺宛の「シンガ」を備へしめんといふ會社の理想を以て又君自身の理想となせりといふ、聞く君が自己の設立に係る女學院に於て僅々四年間に於て直接に教育したる生徒の數二千名以上にして、間接に教育を受けたるものは實に數萬を超るといふ蓋し「シンガ」會社今日の隆盛は其根柢實に深しと云ふ可し、而て君に負ふ所亦鮮少なからざるを知る可き也、(麴町區有樂町一ノ五 電話本局 二一九五同三三〇二)

實業家 南 挺 三君

義氣旺盛にして活達の氣概に富み夙に俠名を以て名ある南挺三君は、

山陰但馬の出身にして嘉永五年二月を以て生る、幼にして父を失ひ後ち京都に流寓し神山風陽の門に入りて研學し、廢藩置縣の後出で、京都の人となる、爾來四方の志士と交はり後神樂知常氏等と同學の緣故により横濱に至りて税關吏員となり、更に愛媛縣又は内務省に奉職せしが明治十四年改進黨の起るや政府の忌諱を受け遂に退官し幾干もなぐ沼間守一の主宰する毎日新聞に入りて其記者となり、傍ら河野敏謙、牟田口元學、中野武營氏等と修進社に入り訴訟鑑定の業を營めり、同十九年再び官吏生活に入り石川縣兵庫縣宮城縣等の收稅長となり、轉じて東京及び福岡の鑛山監督署長たりしが同三十一年退官して古河鑛業會社に入り同社足尾鑛業所長となる、爾來誠意を以て同所の發展に努力し快刀亂麻の手腕は良く斯界の弊風を刷新せり、前年社會主義者の煽動により彼の足尾暴動を惹起するや挺身之れが鎮撫に勉め不幸暴徒の要撃に遭ふて重傷を負ふに至る、而も奮勵能く其機を制し速かに平定を計りしは世の賞賛する所たり、尋で職を辭せりと雖も當時君が企畫せし前途の大計は後繼者に因て着々實現せられたり、爾來君は鑛山



業に従事し多大の効果を奏して名聲籍甚たるに至れり、(豊多摩郡鎌谷町下澁谷五二七 電話芝五九二)

二七四

刀圭家 平田 道見君

明敏活達の資を以て勇往邁進し幾多の支障を排して意志の徹底を謀り同胞救済の爲めには敢て水火を辭せず、斯の如きは寔に現代の精華にして大和民族の眞髓たるもの也、醫は仁術也、人の生命を救ひ病苦を癒するが故に然かく名けたる也、君は斯界の蘊奥に通ずるのみならず能く國家の惡弊を矯め同胞の困憊を救護せり、是實に稀世の名醫たるもの也、經世憂國の情に富み會ては朝鮮に臨んで軍時衛生の必要を説き其抱負を披瀝して野戰衛生長官に獻策せるの功勳あり、更に醫業を開て彼國未開の生靈を救へるもの年餘、内地に在ては縣會議員の班に列して縣政の改善に力め教育産業土木衛生等企畫を施し、又大日本赤十字社郡醫會立洋醫會等の爲めに貢獻せしもの甚だ少からず、其他帝國の爲めに多大の苦衷を重ねつゝあるは識者の常に感嘆して措かざる

所なり、其終始一貫の努力は單に自家自衛の爲めにあらざる也、其佚名を専らにし徳望の旺盛なるは寔に所以ありと謂ふ可し、抑も君は福岡縣宗像郡池野村の人嘉永六年八月を以て生る、幼より慧敏の稱譽あり、夙に和漢洋の學を修め早くも醫學の研鑽に耽り明治七年東都に出で、神奈川縣立病院又は名門大家に親炙して益辛雪苦の功を積むこと數年、其蘊奥を極めて歸郷し専ら内外科の診療に従事し、多年鍊熟の妙技を揮て濟生に努め名聲頓に揚りて家運隆昌を極む、當時既に鷄群の一鶴を以て稱せらる、明治二十七八年日清戰役に當ては卒先朝鮮に渡航し羅州兵站部より中和兵站部に至る各兵站部に就き駐屯兵數百名に施療して功あり、遂に同國に於て開業し一般患者の治療に従ふもの年餘にして歸郷せり、爾來公共事業に貢獻し縣會議員たるもの數次、郡醫赤十字社正社員福岡立洋醫會々員として盡瘁し名聲籍甚たるに至れり、吾人が斯界の模範的人材として推すもの豈偶然ならんや、(福岡縣宗像郡池野村)

二七五



貴族院議員 北垣國道君

報國盡忠の赤誠は遂に維新の鴻業を輔翼し奉り、積弊を改善して生民塗炭の苦を救ひ、水利土木を完成して産業の振興を計り、交通機關を完備して商業の發展を策す、七十有餘年來の奮闘は一に國家の公益に係れり、朝遇殊に厚くして男爵の榮を擔ふ、名聲赫灼として萬世を照らすもの蓋し君の謂ならん歟、抑も君は但馬國養父郡能座村の豪族北垣三郎右衛門氏の長男にして天保七年八月を以て生る、君名を晋太郎と稱し剛毅果斷を以て鳴る、維新前勤王の志士平野國臣と謀り兵を生野に擧げて敗れ漸く身を以て免かる、爾來同志と奔走して維新の大業を遂げ名聲噴々たり、明治二年彈正臺に出仕して小巡察に任せられ次で鳥取縣開拓使に轉勤して開拓使五等出仕に進みしも、偶々意見の合はざるものありて一旦勇退せしも大久保利通公の勸告を容れて再び官に仕へ、熊本縣大書記官となり次で内務省書記官に進み更に高知縣令に轉せり、同縣は最も難治と稱せられしも君赴任以來の屬精は能く地

方の弊風を矯正し治績大に揚れり、明治十四年一月京都府知事に榮轉し彼の有名なる琵琶湖疏水工事を遂行して雷名を内外に轟かせり、由來同工事は或る一派の反對劇甚にして多大の支障を生せんとし、加ふるに新進の技師すら其成功を難するありて大に世論囂々たりしも、君期する所あり斷々乎として邁進し、竟に此の空前の大工事を完成せり天下噴々として其功勳を稱し官民有志舉て君の銅像を造り長へに偉徳を頌せんと企畫せり、後北海道長官となり不毛の開拓産業の發展に努め交通機關の完備を圖り先づ全道を一貫せる長程一千三十哩の鐵道を布設し、次で水陸運搬の連絡を謀り港灣治水等に全力を瀝ぎ北海道幾百萬の民をして永く其德澤に浴せしめたり、次で拓殖次官に進み貴族院議員に勅選せられて男爵を授けらる、三十七八年日露戰役の殊功により勳一等瑞寶章を授與せられ掛冠の後は北海道鐵道株式會社社長となり、全幅の精力を揮て企策する所あり大に其面目を放ちしも鐵道國有の議案成立して其買收する所となり國家の經營に歸するに及び最も圓滿の好果を以て同社を解散せり、爾來閑地に就て靜養を謀り健康舊



に倍して饒饒たり、今や貴族院の一角に多大の勢力を占め國是に就て大に企策せられつゝあり、(京都市上京區土手町)

貴族院議員 道源 權治君

山口縣下の富豪道源權治君其温健なる言説を以て上院の一角に雄飛せらる、濠々として盡きざるの説述は聽者をして常に首肯感服の外なからしむ、日比谷原頭の異彩として社會の推重を受くるもの亦故ありと謂ふ可し、抑も君は山口縣都濃郡富田村の人にして明治二年一月十六日を以て生る、實は岩崎惣輔氏の二男にして同二十六年十二月道源岩太郎氏の養嗣子となり以て其姓を冠せる也、君家は累世縣下の富豪を以て鳴り縣下比類なき名門家也、君幼にして穎悟敏活博覽強記の譽れあり和漢の諸書を涉獵して其蘊奥を極む、時人稱して神童と呼べり、常に心を公共事業に瀝ぎ縣下産業の振興を企策して大に効を揚げ夙に同縣産業委員として努力せり、教育土木衛生等縣下の事業は一として君の干與を俟たざるはなく其勢力眞に偉大なるものあり、君又數十萬

圓の巨財を擁して銀行業者の重鎮と謳はれ、縣下經濟界の樞機を執りて貢獻する所尠からず、資性温厚篤實にして恭謙を以て人に下る、社交上の巧妙は眞に嘆服に値ひするものあり、一度び其擊咳に接すれば常に敬慕の念を絶たずと云へり、衆望の歸する所往年同縣多額納稅者間の互選に因て貴族院議員に勅任せられ、四十四年改選の期に當て再選せられ上院の錚々を以て聞ゆ、由來光焰萬丈の氣概を揮はすと雖も着實にして力あるの言説は多く議會に容るゝ所となり、常に政界の權威者として重器せらる、洵に當代縉紳の好典型たるを失はざるもの也、(山口縣徳山町東濱崎、電話特長五〇 赤坂區榎坂町五、電話芝四七二)

貴族院議員 土居 通博君

温厚篤實にして而も明敏活達の稱あり夙に山陽の一角に雄を鳴らし、名望家、慈善家、篤行家として天下の仰望淺からず、常に國運の進歩發達を謀り縣下産業の増進を盡す、公共心の旺盛なるは社會の既に定評ある所名聲の隆々たるもの豈偶然ならんや、



君は岡山縣の人、苦田郡田邑村の豪農にして岡山縣多額納稅者の一人に列し、明治三十九年同縣豪農野崎武吉郎氏の補缺選舉に當選し、貴族院議員に勅任せられたる名士也。

君初め岡山中學校に學び、尋で帝都に出で明治法律學校に入り、切瑳琢磨の功を積み優良の學績を以て卒業し、二十三年歸省して家務に當り、父君の逝去あるや、家督を相續して發展の道を講じ、大に縣下の輿望を招致せり。由來君は博愛慈善の志深く、地方公共事務に盡瘁し、縣下産業の隆興を謀りて効を奏せり。津山稅務署管内所得稅調查委員、同相續稅審查委員、帝國海軍協會特別會員、岡山縣武學生養成會評議員、日本赤十字社、佩有功章特別社員、忠勇顯彰會評議員等に擧げられ、又明治四十四年明治大學法學士の稱號を授けらる。實業方面に關しては、合名會社土居銀行を私邸に設け、支店を津山町に置き、頭取として聲望あり。其他株式會社、津山銀行、同津山貯蓄銀行、津山製糸合資會社、中國鐵道株式會社の各取締役に推さる。明治三十九年補缺選舉に當選し、更に本年の改選に當り、大多數の得點を以て貴族院議員に再撰せられたり。政治上

の位置としては、土曜會に屬して、噴々の賞譽あり。今や國家の大計に賛して企策する所少からず。吾人は切に其の理想の實現せらるゝの目を期待せずんばならず。當代亦得易からざる俊材と謂はざる可けんや。  
(岡山縣苦田郡田邑村)

三井合名會社  
參事

朝吹 英 二君

三井家の元老柱礎として實業社會に超然たる朝吹英二君は大分縣の出身にして、嘉永二年二月を以て生る。夙に慶應義塾に入りて、福澤先生に私淑し、學業大に進めり。卒業後暫く義塾の出版部に在りて、敏腕を揮ひしが、遂に機を得て實業界に打て出で、閃電端腕す可からざるの快腕と稱せり。注溢せる元氣とを以て邁往敢行して、屢々奇利を占む。一旦三菱に入りしも後辭して、横濱に生糸直輸出業を營み、或る支障に因て、竟に失敗に歸せり。豪邁の資焉ぞ此の一小蹉跌に因て、屈撓する者ならんや。再起して其負債を悉く消却し、尙大に餘裕を生ずるに至りぬ。偶々中上川彦次郎氏の爲めに知られて、三井家に入り、三井吳服店の理事となる。爾來縱



横の教腕を以て業務の發展を計りて偉功を奏せり、殊に三井家の外交家として最も大手腕を揮ひ主家に貢獻する所多大なるものあり、後鐘ヶ淵紡績、九州紡績、王子製紙、品川毛織、芝浦製作所等の重役として多年熱血を灑で其任を完ふせり、今や三井物産の取締役三井銀行の監査役三井合名會社の參事として例に因て妙案奇策を立て信認甚だ厚きを致せり、君天資清廉にして最も皓潔也、彼の怪傑石田三成の孤忠を憐み、後世史家に因て事實を誤まられたるを慨し劇務の餘暇を以て時間と私財とを抛ち「稿本石田三成」を著はして天下の同志に頒布したるが如き最も感佩に堪へざる所也、又仁慈博愛にして究乏を憐み三井慈善病院建設に努め其實行を見るに至れるが如き一大美舉と云はざる可けんや、君又古書畫骨董に眼識を有し斯道の大家として推さる、又俳歌に長じ其堂奥を極め萩本アニマル朝臣の雅號を以て屢々同志を驚かせり、世嗣常吉君又活達にして明敏也、今や財界出色の人才として推さる君家の基礎茲に確立するを得て龜鶴并舞の瑞を示すと謂ふ可きにあらずや、(京橋區木挽町九ノ三三、電話新橋二一一)

臺灣實業界の俊傑 辜 顯 榮 君

臺灣實業界の巨擘辜顯榮君は慶應二年鹿港に於て産聲を揚ぐ、夙に清國福州上海間を往復して商業に従事せり、日清戰役を経て臺灣島の我領有に歸するや大義名分のある所を察し諄々として土民を説き我が朝化に浴せしむ、明治二十八年五月日本軍の入臺に因り臺灣鎮撫唐景崧の亡命するや基隆臺北打狗等の要地は惡漢無賴の徒横行して慘狀云ふ可からざるものあり、君挺身總督樺山將軍を基隆に迎へ臺北城に入營せしめ總督に説くに目下の状態を以てし保良局新設の急務なるを説述せり、其言察るゝ所となり君は保良局長に任せられ専ら靜謐を謀れり土民君の徳を頌し辜大人と敬稱して名を謂はず以て其功勳の大なるを知る可し、征討總督北白川宮殿下が川村大將阪井中將を隨へ來征せらるゝや君其隨行を命せられ臺南地方に至り亦鎮定の功を奏せり、君同地に滯留するの際水野民政長官より招喚せられて同氏と共に東京に至れり、君是等の勳功に因り勳六等に敘せられ軍光旭日章を授けらる、



是れ實に明治二十八年十二月にして臺灣人の我勳章を領するの嚆矢なり、而て臺灣人の日本内地に於て斷髮し洋服を着用するの初めなりと傳ふ、同二十九年一月一日君東京に在て土匪蜂起して臺北城を圍むと聞き千々岩警保課長と急行して土匪征討に盡瘁せり、同三十一年五月臺灣人民國籍を定む、土匪再び來襲せしも我兵是を擊退せり、當時君は臺灣總督の命に因り臺北に保甲局を設け其總局長に擧げられ五百挺の鐵砲と五百振の劍と彈藥五萬發とを借り受け防禦自衛の功を奏せり君三十一年保良局長を辭し同三十二年九月保甲局總局長を辭せり、其前二十九年頃より大和商行を創設し汽船數艘を購入して臺灣沿岸の航海業を營み、また總督府の鹽專賣を爲すに當り臺北に鹽專賣元賣捌所を設け是を鹽務總館と名け、各地に支館を置き君總辦となりて百般の業務を總括せり、其他商工公司を起し臺灣土木事業の請負を爲し同三十三年の交自家自營を以て鹽田を拓き二百有餘町歩の成功を見るに至れり、又開墾に従事して三千餘町歩の良圃を作れり、同三十八年鹽務總館を解散して同事業を君に托せらるゝに及び茲に一大發展を爲す

に至れり、尋で砂糖製造業を創め、製造場六個を有して百五十噸の機械力を利用し毎年八萬俵内外の製出を爲せり、又煙草販賣をも營み收益少からず、尙臺北大稻埕に大和公司を開始し實業上の基礎を確立せり、日露戰役に當ては卒先して帝國募債に應じ又ジャック船一千艘を一晝夜に集めて我海軍に供し、臺灣米を買収して我軍の糧食に充つる等の功績尠からず、平和克復の後其功に因り勳五等に叙し旭日雙光章を授けらる、洵に帝國新領土中其比を見ざる忠勇義烈の傑士と稱すべしにあらすや、

### 實業家 喜多 長左衛門君

國家的眼光を以て社會の福祉を増進せんとせば須らく自家の利益を犠牲に供するの覺悟なかる可からず、此の抱負あり此の覺悟あり以て其大成を遂ぐることを得ん歟、喜多長左衛門君夙に熱實至誠を以て國家産業の發達に資する所あらんとす、爾來各國各地の狀態を調査考覈し果樹葡萄苗等の培養を計り、最廉の價格を以て東洋全般の需用に供給



せんとし二十有餘町歩の開墾地を利用し盛に其培養に努め殆んど收支の如何を顧みず、あらゆる方法を講じ經驗を重ねること茲に四十年、華々として進歩改良を謀り最も完全の域に達せり、由來君家は精農主義の系統に屬し、先代長七郎氏植林を計り開墾に努め孜々營々として蕪蕪地及山林を開拓す其功績比類なきを以て官録して明治二十四年勅定の綠綬褒章を賜はる、洵に光榮の極と謂ふ可し、君は其介男にして祖業を守りて發展擴張を謀る、父子二世の鴻業茲に全きを得たりと稱す可し、彼の有名なる葛城園は即ち君の經營せる所にして明治三年の創設に係るもの也、菜果、桃梨巴且杏葡萄等の苗木を専業とす、二十有餘町歩の苗圃を以て供給を謀る、其盛大なる營業振は眞に驚嘆の外なき也、家運の隆昌を極むるもの寔に所以ありと謂ふ可し、(奈良縣宇智郡太阿木村岡田峯)

實業家 宮川健太郎君

肥後國興農園の設備が如何に完全の域に達せられつゝあるかは、社會の

定評ある所今更吾人の蛇足を加ふるを要せず、園主宮川健太郎君が鋭鋒犀利の手腕を揮て計畫を施せしもの一點の間然なきは當然のみ、君園と樟植林を以て業とす、農産種子果樹の苗木は寧ろ其副業たるもの也、其遠大の志操百年の大計既に確立するあり、世の所謂小才子輩の決して企及すべき所にあらざる也、其確實なる信念に因て邁進す一として可ならざるものなし、其家運の熾盛徳望の隆々固より其の所也、君前途を達觀し時運の推移に着眼して時計、鐘、指輪及肥後蠶網等の販賣をも兼ね、眞に業務多端と謂ふ可き也、然も一貫せる熱烈の精力は多々益々辨するの概なくんばあらず、現今の大成は洵に後進の指針たるものなくんばあらず、模範的人材として推奨するもの豈偶然ならんや、(熊本市安巳橋通り九品寺九八六電報略號(と))

實業家 大隈榮一君

堅忍不拔の精力主義を以て幾多の支障を排除し千試萬驗を経て遂に完全なる麵類製造の精機を發明し、明治二十九年專賣特許を領せり、此



の間の苦辛は決して一朝一夕の談にあらざりし也。屢々寢食を廢し思慮を凝らし工夫を積むこと眞に心身の勢に堪へざるものあり、而も不屈不撓の精神を鼓舞し遂に此の好果を得るに至れり、爾來又大に改善を加へ今や一點の間然なきを得て需用の多大を見るに至れり、抑も此の麵機たるや輕便にして迅速に製造し得るを以て經費を要すること鮮少にして生産の多額なるは吾人の言を俟たず、其外装の高尙優美なるを以て店頭に掲置くも一の裝飾品たるを失はず、是れ君が最も綿密の思慮を要したる所也、此の麵機の發明以來新界に一新を劃したるは事實の證明する所にして今更贅言を加ふるを要せず、此の發明者たる大隈榮一君の功勞は決して鮮少にあらざる也、大隈麵機商會が現今の發展を見る專ら當然の報償たらずんばあらず、利用厚生の念に富める君の専ら實業上に注意を拂はれつゝある苦心は最も吾人の敬服に堪へざる所也、(名古屋市東區富士塚町三ノ一二、電話長四五七)

實業家 田村利親君

凡そ偉大の功を擧げ社會に多大の利益を興ふるものは必ずや非凡の眼識と超群の智略とを具備せざるはなし、其見る所其施す所既に人と異なる是れ大功を奏する所以たらずんばあらず、君早くも前途を洞觀し兼西文明國の方法に倣ひ柑橘の改良を謀れり、夙に米國種の最良にして内地の地味に適應す可きを察し數回輸入を企て實驗するに果して優良の結果を得たり、茲に於て尙各地に分配して試植せるに高評嘖々として喧傳せられ陸績として其供給を迫まるに至り、爾來家運洋々として揚り以て現今の大成を見るに至れり、南海園は其園名にして實に明治十六年の創設に係れり、當時は帝國百般の施設未だ完全ならずして實業方面の沈滯言ふに忍びざるものあり、殊に交通機關の不備は進歩發達を阻碍するもの幾干なるを知らず、君斯の如き時勢に於て既に海外の事情を探り米國種の柑橘を帝國に移植せんことを企劃す、其凡庸一俗の人才に非ざるは推知するに難からず、今や米國種に加ふるに内國種類の純良なるものを供給し最も殷盛を極めつゝあり、亦現代の俊傑たるに耻ぢざる也、(高知縣長岡郡新改村十番地)



醫學博士 佐藤 三吉君

帝國杏林界の泰斗たる佐藤三吉君は美濃國大垣の藩主戸田侯の舊臣にして安政四年を以て生る。穎敏夙に神童の譽あり、初め藩醫に入て和漢の學を修め藩廳の給事を勤仕せり。明治四年志を立て帝都に出て開成學校に學び又志波了海氏に師事し、後大學南校に入り、益々辛雪苦の功を経て明治十六年を以て卒業し、醫學士の稱號を領せり、而も尙足れりとせず明治十六年際起して醫學の叢淵を以て鳴る獨逸國に渡航し、碩學大家に親炙して外科醫術を専攻し在留四年にして明治二十年歸朝せり、次で大學教授に任せられ大學第二病院外科を擔任し今や東京大學醫科大學教授として名聲噴々たり、往年學士會員に列し嶄新卓説を述て斯界に貢獻する所尠からず、又一面常盤病院外科治療の任に當り老熟の巧技を發揮して社會の信頼を得るや大也、前年鐵道院醫事顧問を囑托せられて一半の努力を割きつゝあり、由來斯界の重鎮を以て稱せらるゝもの吾人亦贅言を要せざる所也、(神田區表猿樂町二五、電話

本局六三〇)

正五位勳二等 藤田 傳三郎君

帝國實業界の碩王財界の偉勳者たる藤田傳三郎君は同姓半右衛門氏の四男にして天保十二年五月を以て長州萩に於て生る。性活達にして宏量夙に勤王の大義を唱道し高杉晋作氏に隨ひ國事に奔走盡瘁し具さに世の辛酸を嘗め以て現今の素因を養成せり、王政維新の大業成る後君は熱々前途を洞觀し飄然刀劍を廢して牙籌を執り實業に因て身を立てんと謀り、大坂の豪商大賀氏の店員となり以て製靴事業に従事せり、明治六年藤田鹿太郎氏姻戚久原庄三郎氏等と謀り藤田組を組織して頭取となり専ら官鹽用達土木鑛山生糸等の事業を營み又靴製造所を創立して外國教師を雇聘し盛に其製造を爲して社會の好評を博せり、西南戰役に當ては社員職工數百人を戰地に特派して軍需を満たし功勳尠からず、明治二十年内外用達會社を創設して從來の土木業を是に引繼げり、其營業の目的とする處は鐵道工事疏水工事鐵橋架設工事墜道開鑿



工事及軍港築造道路橋梁の修築等を主要とし大小洋風の建築事業是に次ぎ最も盛況を極めたり、鑛山事業は偉大の發展を爲し斯界有数の事業たるに至れり、又更に神戸に一商店を創設し専ら生糸貿易を營み以て關西斯業の發達に多大の貢獻を爲せり、而て明治九年堂島米商會所十二年硫曹會社、十四年大湖汽船會社、十七年坂堺鐵道會社、二十年山陽鐵道會社及大坂取引所等を發起創立して重役に推され企策する處大に効を奏せり、今や藤田組社長として大に努力奮闘せられつゝあり君固より國家的思想に富み公益上に貢獻する所甚だ多し、明治三十一年大坂府下水道公債に多大の盡瘁を爲し三十七年日露戰役に當ては率先して軍事公債の募集に應じ毎回非常の功勞を盡し其他獻金若しくは義捐等の美舉枚舉に遑あらず、四十四年恩賜財團濟生會に數十萬圓の義捐を爲せり、是等に關する功勳最も偉大なるものあり、明治三十五年勳四等瑞寶章を授けられ三十九年四月勳二等旭日重光章を授けらる、四十四年八月特旨を以て華族に列し男爵を授けられ今や正五位勳二等男爵たり、其光榮誰か亦羨望せざるものあらんや、(大坂市北區網島町九)

東京病院副院長 高木 喜 寛 君

君は刀圭界の泰斗醫學博士男爵高木兼寛氏の長男にして明治七年十一月を以て芝區高輪に於て生る、夙に學習院に入て普通學を修め、年齒僅かに十六にして英京倫敦に航し「キングス」中學に入て語學を學び在學二年にして「セントトーマス」醫科大學に入學し居ると五年にして學績優良を以て卒業せり、時に年二十三歳也更に實地の研究を計り「セントトーマス」病院外科助手となり研究二年を経て斯界の蘊奥を極む、茲に於て英國を去り獨逸國伯林に移り居ること一歳只管比較研鑽に努め短日月の間に同國醫學の狀態より専門的種々の研究を了り、更に米國に渡航し見學を爲すこと二ヶ月にして明治三十五年七月を以て錦衣歸朝せらる、直ちに東京病院副院長となり次で東京慈惠會醫院、醫學專門學校教授、東京慈惠會醫院外科主任として名聲あり、學識深遠なるを經驗豊富なるを杏林界に未だ其比を見ざる所也、其仁慈博愛に富めるは父君の衣鉢を受けて更に出色あるを見る、徳望の隆々たる眞に感歎



に堪へざる也、(京橋區西紺屋町一〇 電話京橋二一六) 二九四

日勝亭主人 遠藤芳之助君

本邦玉突界の巨擘日勝亭主人遠藤芳之助君の經歷は抑揚曲折ありて其詳細を叙すれば優に一巻の大冊を爲す可しと雖も今は單に其概傳に止めんとす、君は神奈川縣足柄下郡高田村原治郎左衛門氏の長男にして安政元年十一月八日を以て生る、父君は郷土十一ヶ村の取締役を勤め二宮翁の高弟也、君故あつて遠藤姓を冠せり、年十一にして小田原町清水彦十郎氏に就て研學し後難波商藤澤氏の店員となり更に横濱に出で米穀取引所に苦心するもの十年、次で東京に轉じて宮内省大膳部の雇員となり、後獨逸人「オスカール・イクツ」を頼りて獨逸に渡航し一大劃策する所ありしも或る事情の爲めに途中歸朝の已むなきに至り、後京橋區木挽町に旅館向陽館を經營せり、明治二十八年樺太に於て漁業を試みて巨利を博せり、明治三十一年旅館を廢し日吉町に移轉して玉突場を開設し日勝亭と號せり、爾來の奮闘効を奏して帝國第一流の玉突

場たるに至れり、往年芝區芝岩下町に二個の工場を設置し玉突臺玉突棒等一切の製造を爲し斯界の高評を博せり、又一面夫人をして京橋區竹川町十二番地に理容館と稱する衛生美術施設所を經營せしむ、創業以來既に六星霜を重ね、技術大に進捗して最も盛況を極めたり、理容白粉、理容水、純良ぬか等の發賣を爲して好評噴々たり、君抱負遠大にして尙幾多劃策する所あり、大成の期遠からざるを知る可し、(京橋區南金六町一五 電話新橋二三〇二)

大坂株式取引所 仲買人 數田忠次郎君

大坂の地たるや由來帝國樞要の地位を占む、近年我領土の擴大と共に一大發展を見るに至れり、殊に財界の實力に至ては最も強勢にして全國都市の企及す可き所にあらず、宜なる哉株式界の猛威能く全勝を逞ふし、兩三年以來東都の株式界に於て能く偉功を擧げて凱歌を奏せり、帝國株式界の全盛が大坂に歸したるは事實の證明する所也、然れば茲に最も緊要を感ず可きは同所仲買店が如何に正確を保せらるやの一事



なり、吾人が現今隆盛を極め人格商風共に超群にして熱心確實なる商店を擧ぐるもの豈徒爾ならんや、六三商店主藪田忠次郎君夙に熱實至誠を以て斯界に鳴る、其顧客に對する最も懇切を極め取引敏活にして聊か遅緩澁滞の憾なきは社會の公評也、全國無數の委囑は日々其商店より顯出せられて最も人目を引く、然も多年の老腕は能く機微を捉へて神速の効果を擧ぐ、斯界第一流の商店たるは吾人の喋々を須たずして社會の齊しく認識する處也、(大坂市東區北濱町二丁目 電話長本局一七五〇、一七五一、一七五二、一七五三、一七五四、一七五五 登錄電報「サカヤブタ」)

醫師 河村 淳君

身を軍籍に投じ國家の干城となり帝國の武威を宣揚する男子の面目眞に偉大なりと謂ふ可し、然れども世の不幸を救ひ難治を療し仁術を揮ふ其功勳たるや決して武勳に遜色あるを認めず、君始め軍人たらんと欲せしも父母の諾せざるに因て遂に醫界に身を投じたるは固より此の

見地より斷行したるや論なき也、君は文久三年を以て備後國比婆郡入幡村に生る、明治十七年二月廣島甲種醫學學校豫備科に入りて醫術を研修せり、恰も第四學年の課程に當り學制の變革に遭遇し京都醫學學校に編入せられ明治二十二年を以て全科を修了せり、直ちに醫術開業試験に應じて及第し以て醫籍の登録を経たり、錦衣歸郷して東城醫院に居ること數月にして備後三次町公立病院に招聘せられ職に在ること數月又東城町有志者の要聘する所となり、爾來同地に開業して一般診療に従事し多年の蘊蓄を披瀝して最も好評を博し日に殷盛を極めり、其胸邊燦爛たる勳章の輝きを見ずと雖も縣下多大の信望を繋ぎ濟生救民の實を盡せる高德の天爵は自から君の頭上に異彩を放てるを見ん、後進の士以て鑑とする處ある可き也、(廣島縣比婆郡東城町)

醫師 大塚 敬 齊君

二百有餘年來の名門家として社會の崇敬決して淺きにあらざる也、其携さばる所亦社會の推敬する仁術たるに於てをや、吾人が其高德を頌



し高風を慕ふもの豈故なからんや、家祖大塚源八郎氏萬治元年を以て初めて三池町に移住し多大の富を擁して名聲あり、二代自悦氏幼にして醫術を好み専心斯道を研鑽し同町に開業せり、爾來累世醫を以て業と爲し君に至る實に八世を経たり、君は先代敬節氏の男にして弘化二年八月を以て生る、明治四年家督を相續し祖業に従ひ醫術を開業せり、明治十七年四月内務省より醫術開業免状を下附せらる、君傳來の秘法に因り多年の實況に基き獨特の神術を以て治療上の大手腕を揮へり、遠近相傳へて治を乞ふもの門前踵を接せり、真に累代の面目を發揮せるもの誰か其徳を頌せざるものあらんや、(福岡縣三池郡三池町大字三池)

醫師 宮川 謙 吉君

福岡縣下杏林界の重鎮たる宮川謙吉君は舊柳河藩士にして文久二年正月を以て生る、幼にして醫學に志し柳河城下の外科専門大醫西原榮氏に従ひて醫術を専攻し明治十五年十一月縣立福岡醫學校に入り、品行

方正學識優良にして同窓の模範的人才を以て稱せらる、二十年五月同校を卒業し傍ら福岡の醫師井上侃齊に就きて實地の研鑽を遂げ同年十月現住所に於て醫業を開始せり、二十一年七月山門三池兩郡の徵兵地方醫員となり、二十三年四月柳河監獄支署醫を拜命し二十八年八月由門郡臨時衛生醫を命ぜられ三十一年四月福岡縣尋常中學傳習館々醫を十月柳河高等小學校々醫兼務を囑托せらる、而て山門醫師組合會幹事福岡支洋醫會本部常議員、私立協同醫會幹事、城內村々醫、山門郡種痘醫等の任に當り大に其敏腕を揮はれ名聲噴々として斯界に冠絶せり、資性温雅閑深にして謙讓の徳を備ふ、常に公共事業の爲めに努力せられ仁慈博愛を以て稱せらる、斯界稀に見る好紳士なりと稱ふ可し、(福岡縣山門郡城內村)

衆議院議員 服 部 綾 雄君

國民黨の樞要人物として最も重器せられつゝある服部綾雄君は靜岡縣沼津の出身にして文久二年十二月を以て生る、早くも築地大學を卒業



して米國に渡航し「ブリンストン」大學に入り倫理學及心理學を研修し斯界の大家に私淑して得る所甚だ大なり。歸朝後富山縣中學校より岡山縣中學に轉じ更に私立金川中學校に招聘せられて校長たるもの數年、青年黨育の効大に揚り錚々の名ありしも、横濱市古屋商店の營業顧問に推撰せられて米國に渡航し「シアトル」に於て一大活躍を爲せり當時排日熱旺盛にして種々の支障あるや君日本人會長として滿腔の熱誠を以て邦人擁護の任を盡し名聲今に噴々たり、歸來神田錦輝館の演説は當時の狀況を語て更に餘蘊なく我同胞をして一大注意を惹起せしめたり明治四十一年第十回總選舉に當り岡山縣郡部より選出せられて衆議院議員となり、國民黨院內幹事として實權を握り同志の推重甚だ大也、彼の淺野セメント會社移轉問題起るに當り深川區民と同會社との間に紛亂を醸すや事態危険に瀕せんとす、君二三有力者と共に兩者の間を斡旋して無事終結を告げしめたるは市民の齊しく感歎せる所也、今や黨勢擴張の爲めに各地を巡遊して到る處に歡迎せられつゝあり、政界の權威者として斯界に一頭地を抜ける俊材也と謂ふ可し、(芝區公園二

## ○號ノ四

## 劇界の偉人 田村成義君

帝國演劇界の大立物たる田村成義君が帝國第一の劇場歌舞伎座に於ける勢力は實に偉大を極む、明治四十四年同座重役の一部が松竹會社の爲めに動かされ總ての權利を舉げて同社に讓渡の契約を締結せりと聞き市民齊しく其意外なるに嘆驚せり、是れ東都人士の腐腸を示せるなり、舊幕時代よりの江戸ツ子氣質を没却せるなりとして全市民の一齊に憤慨せる所也、君固より不在中に屬して是等の消息は眞に夢視せざる所也、一旦此の密約を聞くや倉皇歸京して善後策を講ず、滿都の人士如何で是を傍觀せんや奮て同情の意を寄せて契約破毀に努む、固より是江戸ツ子氣質たるもの也、君是等の後援に因り多大の損害を負擔して同座の權利を回收せり、爾來一大刷新を斷行し劇場の改善を施し美觀亦昔日の比にあらざる也、第一回の興行に巨萬の利益を得て殆んど損害を填補せり、人氣の旺盛なる固より其の所也、君の彼の劇界の



元港たる寺田菊千乘勝五郎氏は優越せる技倆の存するは此の一事に依て明か也。由來同座たもや本邦顯貴の譽を辱ふし四十三年には隣邦の珍寶戰術殿下の臨場を仰ぎ又各國貴賤の遊覽せられたる名譽の劇也。されば本邦劇界の香煙たる猶より餘を俟たず、由來君が同座に在りて全割せるもの三十有餘年其關係決して淺きにあらず也。君が同座と聲衰を共にする亦當然のみ、松竹會社との契約破毀は實に帝都人士の意を了したるもの大に穩宜を得たりと謂はざる可けんや、聞く君は福壽齋士彌井壽仙氏の勇にして嘉永四年二月を以て生る、幼名を鏡之助と稱し小松原省三氏に従て漢籍を修め慶應元年七月田村金太郎氏の養嗣子となり金一郎と改稱し、囚獄番役見習となり、後本職に健あり、更に鐵畫附より囚人前科取調役となり、明治三年辭職して實業を經營する所ありしも同九年東京法律學校に入り卒業して辨護士登用試験に合格せり、次で同十二年より劇界に入て其向上發展に盡瘁し、今や斯界の巨擘を以て稱せらるゝに至れる也。(京橋區築地二ノ二七 電話長京橋四六二)

刀圭家 野田半十郎君

累世刀圭界の巨擘として名聲遠近に振ひ西尾の名門として社會の尊崇を受く、加之醫術の神技を極め屢々手腕を發揮して迅速の効を賜ぐ異に斯界の巨擘たるに背かざる也。君内外科の診療に従事し往々天折を救ひ不具廢疾を治す、名聲頗に揚りて治を乞ふもの門前常に雜亂を極む、爾來尙研鑽を絶たず僕庶質斯、癩病、胃病、接骨等に於ける妙技は實に神に至るものあり、人皆驚嘆せざるはなし、明治十七年開業醫免狀を下附せられ専ら患者の入院を諾せしより宏莊なる十數棟の病室は常に患者を以て充滿せり、君資性仁慈にして充乏を憐み屢々賑恤を施して薄俸者を救護し徳望偉大を極む、洵に稀世の名醫と稱す可きにあらずや、(愛知縣尾張國栗原郡北方村)

帝室林野管理局長官 佐々木 陽太郎君

君は舊長門の藩士佐々木古信氏の長男にして嘉永三年七月五日を以て



生る。父君は近藤芳樹翁の高足にして和漢書道の大家として知らる。君幼より其薰陶に依り發洩たる才氣大に人に勝れたりしが、慶應二年長藩幕府と豈を啓くに當り名士大村益二郎の麾下に屬し劍戟の間に奔馳し、明治元年王師東征の舉あるや直ちに是に参加し各地に轉戦して偉功あり、後長藩佛人「クローゼ」を聘して又新校を設くるや入つて講習生となり、明治五年大志を抱きて東都に出で、勸農寮、租稅寮等に出し傍ら東京專修學校に法律經濟の諸科を修むるもの十二年大藏省中録々の名あり、後野村靖氏の知遇に因て驛遞局に出仕し會計事務を擔任して治績大に舉れり、十六年十二月奏任御用掛となり、翌年驛遞官に進み二十年三月遞信省會計監督官となり、更に主稅官に轉じて中村局長の下に收稅事務の釐革更張の計を策し拔んでられて兵庫縣收稅長に進みたり、在る事數年、明治二十三年同藩の先輩品川子爵御料局長となり、同局主事の適材を求むるに當り君が材幹を認めて特に強要して御料局主事に補せり爾來二十有余年の久しき局務を整理して精勵謹恪大に努めたり、尋で主獵官兼任を命せられて勅任官たるに至り局中

の信望省内の名聲大に加はれり、次で帝室林野管理局長官に榮進し急々英名を博して上下の信頼する所となれり、君人となり温雅篤實、職に忠實事に綿密清廉潔白にして自ら人をして悦服せしむ真に能吏の模範たるに耻ぢざる也、(小石川區竹早町六五 電話番町四五三)

### 炭 鑛 王 安 川 敬 一 郎 君

炭鑛界の後傑未曾有の成功者九州財界の大立物たる安川敬一郎君は福岡縣の出身にして黒田家の舊藩士徳永定七君の第四男なり弱冠にして出て安川家を嗣ぎ以て其姓を冒せり、幼にして願悟學を好み秀才の聲譽あり、十七歳にして既に經史百家の諸書に精通し舊藩政局に出仕し藩主の撰拔に因り各藩遊學を命せられ始めて静岡藩に至り碩儒望月剛猛先生に就て漢籍を修め勝山岡二先生に私淑して薰陶を受く、一日勝先生誨へて曰く吾子世の大勢に鑑み支那文學に安んぜんより進で歐洲文明の學を講ず可しと、君大に感悟する處あり爾來英語の學修に努め明治五年東京に出で福澤諭吉先生の慶應義塾に入れり、當時松本健島



の兩兄九州に在て炭坑開採に従事せり、君亦實業に志あり、兩兄の勸告に依て京濱の地に石炭の販賣を爲せり而も事志と違ひ遂に失敗に歸せり、然も君は學業の傍ら商業の觀察を怠らず務かに企畫する所あり偶々佐賀の變亂勃發して叔兄藤島氏王事に斃る、君倉皇歸省して中兄と共に炭坑業を見る、時恰も經濟界の不振の際にして業務甚だ困難を極む、明治十年頃鑛山學の教授、モッター氏君に相田炭坑の有望なるを告ぐ是れ君が同坑開採の企畫を爲せる素因なり、而かも當時(明治十八年)政府は海軍豫備炭坑の故を以て筑豊多數の炭坑を封鎖して民間の起業を拘束せり、茲に於て君は自から率先して委員と爲り政府に出頭陳情の結果四坑の外開採を許さる、同十九年兵庫縣神戸港に石炭販賣店を設け海外輸出の事に従ふ、尋で借區を擴張し同二十二年平岡浩太郎氏と共に赤地鑛區の權利を收得し益々業務の進歩に勵めたりしも、二十三年に至り炭價下落の爲め斯界に一大恐慌を來たしたり、君奮闘苦戦して百難を凌ぎ挽回救済の道を講せしを以て二十六年に至り稍や恢復の兆候あり、尋で二十七八年日清事件の勃發に因て俄然炭價の暴騰

を見るに至り漸く從來の缺損を填補するを得、爾來順潮を以て今日の隆盛を招けり、此間十有餘年多少の消長は免かれざれども經營機宜を得て遂に屈指の豪商たるに至れり、茲に於て一は國恩に酬ひ一は學界貢獻の爲め三十九年政府の許可を得て三百三十萬圓の私財を投じて筑前戸畑の地を相し工業專門大學校を設立せらる、是豈尋常一俗の企及すべき所ならんや、又平岡氏の經營せる豊國炭坑罹災後友誼上君其整理の局に當り債權者の重なる三井家理事と協定し、同家よりの負債百二十萬圓及平岡氏其他に對する八十萬圓の義務を双肩に荷ひて同鑛山の經營をなせり、其他教育、衛生、軍事、慈善等公共の爲めに資を給し公私の各方面より名譽を表進せられたるもの實に枚舉に遑あらず、往年大坂に支店を設け若松の輸出港となるや又直ちに門司に支店を設けし以て輸出事業の發展を計り、又平賀博士の設計に基き君と介息との出資を以て三十萬圓の合資會社を組織し織物工場を建設し、筑前戸畑に約七十萬圓の紡績會社を創立し筑豊鐵道株式會社若松築港株式會社九州生命保險株式會社九州鐵道株式會社の取締役會長に推され、若



松貯蓄銀行相談役を囑托せられて九種唯一の大勢力家たるに至れり、明治聖代の成功者として指を君に屈する所以亦茲に存せり、(福岡縣遠賀郡戸畑町 電話一一一)

三井物産會社  
名古屋支店長 岡野 悌二君

吾人曾て三井系の人材百六十名士を擧げて比較論評を加へたることありき、飯田渡邊岩原山本福井の諸氏を始め物産の多士は天下未だ類例なき所也、就中君が二十有餘年來の勤務は如何に其鋒鏘の鋭を示せしか一々列擧し來らば日も亦足らざる也、今や高級幹部の一員として屢々献策する所あり、身は是れ名古屋支店長の重職を帯びて同地に滞在し非凡の才腕を揮て百般の設備を完成し同地支店をして一層の發展を呈せしめぬ、三井系重要な偉材たるは吾人の嗚々を俟たざる所也、抑も君は明治三年九月の生誕にして幼より聰慧出群の聲譽あり、夙に普通學を卒はり大坂商業學校に入り登雪多年の功を積み學績優秀を以て卒業し、明治二十二年始めて三井に入り大坂支店詰となれり、同二

十六年英國倫敦支店詰に轉じて泰西文明國商業の實地研究を爲し、三十年八月印度國「ボンベイ」在勤を命せられ東洋の商權を握り潑瀾の氣概を示せり、三十一年歸朝して本店詰となり後大阪支店に轉じ三十六年八月再び本店に入りて敏腕を發揮し同年十二月名古屋支店長となり、以て現今に及べる也、在留八年間の功績は最も顯著なるものあり、三井支店中重要な地位を占めて嶄然一頭地を拔けり、其精力主義の發揮に努めて奮闘を重ねる所眞に驚嘆の外なき也、君餘力を提げて名古屋織布株式會社の取締役となり専ら其發展を企畫せられつゝありと聞く洵に有數の實業家也と敬稱す可きにあらずや、(名古屋市東區外堀町二ノ三八 電話五三八)

臺灣製腦合名會社  
社長兼擔當社員 小松 楠彌君

樟腦製造販賣業者の錚々として社會に推重せられつゝある小松楠彌君は、舊土佐藩士にして安政六年一月を以て高知城下に孤々の聲を擧げ夙に穎敏活達を以て稱せらる、高知縣知事岩崎氏に知られ同家に寄遇



して研學に努め明治十二年岩崎氏の士族金庫公債を以て銀行を設立せんとするや、君其創立事務に與り、後九龍市の士族と合併して第百二十國立銀行を設立するや君は入て其事務を擔當し後本店を高知に移すに及び君亦隨て居を高知に移せり、君の令兄樟腦製造業に従事して効果の見る可きものあり、君も亦大に是に矚目する所あり、斷然志を決して同銀行を勇退して九州地方を巡遊し同二十年神戸市に移住して専ら樟腦貿易業に従事せり、同二十八年臺灣の我領有に歸するや歐起渡臺して樟腦採取の調査を遂げ、同年中稻埕昌に製腦所を設け各地に支店出張店等を置き尋で大稻埕に製腦所を設け以て多大の利益を收めたり、同三十三年九月圖らず生蕃の襲撃に逢ひ多大の損害を蒙りしも久しからずして是を填補し更に宜蘭地方に製腦所を新設せり、屢々生蕃の慘禍に遭遇するも君更に意とせず、遂に六萬圓の資金を以て合名會社を組織し爾來毎月十五萬斤の生産を爲すに至れり、君近來先聲知己の懇囑に因り新竹製糖株式會社創立委員長北港製糖株式會社發起人總代として其創立事務に執筆して功を奏せり、又往年臺灣實業銀行監査

役、臺灣建勳株式會社取締役、河合合名會社業務擔當社員となり獨特の敏腕を以て業務の進歩を謀れり、家運日に殷盛にして社會の信頼亦偉大を加ふ其成功の迅速なる誰か驚倒せざるものあらんや、(神戸市館内橋通五ノ一〇 臺灣臺北府前街)

實業家 青地 伊一君

帝都第一流の富豪として青地家の名聲は舊幕時代より喧傳せられて其徳望の隆々たるは吾人亦喋々を要せざる所也、仁慈博愛にして公共心に富み幾多の公共事業に關して資を捐し教育土木衛生等に多大の盡瘁を爲す、其社會的志操の旺盛なるは眞に感嘆に堪へざる也、君亦此の名家の一家一門として祖先の餘光を享けて雄大の威望を擔へり、夙に文明の教育に因て畫化され外交的手腕の非凡なるは識者の敬服する所也、今や巨大の資財を抱て大に企畫する所あり、其温厚にして先達の明に富めるは成功的人格を具備せるものと謂はざる可けんや、實業界の老練語て曰く現今最優秀の人士に乏しからずと雖も眞摯熱實の人材は



甚だ稀なり、是れ實業界の振はざる一原因たらずんばならずと、蓋し君の如きは稀世の異材と謂はざる可からず、抑も君は青地伊三郎氏の二男にして明治十六年を以て生れ、早くも高等學府を出で、最も顯明の稱譽あり、今や活劇場裡に入て愈々其銳鋒を發揮せらる、亦現代好個の模範的人材と謂はざる可けんや、(淺草區老松町一五 電話下谷三九九九)

貴族院議員

目賀田種太郎君

帝國財政學上の泰斗として夙に盛名を博し、學識手腕共に超群の譽ある目賀田種太郎君は舊幕臣目賀田幸助君の長男にして嘉永六年七月を以て生る、幼にして父君の夭折に逢ひ轉た悲愁に堪へざりしも奮然苦學力行に努め勝海舟先生の爲めに知られ其女婿となれり、明治の初め我政府が海外留學生を出すに當り君隱然是が監督の資格を以て歐米に派遣せられ、財政經濟の學を修め其歸朝するや大藏省に出仕して新進の敏腕を揮ひ、累進して横濱税關長となれり、當時は我國威未だ揚ら

ず治外法權の制抛去せられず外人の横暴極まれるものあり、君正理を説き法條を執り能く是れを制肘して矯正の功を擧げたり、日清戰役に際し外艦中戰時禁制品搭載の虞あるものは屬吏をして一々是を點檢せしむ、外人屢々抗議を爲すと雖も君帝國權利の有る所を説て常に是を屈伏せしめたり、其厚利の辣腕は長官の認むる所となり、税關長より關税局長に陞り更に主税局長に進めり、爾來帝國諸税海關税等各種の徵税に就て考察研究を遂げ其處理會て誤らず、功績大に擧れり、當時從四位勳二等に進み文官普通試驗委員長を兼ね名聲噴々たり、次で松方侯に隨伴して歐洲各國に航し財政經濟に關する精細の調査を遂げて歸朝し帝國議會に政府委員として財務上の辯明を爲し、上下兩院の歎服賞讃を博せり、是より前君は帝國臣民をして經濟思想を養成し國家財政の大意に通せしめんとし、田尻相馬の諸氏と謀り私立專修學校を設立せり、是れ蓋し此の種專門學校の嚆矢たるもの也、往年韓國財政の紊亂を來たすや帝國政府の命に依り同國政府最高顧問として派遣せられ、數年ならずして整理の實を擧げ以て鞏固たる財政の基礎を確



立せり、後功を以て華族に列し男爵を授けらる、現に貴族院議員として上院内の明譽を以て稱せられつゝあり、教育は君の専務に非ずと雖も常に其隆運を期望せる所也と言へり、(小石川區原町二七 電話番町九七五)

日本橋病院長 岡本武次君

帝都杏林界の明星として社會の信認偉大なる日本橋病院長岡本武次君は舊と是南海紀州の出身にして、和歌山藩の勤王家名出茂一郎氏の令男也、文久元年十二月を以て紀伊國那賀郡穴伏村に於て呱呱を擧ぐ幼にして穎敏聰悟早くも高野山小教院に入て修學し、更に近藤氏に親炙して漢籍を修む、明治九年花岡隨賢氏の門に入り外科醫術を専攻し後大阪病院に入り教師蘭醫、マンスヘルド氏に従ひ文明醫學を修め、同十一年五月解剖試験に及第し、更に和歌山病院に入て其蘊奥を極む、當時の令公病院に應み臨時試験を施行するや君優秀の結果、グレイ氏解剖講義圖を賞賜せらる、其超群の技量たるを知る可し、十二年十月縣費

を以て東京帝國大學醫學部に入れり、君先づ外國語を修めて正則に入らんと欲し是を縣會及縣廳に懇請する所ありしも、聽許せられざるを以て斷然其給費を辭し先づ醫學の研修を爲さんとして進學會に入り専ら獨逸語を修む、當時學資の缺乏に因り或は自炊或は他人の物置場等を借りて苦學し、食鹽又は一個の梅干のみを以て二三日間の食膳に供せしこと殆んど常の如しと云へり、十三年十一月縣廳に於て君の篤學を諒とし月額若干を補給せらる、十九年三月醫科大學に入り二十三年十一月全科を卒業して醫學士の稱號を領せり、次で第二醫院無給助手となり外科主任醫學博士佐藤三吉氏に就て外科の實地を研究し「ロペル」ト「ヨツボ」氏結核治療薬「ツヘルタリン」の發明あるや初て大學に於て結核病室を設け是が主任助手となり其研究に従事し、後醫科大學脚氣外來診療を命せられ同科に於て研究すること多年、二十九年九月職を辭し日本橋病院を創設し多年の蘊蓄を披瀝して一般患者の診療に當て名譽を博せり、後内務省醫術開業試驗委員を命せられ又濟生學舎の内科及臨床講義を擔任し、同醫事新報の内科講義を懇托せられて解々の開



へあり、又既往十一年前中波博士と共に鎌倉病院を開設し、殷盛以て現今に及べり、而て又和歌山縣文武學生の爲め、徳川頼倫侯を會長に頂ける南英育英會の評議員且幹事となり、雄谷中將有馬少將鎌田榮吉氏等と共に育英に盡瘁し、後進扶掖に努め、又日本内科學會の評議員に推され、今尙其職にあり、會ては東京醫會の副會長又は京橋支部長に撰まれ、多年其職に盡力を重ね、斯界の信望を得ること甚だ大也、又二十三年に於ける彼の尾濃大震災に當り、自費を以て被害地に臨み、罹災民を救助して社會の稱讃を得たり、又和歌山洪水に當り、率先して巨額の義捐を爲せし如き、其仁慈博愛の資性を流露せりと云ふ可し、君が少壯時代の苦學力行は到底現時苦學生輩の企及す可き處にあらず、君が始めて醫學に志せるは高野山小教院に於て、修學中父君の病魔に襲はると聞き、倉皇歸郷せるに醫學の未だ幼稚なるが爲め、遂に不幸を見るに至りしを慨し、醫術を修めて世の不幸を救助し、人生の幸福を保障せんと決意せられしに基、因せりと傳ふ、君が現今に至れる偉跡を討尋するに専ら仁慈博愛の發露に外ならず、洵に當代稀有の俊材たりと謂はざる可けんや

(日本橋區青物町三〇、三一番地、電話本局四四八、私邸荏原郡入新井町不入斗一四八二、電話芝五〇二)

書 伯 寺 崎 廣 業 君

明治書壇の巨擘寺崎廣業君は同姓廣知氏の長男にして、慶應二年二月を以て秋田市東根小屋町に生る、幼名忠太郎、徳郷と字し、秀齋宗山大嶺山人等の號あり、祖先は宇都宮氏より出で、笠間中務大輔常陸國寺崎村に住す、因て以て氏となす、笠間氏五世の孫廣良始めて佐竹侯に仕へ、君の祖父廣道氏に至て家老職を奉せり、父祖共に書を能くし、和歌を好めり、母は同藩の老職疋田氏の出にして、是又文筆に堪能なる系統を有せり、廣業君生るゝに臨み、其母離別して歸家せるを以て母家に生れて父の家歸り、専ら祖母の鞠育を受けて人と成れり、君資性、書才に富み、五歳にして初めて漢學習字を習ひ、傍ら彩筆を學べり、父君廣知氏潑瀾の氣概あり、夙に育英事業に従ひ、又實業に志あり、幾多の新事業に關して多大の失敗を招き、又起つ可からざるに至れり、君中學に入らば此の不



幸に遭遇し具さに艱難辛苦の徑路を辿れり、君十五歳にして保母長谷川氏に寄遇し麵麩の製造を輔け傍ら秋田醫學校に學ぶ、其勵精なるや君學ぶ所の醫書悉く筆記暗誦せりと傳ふ、然も到底其目的を達せざるを知り其嗜好せる書に因て一家を成さんと欲し、狩野派の畫家怡々齋小室秀俊の門に入り、居ること三歳にして技大に進めり、君既に十九歳前途を顧慮して長谷川家を出で近郷を巡遊す、遂に外戚鹿角郡長戸村義徳氏に頼り郡役所に奉職し又登記所の履書記に轉せり、偶々平瀬穂庵氏東京に在て會て君が拙きし畫を見て其秀才を惜み君の上京を慫慂せり、君慨然起て上京し穂庵氏を訪ふ、氏大に喜び一室を貸與し意の如く其技を練習せしむ、居ること四月にして他に寄遇せり、偶々尾尾銅山技師守田兵三氏に介せられて日光に遊び旅舎の爲めに揮毫すること一年有半にして歸京せり、恰も好し穂庵氏將に歸國せんとするにあり則ち東陽堂主人に紹介し繪畫叢誌臨摹、風俗畫報の挿畫を擔任せしむ、爾來大に其畫才を揮ひ錚々たる名聲を博せるに至れり、二十五年村田丹陵氏の姉背を迎へて一家を爲せり、次で君病魔に襲はれ

又火災に逢ひ其蓄積せる寫生縮寫粉本等悉く灰燼に歸せり、三十年日本繪畫展覽會に菊慈畫圖を出品して銀杯を領し、且つ優等者たる故を以て東京美術學校助教授に任せらる、三十一年故あつて同校々長岡倉氏と共に連袂して辭職し、岡倉橋本の二氏を助けて日本美術院を設立せり、爾來同校の爲めに大に氣焔を示し當時の大作は多く珍品として貴重せらる、三十三年居を筑波に移し畫塾を開く門生漸く集まれり、翌年下村觀山氏と共に再び東京美術學校に入り教授となり以て現今に及べり、此年月光燈影圖を出品して金牌を得たり、三十七年日露戰役に際し第二軍に従ひ各地に觀戰して歸省せり、三十八年居を神田區上白壁町に定め天籟畫塾の門生を扶掖して傳ます、四十年八月文部省美術審査委員に任せらる、四十三年五月君の畫作を集め上野公園に天籟會展覽會を開き社會の賞讃を得たり、君初め屢々居を移し屢々災厄に逢へり、然も不屈不撓の精力は竟に現今の大成を見るに至れり、君又明治二十三四年の交より大に頭角を顯はし共進會展覽會等に出品して賞牌を得るもの數ふるに違あらず、又毎會多く其審査委員を囑托せら



れ委員長たること數回也。以て其社會に推重せらるゝ所以を知る可し。四十三年七月より南清地方を巡遊して同年九月歸朝し得る所甚だ大也。四十四年文部省主催の美術展覽會に出品して多大の好評を博せり。君又屢々宮内省の御用命を拜し揮毫して常に佳賞せらる。斯界の巨擘として推重せらるゝもの亦宜なりと謂ふ可し。(神田區上白壁町五 電話 本局三九一五)

男 齋 澁 澤 榮 一 君

君は埼玉縣の出身にして維新後大藏省に出仕し顯要の地位に進みたるも財政方針に就き意見の行はれざるを以て井上伯と共に掛冠して在野の人となれり。爾來銀行會社の創立に盡瘁し實業界の巨擘として社會の推敬を受く其奮闘の經歷は青淵先生六十年史に詳か也。四十三年渡米實業團を組織し團長として一行と共に米國に渡航し彼我の親交を温めて歸朝せり。今や第一銀行頭取東京貯蓄銀行取締役會長東京銀行會議所會頭帝國劇場株式會社取締役會長東京市養育院長として努力し從

三位勳二等男爵の榮を擡へり。

實 業 家 安 田 善 次 郎 君

君は安田善悦氏の長男にして天保九年十月九日を以て生る。夙に上京して辛酸を嘗め元治元年小舟町に安田商店を開き明治九年第三銀行を創立して頭取に推され、同十三年安田商店を改めて安田銀行とし、二十年海防費を献納して従六位に叙せられ日露戰役の功に因り勳二等に叙せらる。四十四年濟生會に數十萬圓の義捐を爲せり。君が現今に至れる徑路は一に勤儉貯蓄にあり、後進の士以て鑑鑒とす可し。



明治四十五年六月一日印刷  
明治四十五年六月五日發行

正價金五圓

東京市神田區表神保町二番地

編輯者

松下長重

印刷者

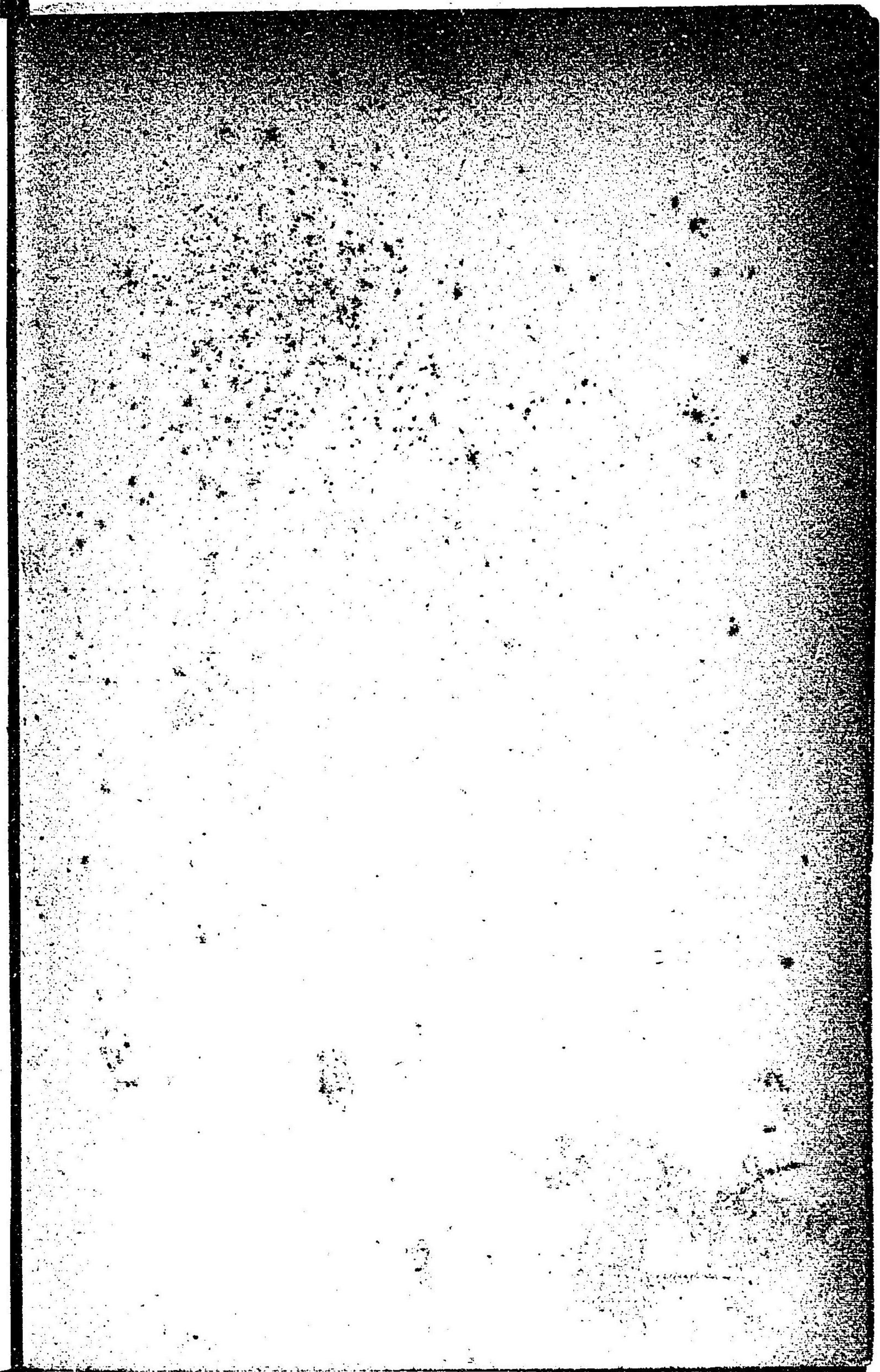
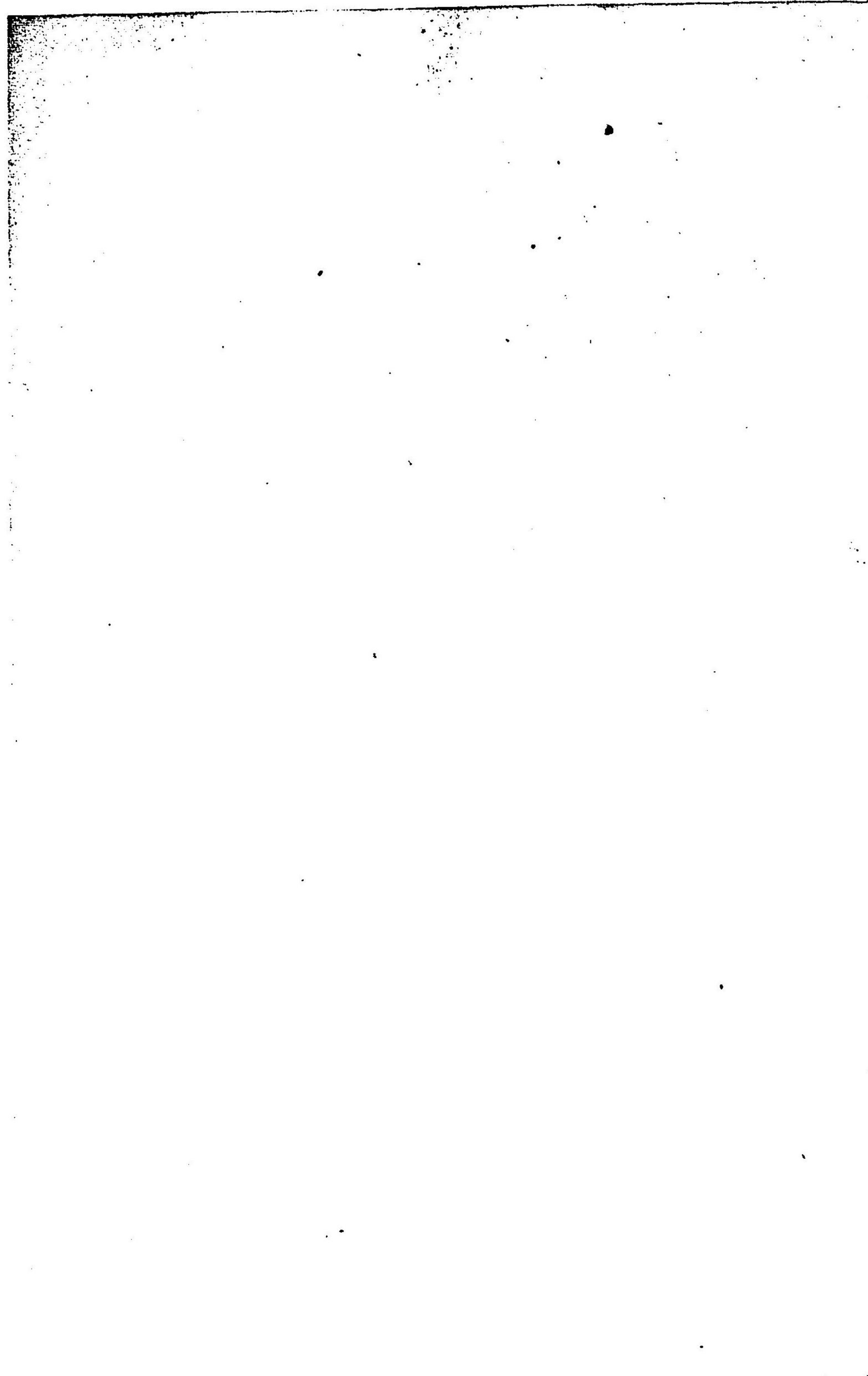
東京市京橋區築地二丁目三十番地  
川崎佐吉

印刷所

東京市京橋區築地二丁目三十番地  
川崎活版所

發行所  
東京市神田區表神保町二番地  
中央教育社



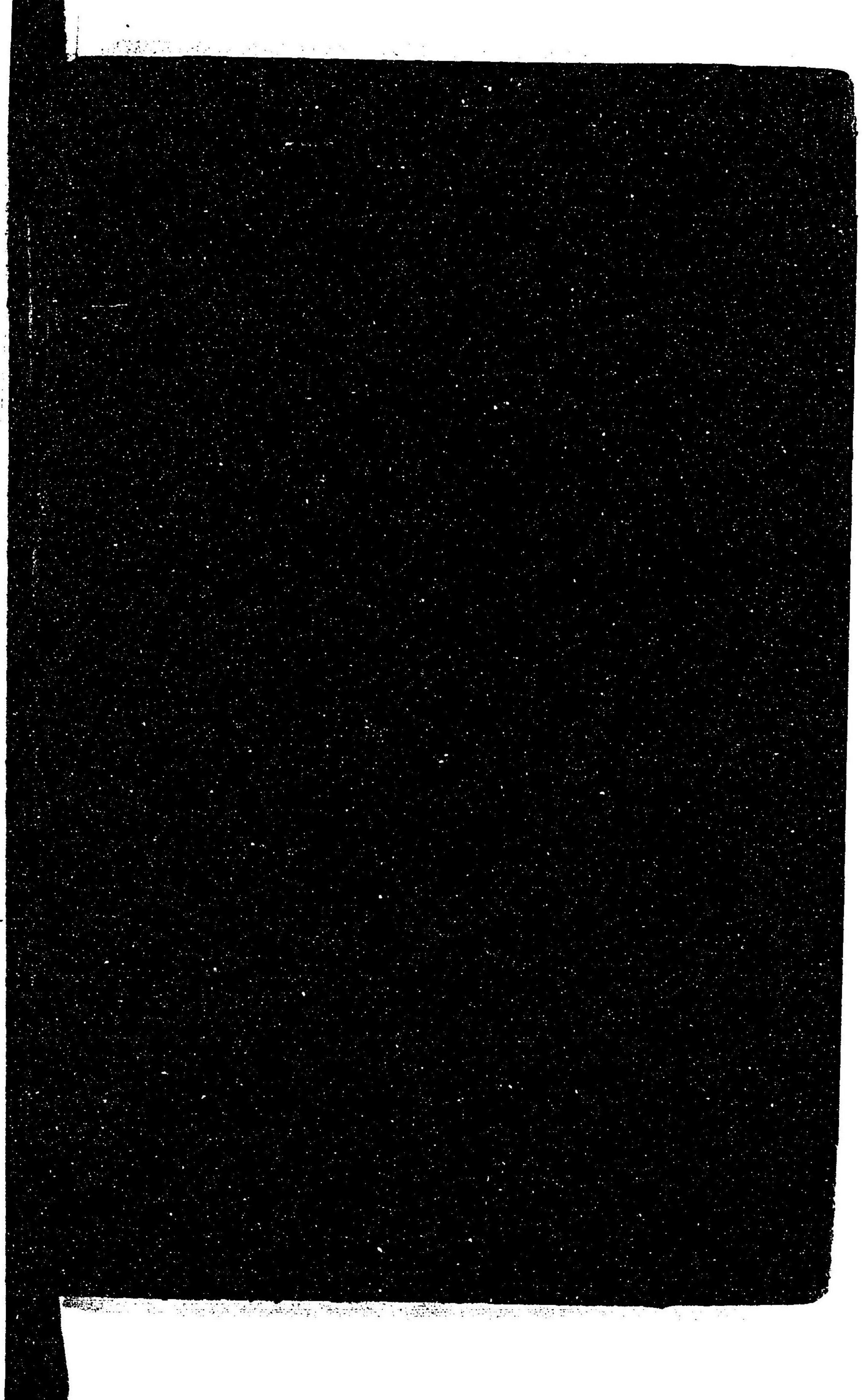






337  
18/2







003991-000-5

334-131

東洋成功軌範

松下 長重/編

M45

ACE-0281

